

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第142集

小路遺跡Ⅲ

寝屋川市

# 小路遺跡Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇六年三月

財団法人  
大阪府文化財センター

2006年3月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第142集

寝屋川市

# 小路遺跡Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



# 序 文

小路遺跡の前方後方形周溝墓及び讃良郡条里遺跡の絵馬や人面墨書土器の発見は、当センターが行っている第二京阪道路関連発掘調査の中でも、それぞれ重要な成果の一つに挙げられます。それは、寝屋川市域や同市を含む北河内地域のみならず、わが国の古墳時代の始まり、そして古代祭祀のあり方の解明に貴重な材料を提供したと言っても過言ではないでしょう。とりわけ、絵馬は報道でも大きく採り上げられ、衆目を集めたことは記憶に新しいところです。

本書に掲載する6箇所の調査区は、いずれも極めて小範囲のものです。しかし、その中には以前、調査ができず未調査区として残さざるを得なかった前方後方形周溝墓の一部、及び古代の祭祀が行われた自然河川の一部などを含んでいます。これらの調査は、道路工事の進捗に伴い、条件整備がなされて可能となったものです。前方後方形周溝墓はコーナー部2箇所を確認し、その全容を明らかにすることができました。また、古代の河川については人面墨書土器の資料を追加することができました。

さらに、本書には既刊の報告書の中で記載できなかった人面墨書土器と石器を、その後の整理作業の成果を含めて「補遺編」として所収いたしました。内容を更新する部分もあり、前書と併せ、資料としてご活用いただければ幸いです。

このたびの発掘調査も、国土交通省や西日本高速道路株式会社をはじめとする多くの皆様のご配慮とご協力のもとに遂行し、また、本書の刊行までこぎつけることができました。心より御礼申し上げますとともに、今後とも文化財調査にさらなるご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2006年3月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

1. 本書は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）及び第二京阪道路の建設に伴って実施した、大阪府寝屋川市所在の小路遺跡04-1及び04-2の発掘調査報告書である。なお、付章として讃良郡条里遺跡（その1）の出土遺物補遺編を掲載している。
2. 発掘調査は、道路建設を実施する日本道路公団関西支社（現 西日本高速道路株式会社）が、施工業者である第二京阪道路小路トンネル工事作業所 大成・間・福田特定建設工事共同企業体（04-1区）及び株式会社奥村組・株式会社テトラ 第二京阪道路高宮工事特定建設共同企業体（04-2区）に指示をし、大阪府教育委員会の指導のもと、当センターが職員を派遣するかたちで実施した。その派遣に係る費用及び遺物整理事業は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所から平成16年度事業〔第二京阪道路（大阪北道路）大尾・太秦遺跡他発掘調査（その2）〕及び平成17年度事業〔第二京阪道路（大阪北道路）讃良郡条里遺跡他遺物整理〕として委託を受けた事業に拠っている。事業契約期間は前者が平成16年4月1日から平成17年3月31日まで、後者が平成17年4月1日から平成18年3月31日までである。
3. 現地調査は当センター京阪調査事務所が担当し、平成16年7月から平成17年4月まで行った。調査終了後、引き続き報告書作成作業にとりかかり、本書の刊行をもって完了した。
4. 本調査に係る体制は次のとおりである。

〔平成16年度〕 調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、主査 山上 弘、技師 信田真美世、設計係長 山口和男、主査 鈴木芳則、主査 山下 篤、嘱託 竹内秀喜  
京阪調査事務所長 渡邊昌宏、主査 田口宗義〔事務〕、調査第一係長 宮野淳一、主査 泉本知秀、主査 平田 泰、主査 大楽康宏、主査 上野貞子〔写真〕、専門調査員 青柳佳奈

〔平成17年度〕 調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、調整係長 芝野圭之助、主査 山上 弘、主任主事 宮本哲男、技師 信田真美世、設計係長 松元政美、主査 鈴木芳則、主査 橋本眞一、技師 北村敦彦、嘱託 竹内秀喜 京阪調査事務所長 山本 彰、主査 田口宗義〔事務〕、調査第一係長 宮野淳一、主査 泉本知秀、主査 大楽康宏、主査 上野貞子〔写真〕、専門調査員 六辻彩香、調査第五係主査 平田 泰
5. 現地調査及び整理作業にあたっては次の諸機関、諸氏の指導と協力を得た。記して謝意を表す。

国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社枚方工事事務所  
西村 歩、三好孝一（当センター職員） 尾崎展之、鈴木孝治、瀬田由紀子、出口陽子、波岸初美、福田玲子、松浦暢久、松尾久子、與十田節子（以上、当センター非常勤職員）
6. 本書の執筆は、第1章第1節を宮野、第2節を六辻、第2章第1節の遺構記述を平田、第2節の遺構記述を泉本、小路遺跡各調査区の遺物記述を六辻、第3章を泉本が担当した。編集は六辻が行った。また、付章の讃良郡条里遺跡（その1）出土遺物の補遺編は、当センター調査報告書第109集『讃良郡条里遺跡（その1）』に掲載できなかった遺物を中心に報告している。執筆は調査を担当した京阪調査事務所調査第五係技師 長戸満男（現、財団法人京都市埋蔵文化財研究所）と専門調査員 三浦基行が担当した。
8. 本調査に係る出土品及び記録は、当センターで保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構図等の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を用いている。
2. 平面図は国土座標第Ⅵ系を基準としている。当センターでは平成15年度から世界測地系（測地成果2000）による測量実施しているが、今回の調査が旧測地系を用いた以前の発掘調査区に囲まれており、重要な遺構の連続を確認することに主眼があったため、遺構実測は日本測地系を用いて行った。したがって、本書に示す座標は日本測地系の座標値である。  
また、付章に讃良郡条里遺跡の平面図を掲載しているが、これも平成14年度に行った調査であり、やはり日本測地系である。ただし、図の四隅に新座標を斜体文字で示している。
3. 平面図に示す方位は、すべて座標北を示している。
4. 現地調査及び整理作業の進め方及び記録方法は、当センター『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年8月）に基づいて行っている。
5. 土色の表記は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
6. 遺構名及び遺構番号は、基本マニュアルに従って現地調査時に付与したものを原則として使用している。変更したものについては、本文中にその旨を明記して対照できるようにした。
7. 遺物実測図及び遺構図の縮尺は各図に示している。
8. 本書の記述にあたっては、執筆担当者間での文章表現や用語の統一はとくに図っていない。

# 目 次

序文

例言

凡例

第1章 調査の経緯と調査方法	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査方法	3
第2章 調査成果	7
第1節 小路遺跡04 - 1	7
第2節 小路遺跡04 - 2	19
第3章 まとめ	33
付 章 讃良郡条里遺跡（その1）の出土遺物〈補遺編〉	43

# 挿 図 目 次

図1	調査区と既往調査名称	2
図2	地区割り概念図	4
図3	地区割り図	4
図4	今回の検出遺構と周辺の遺構（古墳時代～奈良時代）	5
図5	04-1-1 平面図	7
図6	04-1-1 出土遺物	8
図7	04-1-2 平面図	9
図8	04-1-2 断面図	9
図9	04-1-2 出土遺物（1）	10
図10	04-1-2 出土遺物（2）	10
図11	04-1-3 平面図	11
図12	04-1-3 断面図（調査区東壁）	11
図13	04-1-3 出土遺物	12
図14	04-1-4（東半・西半） 平面図	12
図15	04-1-4 断面図（調査区北壁）	13
図16	04-1-4（東半） 出土遺物（1）	13
図17	04-1-4（東半） 出土遺物（2）	14
図18	04-1-4（西半） 出土遺物（1）	16
図19	04-1-4（西半） 出土遺物（2）	17
図20	04-1-4（西半） 出土遺物（3）	18
図21	04-1-4（西半） 出土遺物（4）	18
図22	04-2-1 平面図	19
図23	04-2-1 2溝断面図（調査区南東壁）	20
図24	04-2-1 2溝遺物出土状況	21
図25	04-2-1 3溝平面・断面図	22
図26	04-2-1 出土遺物（1）	23
図27	04-2-1 出土遺物（2）	25
図28	04-2-2 遺構平面図	26
図29	04-2-2 東西断面図	27
図30	04-2-2 2溝断面図（調査区東壁）	28
図31	04-2-2 出土遺物（1）	30
図32	04-2-2 出土遺物（2）	31
図33	04-2-2 出土遺物（3）	32
図34	小路遺跡・周辺遺跡分布図	34
図35	04-1-2・3 調査区と既調査区遺構配置図	37
図36	04-1-4 調査区と既調査区遺構配置図	40

図37 小路遺跡周辺讚良郡条里復元図 .....	41
付 章	
図38 石器実測図 (1) .....	43
図39 石器実測図 (2) .....	44
図40 石器実測図 (3) .....	45
図41 石器実測図 (4) .....	46
図42 石器実測図 (5) .....	47
図43 人面墨書土器実測図 (1) .....	51
図44 人面墨書土器実測図 (2) .....	53
図45 人面墨書土器実測図 (3) .....	55
図46 人面墨書土器実測図 (4) .....	56
図47 人面墨書土器実測図 (5) .....	57
図48 人面墨書土器実測図 (6) .....	58
図49 人面墨書土器実測図 (7) .....	59
図50 人形・斎申実測図 .....	61
図51 周辺遺跡分布図 .....	64
図52 調査地周辺地形図 .....	65
図53 調査区配置図 .....	65
図54 基本層位図 .....	66
図55 A区 第5遺構面全体図 .....	66
図56 A・B区 第4遺構面全体図 .....	67

## 表 目 次

表1 讚良郡条里遺跡(その1)出土石器一覧表 .....	49
------------------------------	----

## 図 版 目 次

図版1	1	04-1-1	全景(西から)	2	同上(北から)
図版2	1	04-1-2	調査区から東方を望む(南西から)	2	04-1-2 全景(南西から)
図版3	1	04-1-2	東半遺構検出状況(北西から)	2	04-1-2 遺物出土状況(南から)
図版4	1	04-1-2	周溝堆積状況(南から)	2	同上(南東から)
図版5	1	04-1-2	土嚢による周溝肩部の保護(東から)	2	同上(南西から)
図版6	1	04-1-3	全景(北から)	2	同上(北西から)
図版7	1	04-1-3	周溝堆積状況(西から)	2	04-1-3 土嚢による周溝肩部の保護 (西から)
図版8	1	04-1-4	(東半)上層全景(西から)	2	04-1-4 (東半)下層全景(西から)
図版9	1	04-1-4	(東半)最下層遺構検出状況(南東から)	2	同上(北東から)



- 図版10 1 04 - 1 - 4 (西半) 全景 (南から) 2 同上 (西から)
- 図版11 1 04 - 2 - 1 1、2、3 溝全景 (北から) 2 同上 (北から)
- 図版12 1 04 - 2 - 1 1、2 溝遺物出土状況 (西から) 2 同上 (北から)
- 図版13 1 04 - 2 - 1 3 溝全景 (北から) 2 04 - 2 - 1 3 溝遺物出土状況
- 図版14 1 04 - 2 - 2 調査区から高宮廃寺を望む (南から) 2 04 - 2 - 2 1 溝全景 (南から)
- 図版15 1 04 - 2 - 2 1 溝全景 (北から) 2 04 - 2 - 2 4 井戸 (西から)
- 図版16 1 04 - 2 - 2 1 溝肩部 地蔵 (東から) 2 04 - 2 - 2 1 溝断面 (北から)
- 図版17 1 04 - 2 - 2 2 溝 (西から) 2 04 - 2 - 2 2 溝断面 (北西から)
- 図版18 1 04 - 2 - 2 5 溝 (北西から) 2 04 - 2 - 2 流木出土状況 (南西から)
- 図版19 1 04 - 1 - 1 出土遺物 2 04 - 1 - 2 出土遺物
- 図版20 1 04 - 1 - 3 出土遺物 2 04 - 1 - 4 (東半) 出土遺物 3 04 - 1 - 4 (西半) 出土遺物 (1)
- 図版21 1 04 - 1 - 4 (西半) 出土遺物 (2) 2 04 - 1 - 4 (西半) 出土遺物 (3) ・人面墨書土器
- 図版22 04 - 1 - 4 (西半) 出土遺物 (4)
- 図版23 04 - 2 - 1 出土遺物
- 図版24 04 - 2 - 2 出土遺物 (1)
- 図版25 04 - 2 - 2 出土遺物 (2)
- 図版26 04 - 2 - 2 出土遺物 (3)
- 図版27 04 - 1 ・04 - 2 出土石器
- 図版28 04 - 1 ・04 - 2 出土木製品
- 図版29 讃良郡条里遺跡 (その1) 出土遺物 (1) 人面墨書土器 [1]
- 図版30 讃良郡条里遺跡 (その1) 出土遺物 (2) 人面墨書土器 [2]
- 図版31 讃良郡条里遺跡 (その1) 出土遺物 (3) 人形・斎串

# 第1章 調査の経緯と調査方法

## 第1節 調査の経緯

寝屋川市国守町から小路を経て高宮に到る地域は、市域東部の丘陵地から西部の低湿地へと移行する部分にあたる。当センターが発掘調査に着手した当初、当該地の第二京阪道路の路線予定地には、低地に讃良郡条里遺跡及び同遺跡の東端に一部重複するかたちで小路遺跡が周知されていたにすぎない。そこで、平成12年度に小路遺跡から丘陵地に向けて確認調査を実施し、遺構と遺物の存在が連続と続いていることを明らかにした。その結果を受け、小路遺跡の北東部が、北にある高宮遺跡の範囲拡大とされ、丘陵部分が新規発見の大尾遺跡として周知されることになった。

ところで、平成12年度から行っている発掘調査では、地元住民の利便性を確保するため、道路予定地内の道路や水路を調査地から除外してきた。しかし、調査終了地区から道路工事が着手されるに至り、残された部分の調査が急務となった。すでに平成15年度には大尾遺跡や高宮遺跡で里道や市道部分の調査を実施し、その成果は『太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 高宮遺跡』として刊行している。本書もまた、小路遺跡において同様に残されていた水路と里道などのうち、大阪府教育委員会により発掘調査が必要と判断された地区の調査報告である。

調査は、大阪府教育委員会の指示を受けた国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所と日本道路公団関西支社（当時）が、すでに当該地域で道路工事を着手している施工業者に対し、工種のひとつに発掘調査を追加するかたちで実施した。なお、小路遺跡の範囲内に道路工事の工区境があつて施工業者が異なるため、当センターの発掘調査名称も小路遺跡04-1と小路遺跡04-2に分けている。

現地調査は、調査が可能となった04-2から着手し、期間をおいて04-1を実施した。当初は両調査区とも平成16年度中に終了する予定であったが、04-1-4区が送電鉄塔敷地の一部にかかつており、掘削方法協議や用地買収の手続きに時間が費やされたため16年度中に終了せず、一部は平成17年度事業として行なった。

04-1調査区は、小路遺跡（その3）発掘調査当時は市の公園であった部分（04-1-1）、小路遺跡（その3）の1A区で検出した前方後方形周溝墓の後方部北東コーナーが里道水路にかかるため調査ができなかった部分（04-1-2）、同様に里道にかかり調査できなかった同周溝墓の前方部南西コーナー部分（04-1-3）、讃良郡条里遺跡（その1）の北側にある用水路で、古代の絵馬、人形木製品、人面墨書土器が出土した河川が続いている部分（04-1-4）の4箇所である。

一方、04-2調査区は小路遺跡（その2）発掘調査当時にはまだ民間の資材置き場として利用されていた部分（04-2-1）と、小路遺跡（その2）と讃良郡条里遺跡（その3）の境にある用水路部分（04-2-2）の2箇所に分かれている。

なお、冒頭に記したように今回の調査範囲は讃良郡条里遺跡と小路遺跡が重複している。もちろん、それは遺跡の時代や性格が勘案されたものだが、当センターの調査は現況での土地区画をもとにして調査可能な部分から随時着手したため、調査名が入り組んだ状態になっている。したがって、例えば、絵馬等が出土して祭祀が行われていたと考えられる自然河川は、今回の小路遺跡04-2-1区から小路遺跡（その2）調査区を経て讃良郡条里（その1）調査区を通り、小路遺跡04-1-4区に到っているこ

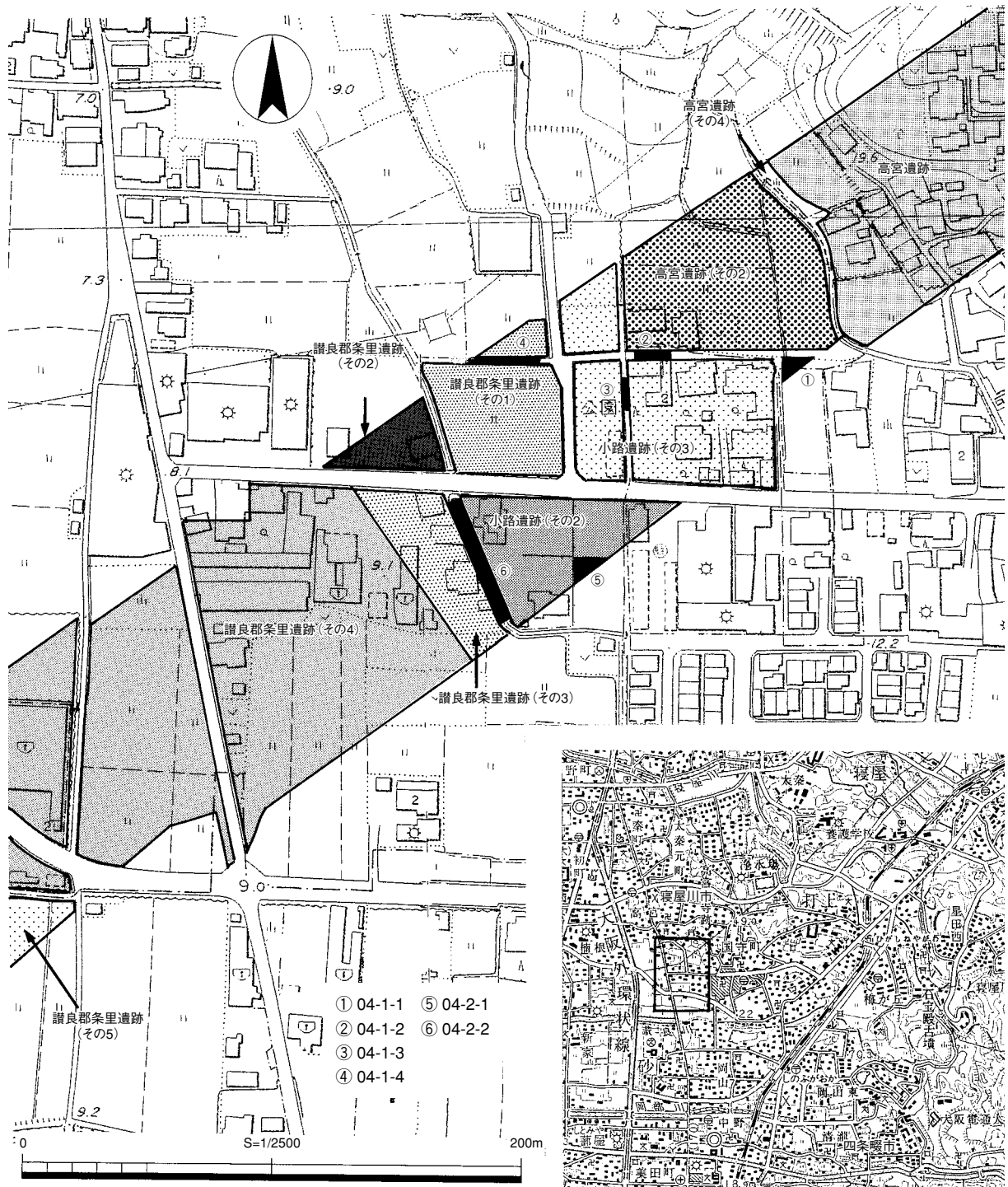


図1 調査区と既往調査名称

となる。既調査区との位置関係は図1に示している。

調査の結果、現況水路部分は大きく削られていたものの、予想通りに前方後方形周溝墓のコーナー部を確認し、また古代の河川から人面墨書土器や馬歯など祭祀にかかわった遺物を検出することができた。

なお、前方後方形周溝墓コーナーについては大阪府教育委員会の指示により保存区域とされ、溝肩から斜面にかけて土嚢を積んで位置を示したうえ、座標による位置図と断面図を事業者に提供した。調査地周辺の歴史的及び地理的な環境については、次頁に示す各報告書にすでに記述されているところであり、それらに拠られたい。

## 第2節 調査方法

調査を進めるにあたっては、(財)大阪府文化財センター「遺跡調査基本マニュアル(暫定版)」に準拠し、遺物登録、遺構登録、遺構実測図登録、地区割りをを行った。

調査地区の地区割りは、出土遺物の取り上げ単位、遺構実測図、撮影記録などの位置記録に用いた。基準線に関しては、当センターで現在、地区割りをを行う際に世界測地系(測地成果2000)を使用しているが、以前の調査当時は日本測地系を使用していたことから、本調査では日本測地系(改正前)を使用することとし、区割りは次の大から小への6段階で行った(図2)。

第Ⅰ区画：大阪府の南西端  $X = -192000$ ・ $Y = -88000$ を基準とした南北6km、東西8kmの区画である。表示は南北をA～O、東西を0～8とし、表示方法は南北、東西の順とする。

第Ⅱ区画：第Ⅰ区画内を南北1.5km、東西2kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。南西端1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16とする平行式の地区名を表示。

第Ⅲ区画：第Ⅱ区画内を100m単位で南北15、東西20に区画する。表示は北西端を基点に南北A～O、東西を1～20とし、表示方法は南北、東西の順とする。

第Ⅳ区画：第Ⅲ区画内を10m単位で区画。縦、横各10。表示方法は北東端を基点に南北a～j、東西1～10とし、表示方法は南北、東西の順とする。

第Ⅴ区画：第Ⅳ区画内を5m単位で区画。表示は北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳとする。

第Ⅵ区画：第Ⅳ区画の北東端を基点とし、西へはW+○m○cm○mmと必要な桁まで表示。また、W1m、W2m・・・のように、微細な区画設定も可能である。

今回の調査範囲である小路04-1は第Ⅲ区画内のF9・F10・G10、小路04-2はG10の範囲に収まる(図3)。

通常、遺物の取り上げなど調査で使用する最低範囲は第Ⅳ区画までとし、必要の応じ下位の範囲を使用した。ラベル記入などは、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画を表示することを原則とする。

### 参考文献

#### 《高宮遺跡》

(財)大阪府文化財センター 2004 『高宮遺跡』-遺構編- (財)大阪府文化財センター調査報告書 第115集

(財)大阪府文化財センター 2005 『太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 高宮遺跡』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第131集

(財)大阪府文化財センター 2004 『高宮遺跡(その2)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第112集

#### 《小路遺跡》

(財)大阪府文化財センター 2004 『小路遺跡(その2)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第122集

(財)大阪府文化財センター 2004 『小路遺跡(その3)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第113集

#### 《讃良郡条里遺跡》

(財)大阪府文化財センター 2004 『讃良郡条里遺跡(その1)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第109集

(財)大阪府文化財センター 2003 『讃良郡条里遺跡(その2)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第98集

(財)大阪府文化財センター 2004 『讃良郡条里遺跡(その3)』 (財)大阪府文化財センター調査報告書 第114集

※ 讃良郡条里遺跡その4・その5は現在報告書作成中である。

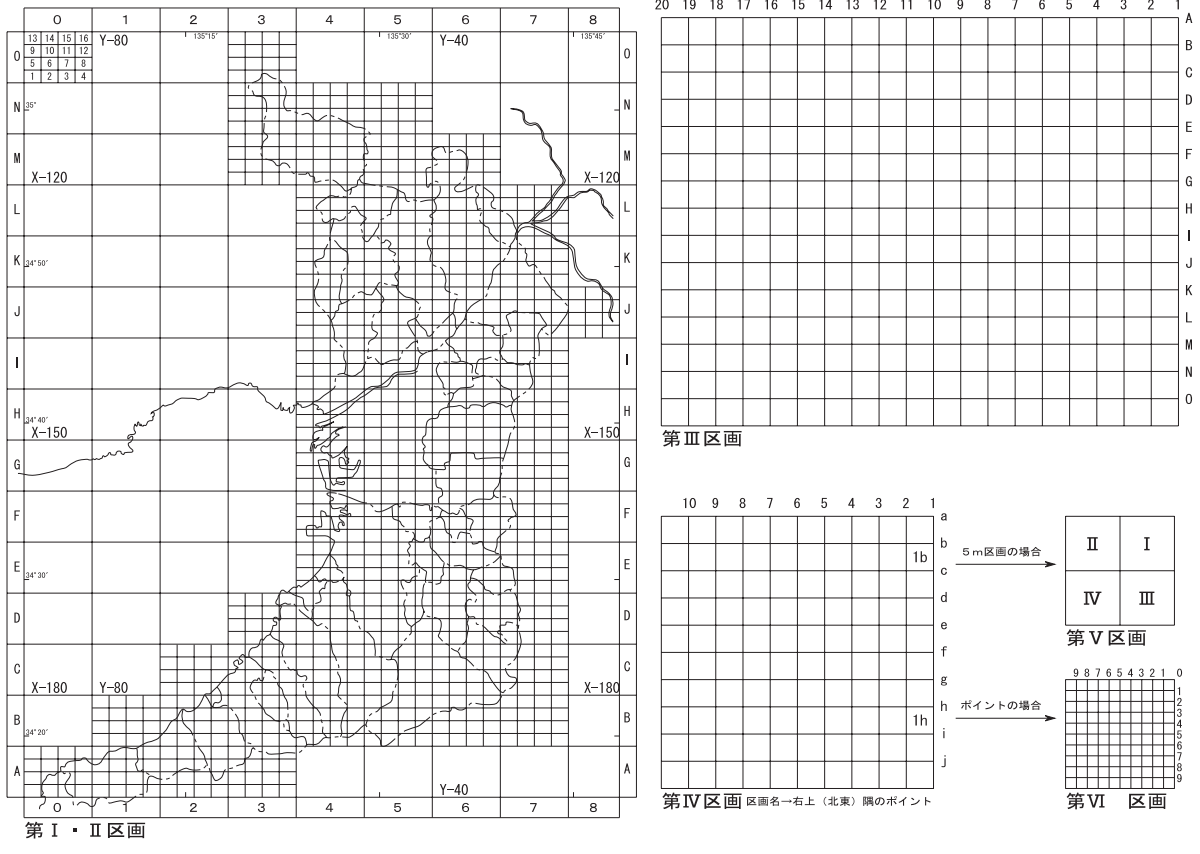


図2 地区割り概念図

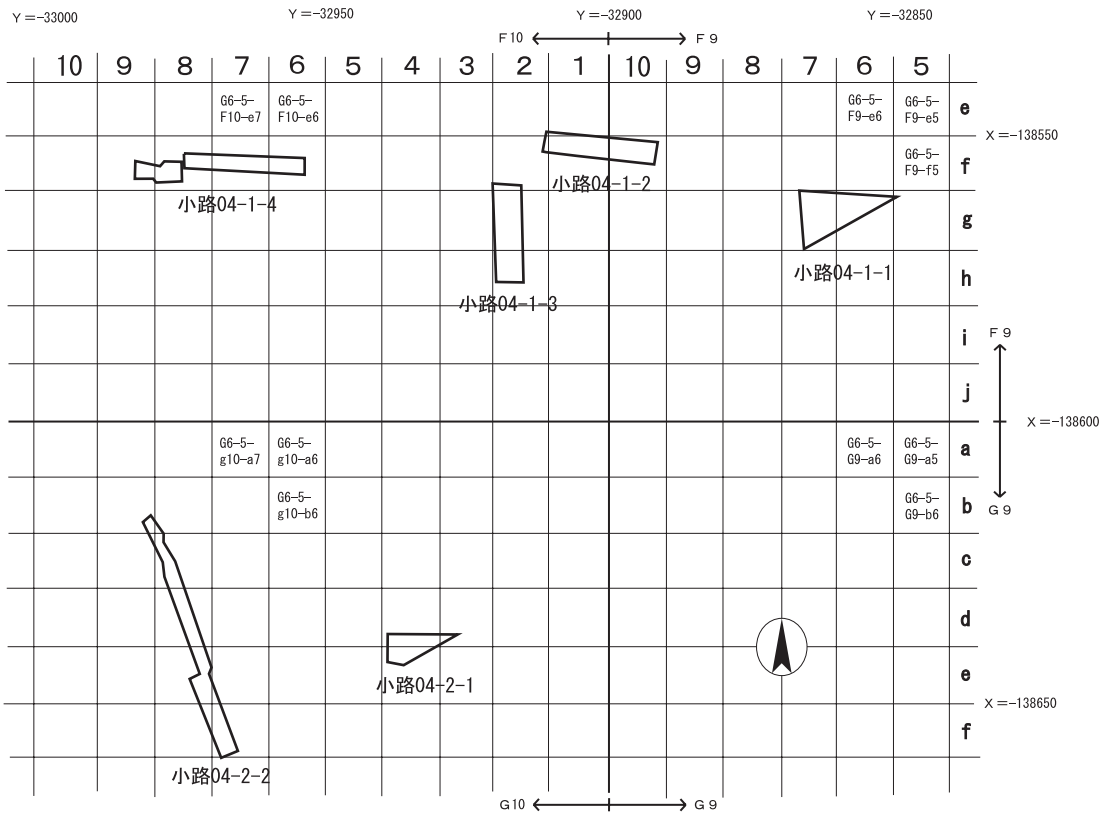


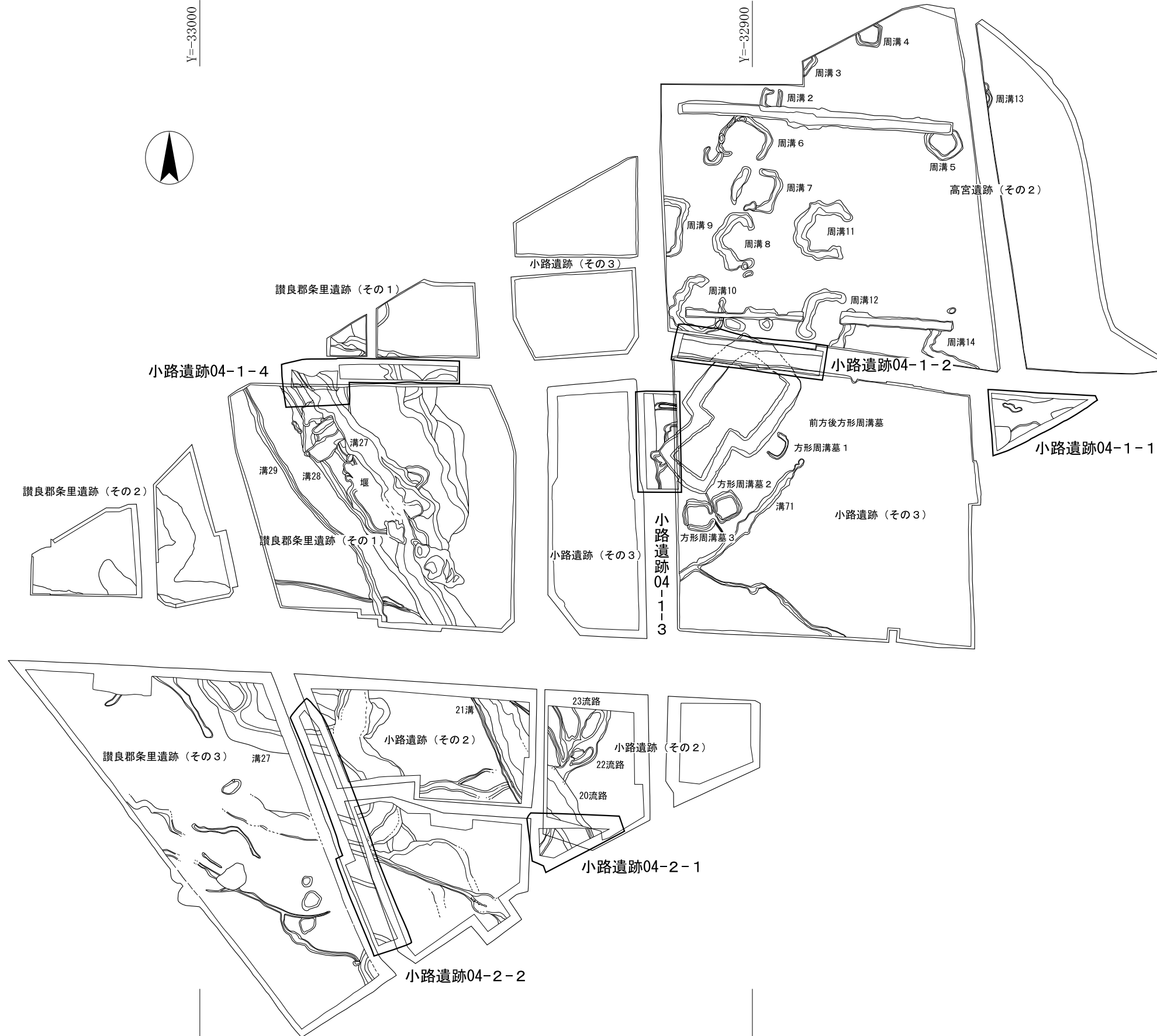
図3 地区割り図

Y=-33000

Y=-32900

Y=-32800

X=-138500



X=-138600

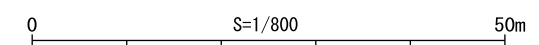


図4 今回の検出遺構と周辺の遺構 (縄文時代~奈良時代)

## 第2章 調査成果

### 第1節 小路遺跡04-1

04-1-1～04-1-4は近・現代の耕作土層、近世、中世、古代に至る耕作に由来する土層が重なって堆積し、層厚は1.0m前後が確認される。

04-1-1～04-1-3では古墳時代初頭の遺構が地山とみられる黄灰色粘土層をベースに成立する。このほぼ同一面で、縄文時代前期とみられる蛇行した小流路群が確認された。この地区は北東方向から南西方向への傾斜が認められ、堆積土層の流失が激しく、明瞭な縄文時代の遺物包含層が検出されないものとみられよう。

04-1-4では上層で中世以降の耕作土層が確認され、このオリーブ灰色の土層をベースに中世の土坑が検出される。古代の流路はオリーブ黒色の土層をベースに成立している。このオリーブ黒色泥土層には縄文時代前期の土器片やサヌカイトチップを包含しており、当該期の遺物包含層と認められる。層厚は0.15m～0.2mを測る。この層の約0.5m下には層厚0.2m前後の黒褐色粘土の堆積層が認められ、この土層に覆われて落込み遺構を覆っている。この遺構から縄文土器の破片が出土しており、堆積土層は縄文時代前期以前に遡るものとみられる。

#### 04-1-1 (図5・6、図版1・19)

1溝は調査区の北端に検出した。既設用水路の前身とみられ、コンクリート護岸の下層で検出され、杭などによる護岸痕跡が認められる。流下方向は既設用水路と同一で、西に流れる。3落込みは調査区の南辺で検出された。東西5m前後、南北2m以上、深さ0.3mを測る。調査区の北側では、平成14年度高宮遺跡(その2)の調査が実施され、古代の建物、中世の建物、井戸などが検出されている。今回の調査地は既設用水路を挟んで一段低くなっていることから、削平を受けたものと観察される。

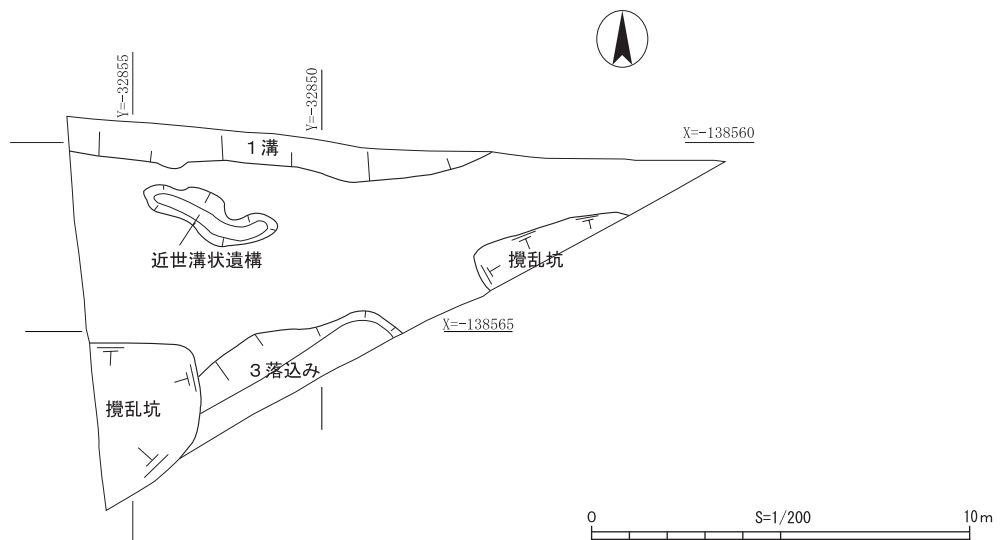


図5 04-1-1 平面図

04-1-1 出土遺物 (図6、図版19) 本調査区では9点を図化した。1~7は1溝、8・9は包含層からの出土である。

1は須恵器壺の口縁部で、復元口径は23.4cmである。2は瓦器碗で、口縁部・体部ともにミガキ調整を施している。口縁端部内面には1条の沈線を施している。復元口径は15.1cmである。3は東播系須恵器の片口鉢で、底部は欠損する。内面は横方向のナデの後に、不定形方向のナデを施している。復元口径は27.0cmである。4は陶器壺で、外面に灰被りが顕著に見られる。無釉で、色調は灰色である。胎土はやや粗である。5は備前焼播鉢で、内外面ともに横方向のナデによる調整を施し、内面には8条単位の播目を施している。焼成不良で、色調は灰白色である。胎土は密である。復元口径は23.8cmである。6は備前焼甕の口縁部で、口縁端部は外面方向に折り曲げ、肥厚させる。内面に窯印と思われるヘラ描の決線を施している。無釉で、色調は灰褐色である。胎土は密で、細かい砂礫を含む。7は瓦質の火舎で、菊花文の型押しを施している。内面は指オサエが明瞭に確認できる。8・9は平瓦で、ともに凹面は布目痕、凸面には縄目が見られる。9は側面に不定方向のナデの調整を施している。

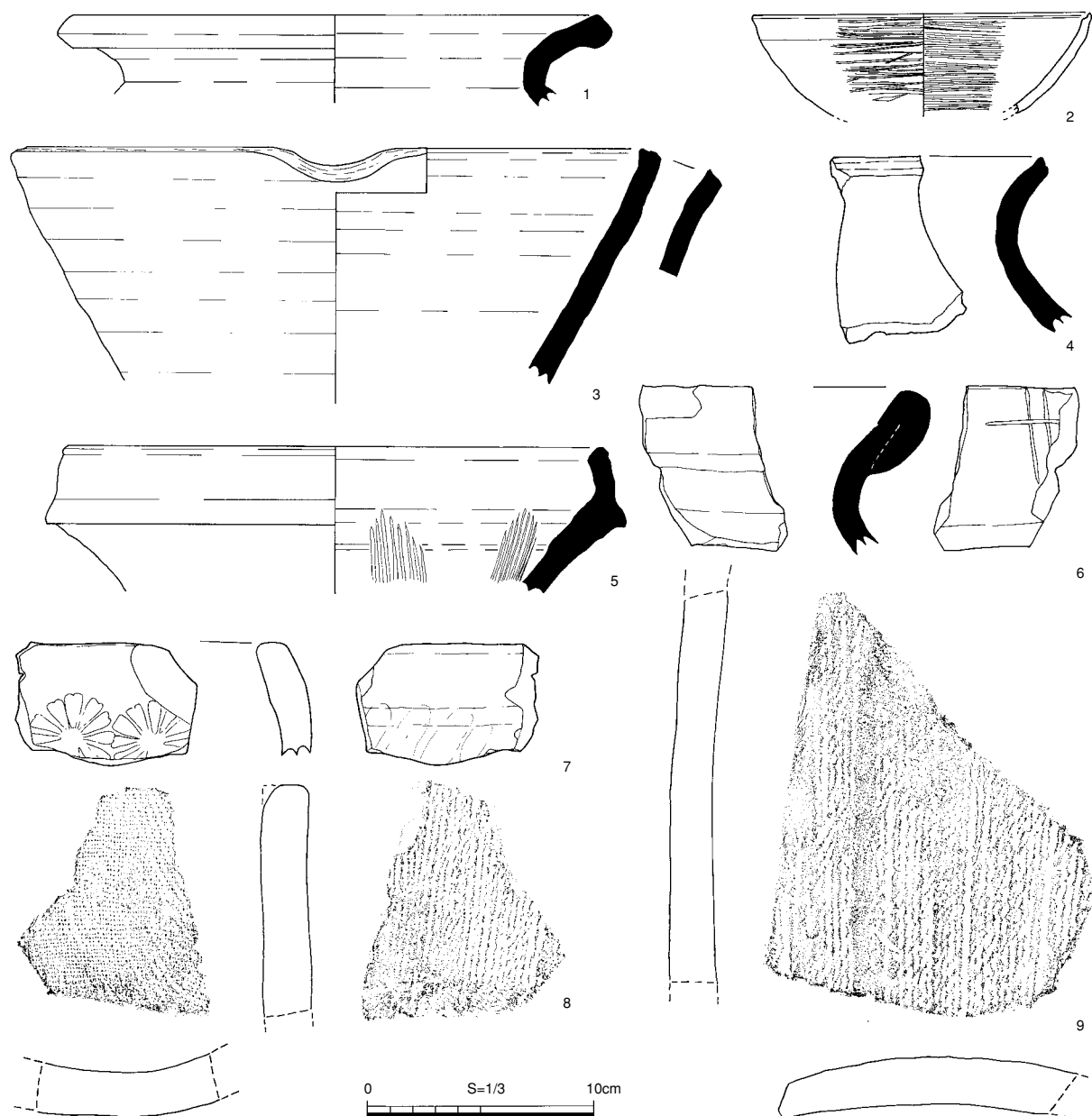


図6 04-1-1 出土遺物



04-1-2 (図7~10、図版2~5・19)

1溝は現代水路の直下にあり東西方向に走る。瓦器片等が出土、中世~近世に属する。2溝は調査区中央で検出、南東方向から南西方向に屈曲する。幅約3m、深さ0.3mを測る。土壌化した黒褐色土が堆積した、前方後方形周溝墓の後方部北側から北西角の周溝部分である。4井戸と1溝で攪乱をうけ4分の1しか残存しないが北西角付近で3周溝内土坑を検出した。径約1.5m、深さ約0.6mを測る。

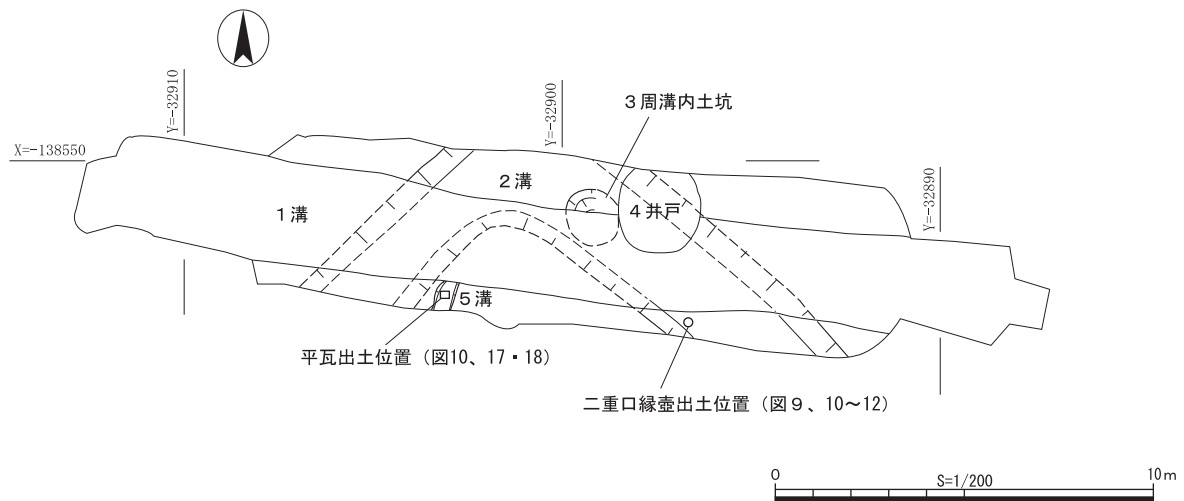


図7 04-1-2 平面図

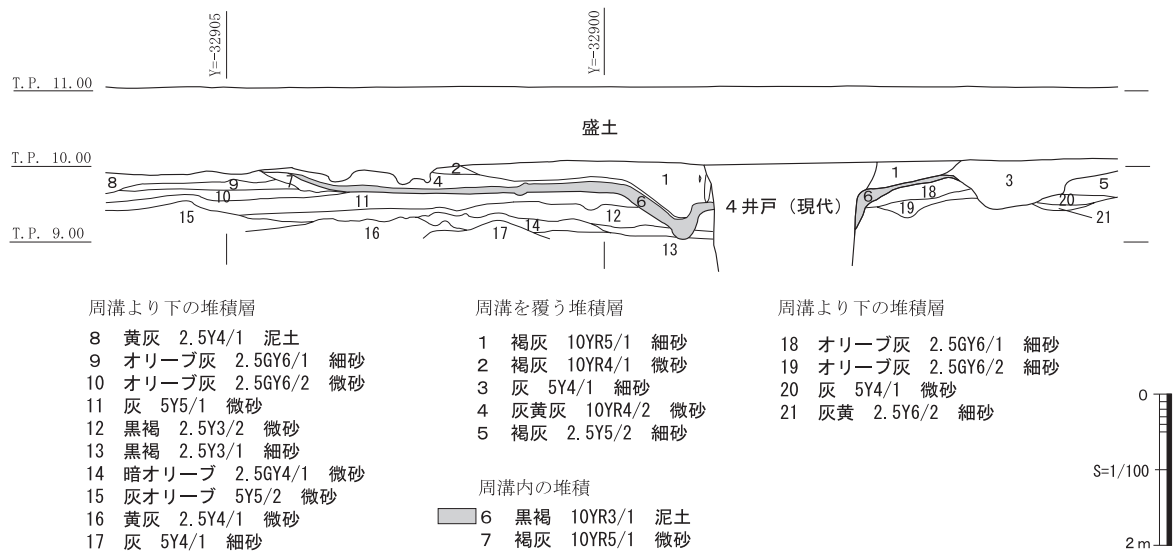


図8 04-1-2 断面図

04-1-2 出土遺物 (図9・10、図版19) 本調査区では9点を図化した。10~12は2溝、13~17は包含層、18は5溝からの出土である。

10~12は土師器壺で、同一個体であると考えられる。10は口縁部である。外面の調整は摩滅しているため明瞭ではないが、口縁端部はナデの調整を施している。内外面ともに櫛描波状文を施している。復元口径は16.0cmである。11は頸部である。外面はミガキ、内面はナデの調整を施している。12は肩部で

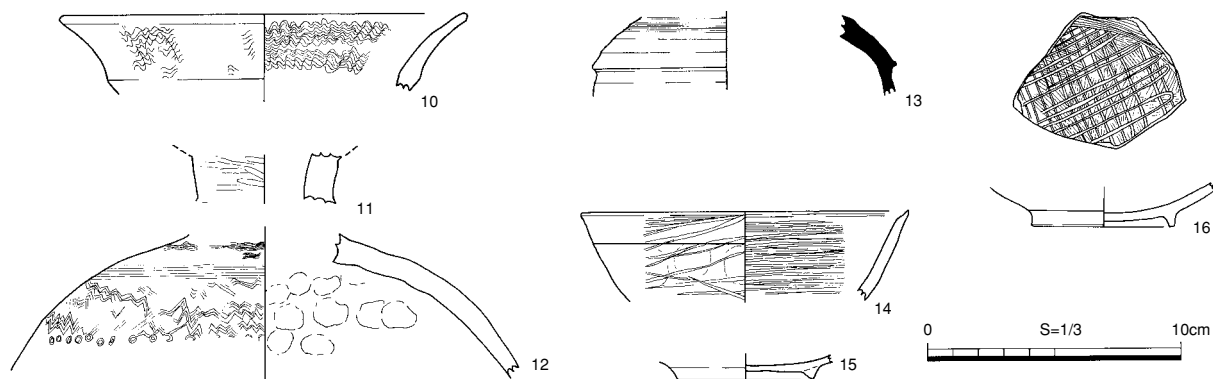


図9 04-1-2 出土遺物(1)

ある。内外面ともにミガキ調整を施している。肩部内面上方では指頭痕が残る。上方から、波状文、直線文、波状文、竹管文の順に文様を施している。波状文は4条を単位とし、同一原体で施している。13は須恵器杯蓋である。14~16は瓦器碗である。14は内外面ともにナデの後、ミガキの調整を施している。体部内面には指オサエが明瞭に残る。復元口径13.0cmである。15は底部のみ残存する。内外面ともに摩耗が激しく調整は不明である。16は外面に焼成時ススが付着しており、調整は不明瞭であるが、体部ではナデの痕跡が確認できる。内面は、底部をハケで調整した後、格子目状の暗文を施している。体部は、横方向のミガキを施している。17・18は平瓦である。17は凹面では布目痕、

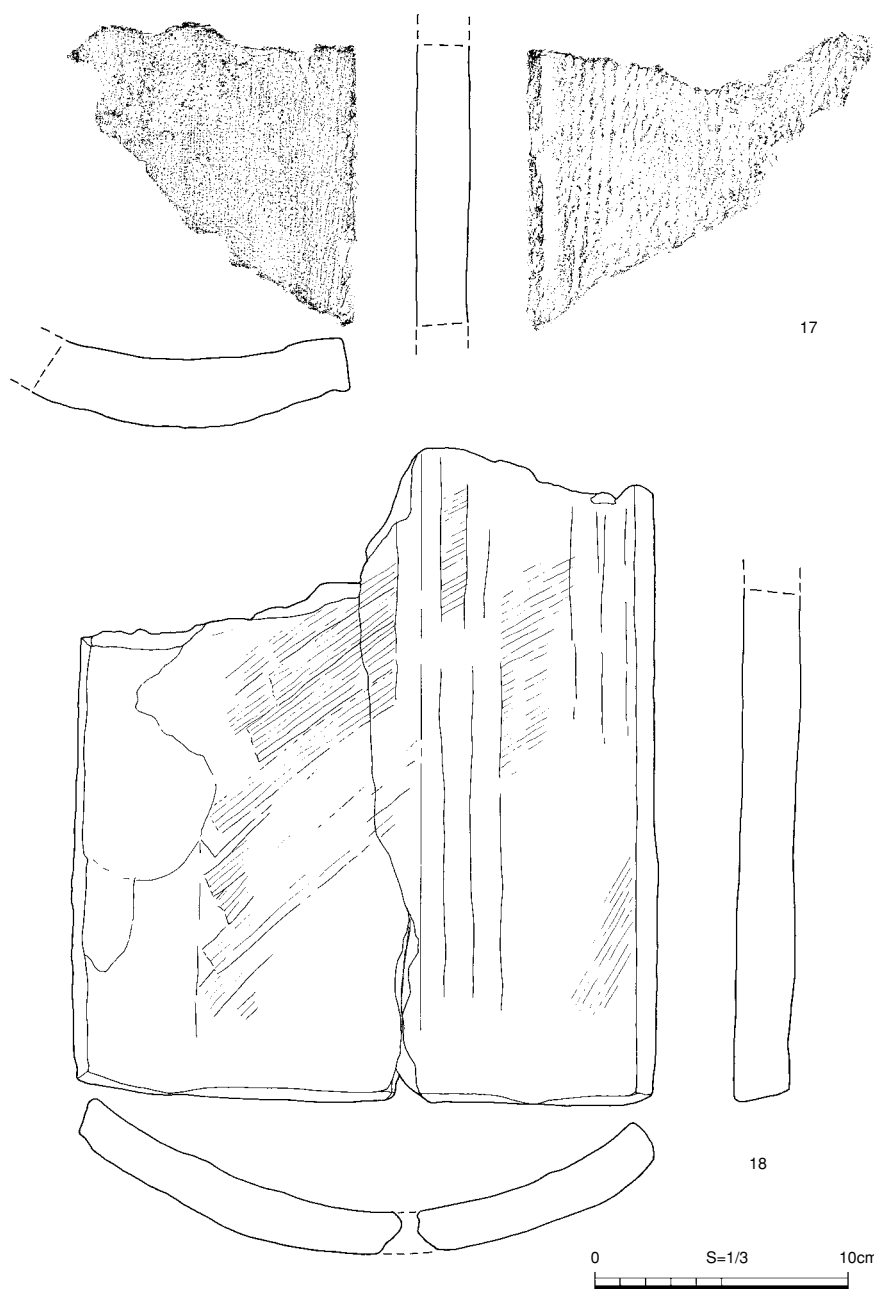


図10 04-1-2 出土遺物(2)

凸面では、縄タタキが確認できる。側面はナデの調整を施している。18は凹面ではナナメハケの後、ナデにより調整を施している。凸面では、布目痕が確認できる。側面は横方向のナデの調整を施している。胎土は粗、赤色斑粒を含む。

04-1-3 (図11~13、図版6・7・20)

1溝は南東方向から延びて、北東方向に屈曲する。幅 2.5m、深さ 0.3mを測る。土壌化した黒褐色の堆積層が認められ、前方後方形周溝墓の周溝と確認できる。

3溝は調査区北側、東方向から延びて、南方向に流下する。1溝に切られて検出され、1溝以前の時期に比定される。幅 0.5m~0.7m、深さ 0.5mを測る。

1溝は平成14年度調査の小路遺跡(その3) 1A区検出の前方後方形周溝墓の前方部南西端の周溝を確認したものである。調査区の西側を南北に現代水路が走り攪乱された可能性もあったが、攪乱は周溝部に至らず良好に遺存していた。調査後に土嚢で周溝内外の肩部を保護し、溝部と調査区全体を良質の砂で埋め戻し保存を講じている。

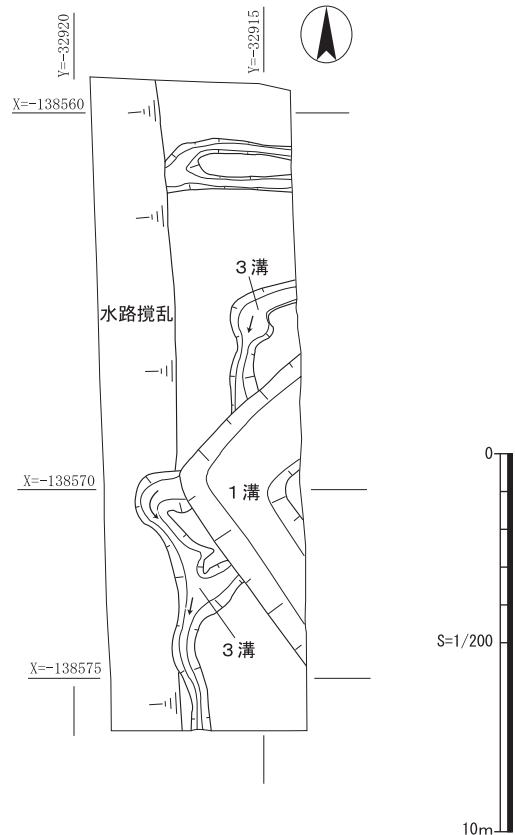


図11 04-1-3 平面図

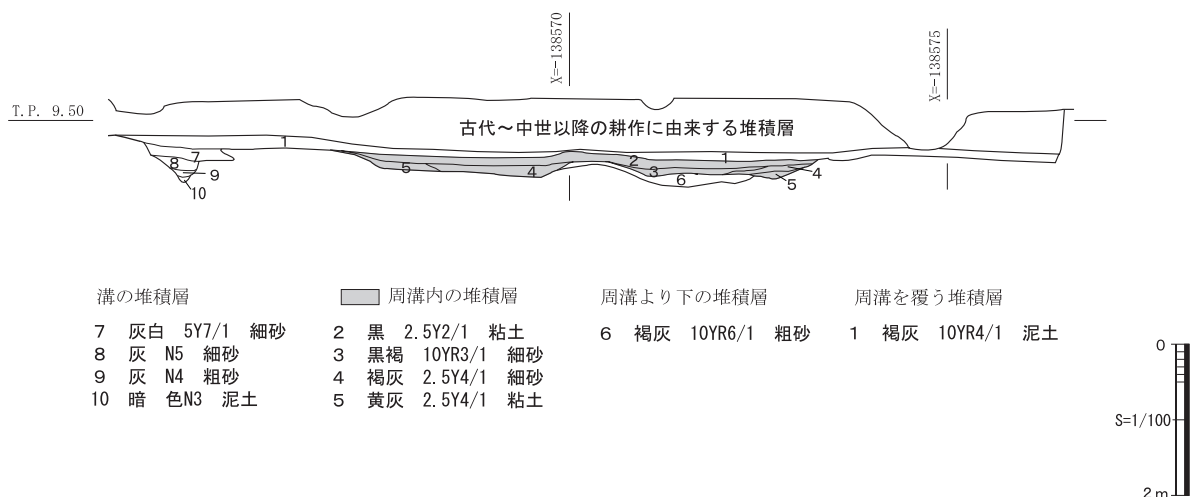


図12 04-1-3 断面図 (調査区東壁)

04-1-3 出土遺物 (図13、図版20) 本調査区の出土遺物は細片が多く、4点のみを図化した。いずれも包含層からの出土である。1溝からは弥生土器の細片が出土しているが、前方後方形周溝墓に伴う遺物は検出できなかった。

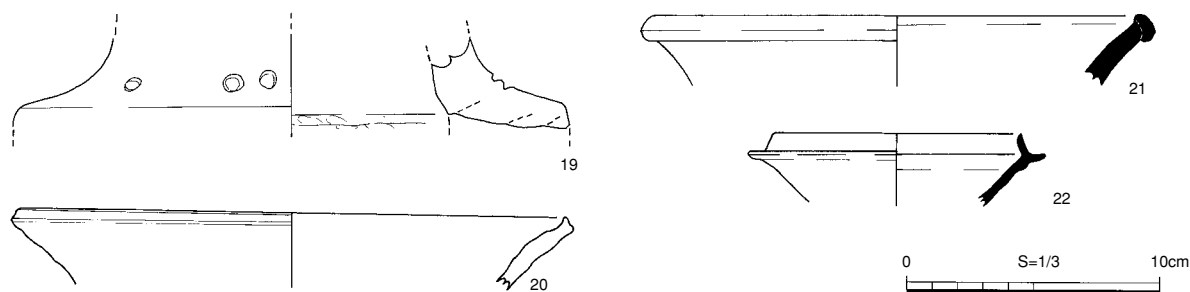


図13 04-1-3 出土遺物

19は器台の一部かと思われるが、細片であるため定かではない。内外面ともに表面の摩耗が激しく調整は不明であるが、径6mmの竹管による刺突文を2個またはそれ以上を単位とし施している。内面では粘土継ぎ足し痕が明瞭に確認できる。20は土師器甕である。口縁部のみ残存している。復元口径は22.0cmである。21は須恵器の壺である。口縁部のみ残存している。内外面ともに回転ナデの調整を施し、口縁端部は上下に拡張させる。内面には自然釉が付着する。復元口径は19.8cmである。22は須恵器杯身である。たちあがりは内傾度が大きく、先端部は丸みを帯びている。復元口径は10.0cmである。

#### 04-1-4 (東半) (図14~17、図版8・9・20・27)

平成14年度の讃良郡条里遺跡(その1) A1区とB1区、B2区に挟まれた地区が東半部で、A2区の北側が西半部となる。

3土坑は調査区中央北端に検出した。長さ2.5m、深さ0.3mを測る。黒色土器片が出土している。

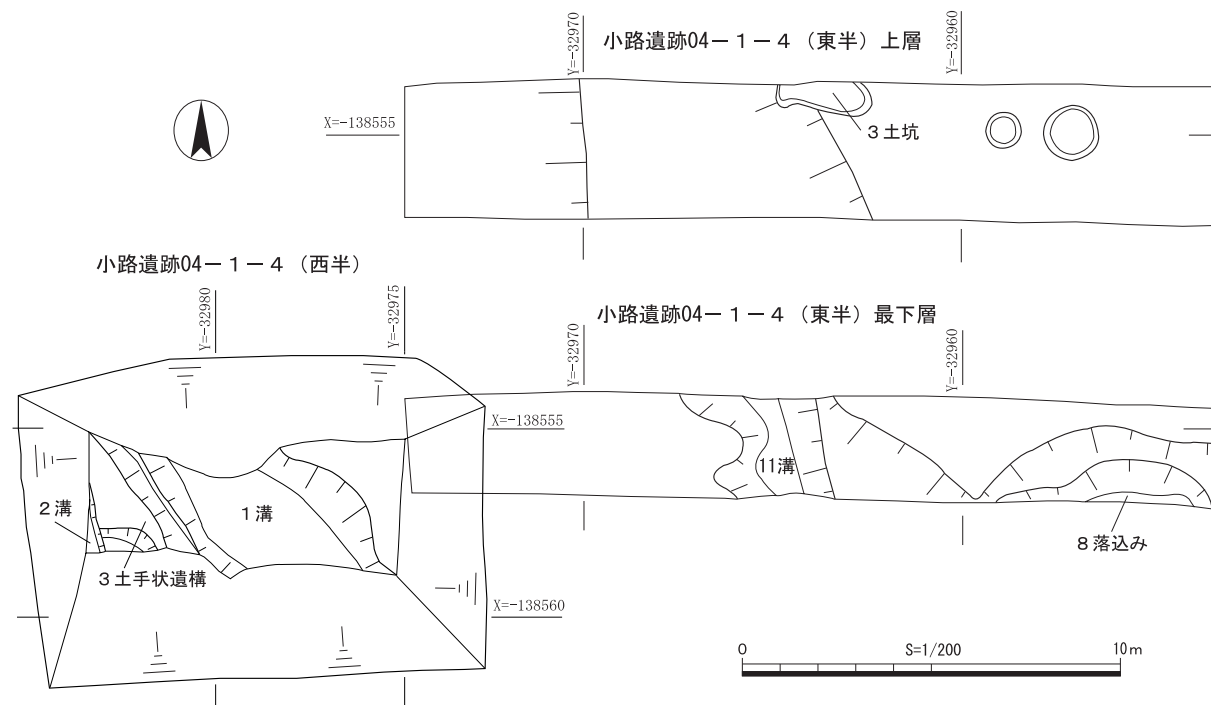


図14 04-1-4 (東半・西半) 平面図

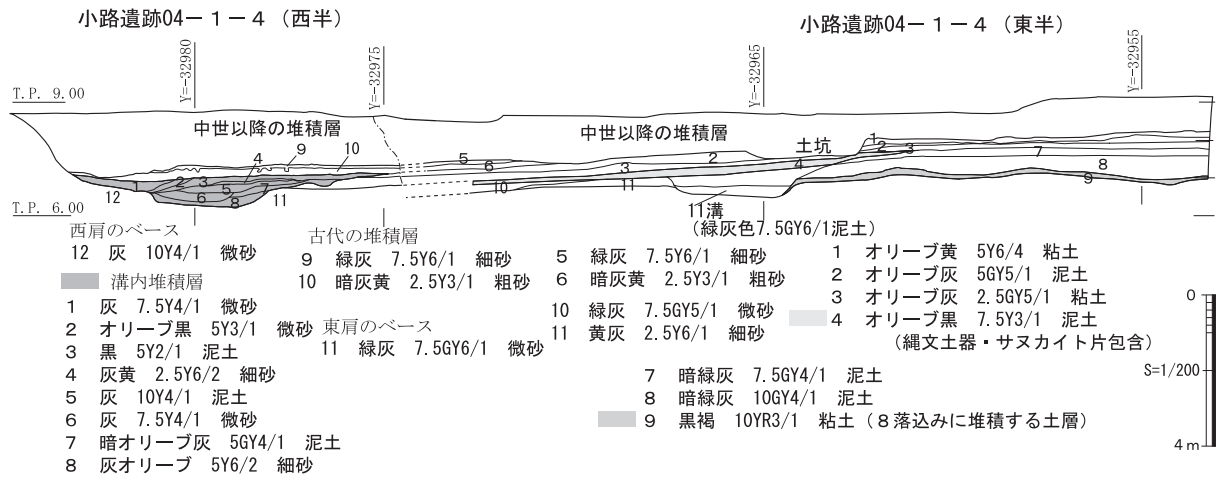


図15 04-1-4 断面図 (調査区北壁)

8落込みは調査区南東部で検出した。黒褐色粘土が堆積し、縄文土器片が出土した。深さ 1.0mを測る。讚良那条里遺跡 (その1) A 1区北端に楕円形を呈する土坑が検出されており、同一の遺構の可能性はある。11溝は調査区中央部で、南北方向に検出した。幅 3.0m、深さ 0.5mを測る。

調査区全体は地山面が西側に向けて緩く傾斜しており、西半部で検出した1溝の肩部に連続するものとみられよう。

04-1-4 (東半) 出土遺物 (図16・17、図版20・27) 本調査区では、縄文土器、弥生土器、土師器、黒色土器、石器等が出土した。23・34は8落込み、24・25は6溝、27は3土坑、その他は包含層からの出土である。

23・24は縄文土器の破片である。23は外面に櫛状の原体による条痕が残る。条痕内にも細かい条線が認められる。胎土は精良で、角閃石を含む。焼成は堅緻。色調は外面がにぶい黄色、内面が暗灰黄色である。24は口唇が摩耗するものの、口縁部かと考えられる。外面にはLRの縄文を横位に施している。25は弥生土器甕の底部である。内外面ともに摩耗が著しく調整が不明である。26は竈形土器の口縁部と思われる。口辺部はナデ、体部は縦方向のハケメの調整を施している。内面は横方向のナデの調整を施している。27は黒色土器碗である。体部内面には横方向の密なヘラミガキの調整を施している。内面見込みには不定方向のヘラミガキを施している。高台径は 7.6cmを測る。28は、備前焼の壺であると思わ

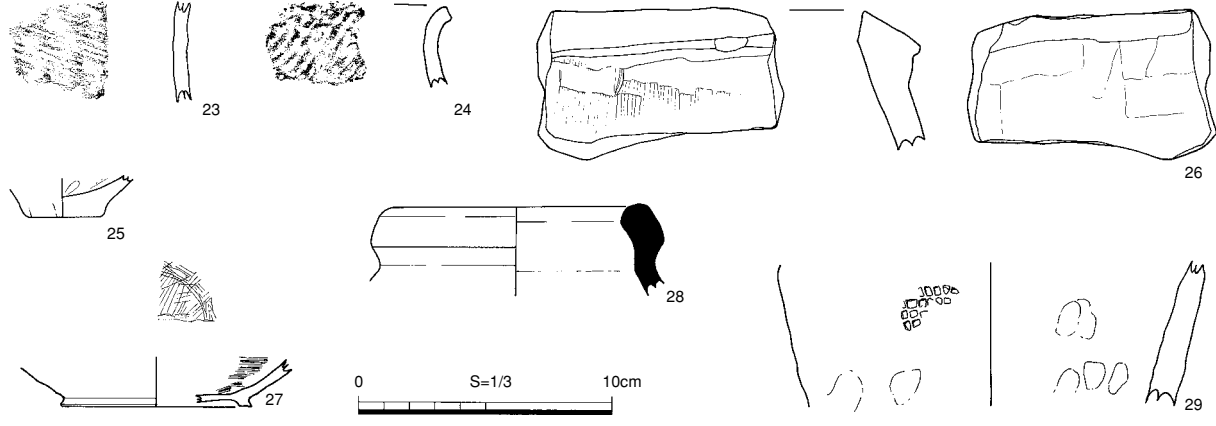


図16 04-1-4 (東半) 出土遺物 (1)

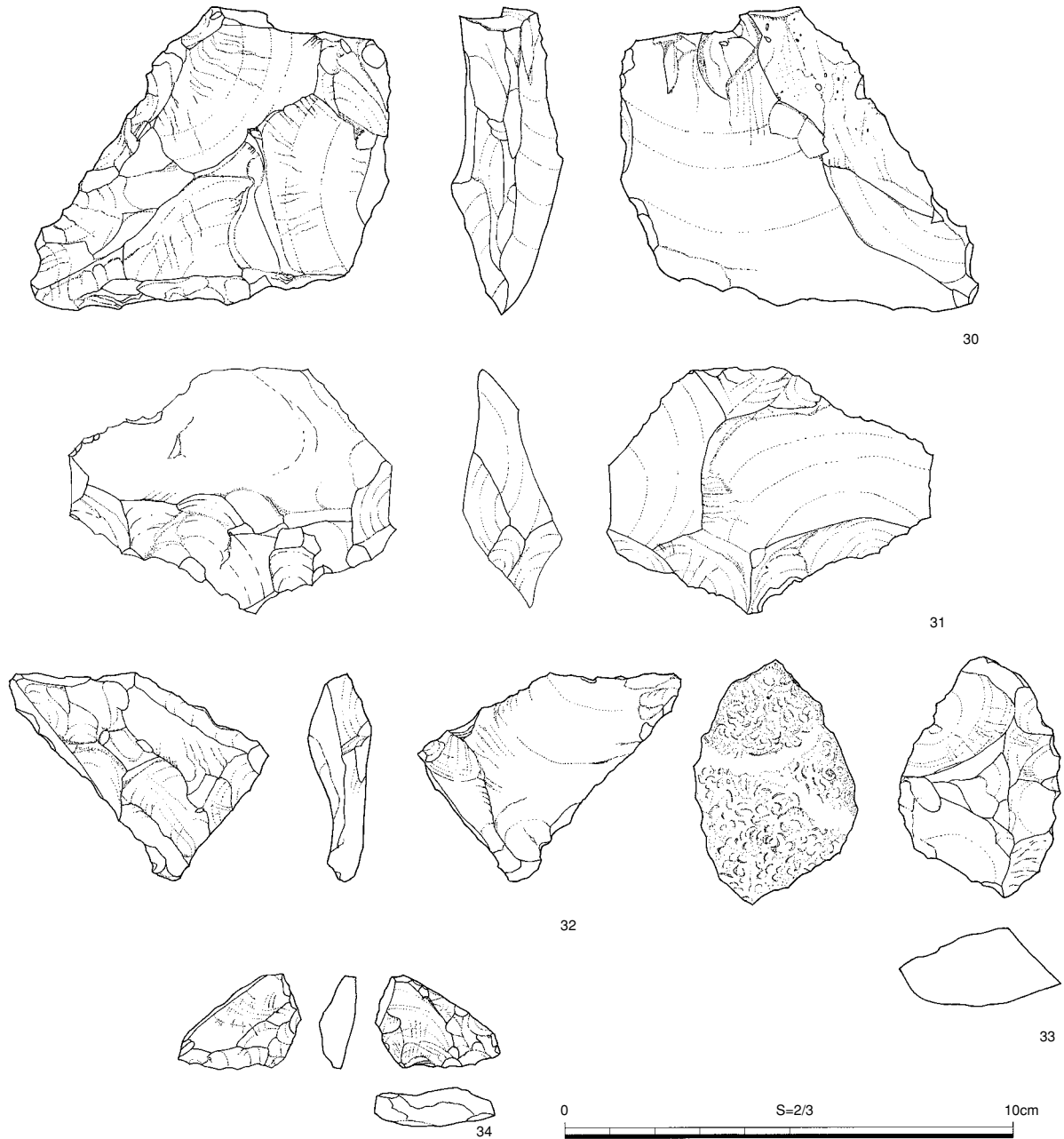


図17 04-1-4 (東半) 出土遺物 (2)

れる。復元口径は 10.0cmである。29は瓦質の土製品で器形は不明である。外面は格子状のタタキの後、横方向の軽いケズリの調整を施しているが、部分的にタタキが残る。内面は不定方向のナデによる調整を施している。

30～34は石器で、石材はいずれもサヌカイトである。30は原礫面を打面とする剥片で、背面には周囲からの剥離痕が残る。長さ6.85cm、幅 8.1cm、厚さ 2.6cm、重さ116.27 gを測る。31は背面に原礫面を残す石核である。長さ 5.5cm、幅 7.3cm、厚さ 2.0cm、重さ 60.11 gを測る。32は打面再生剥片であると思われる。背面は周囲からの剥離痕がある。やや粗質である。長さ 4.8cm、幅 5.8cm、厚さ 1.4cm、重さ 22.50 gを測る。33は残核であると思われる。背面には原礫面を残している。腹面には周囲からの打撃を確認することができる。長さ 5.5cm、幅 3.6cm、厚さ 1.8cm、重さ 23.37 gを測る。34は楔形石器である。長さ 2.0 cm、幅 2.7cm、厚さ 0.7cm、重さ4.54 gを測る。

04-1-4 (西半) (図14・15・18~21、図版10・20~22・27・28)

現地表面から 3.5mに達する 1 溝と 1 溝の堆積層を検出した。1 溝最深部の標高は 6.1mを測る。2 溝は 1 溝左岸から西に 1.5mを離して検出された。深さ 0.3m、幅 0.5m以上、1 溝と平行している。3 土手状遺構は 1 溝左岸、2 溝との間で検出した。雑木を敷き詰めて盛土を行い、杭による護岸の痕跡を確認した。

讚良郡条里遺跡(その1) A1区で、南東から北西に向かう流路(溝27)が検出されたが、今回の西半部の調査は、この溝27の中央部を確認したものである。平成12年度調査では、井堰遺構が検出され、杭としがらみに絡んだ多量の遺物が出土したが、今回の調査の 1 溝は井堰遺構を外れた北側にあたるため、遺物の出土は比較的少量であった。

04-1-4 (西半) 出土遺物(図18~21、図版20~22・27・28) 本調査区では、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木器等が出土した。60は 2 溝より出土し、残りの遺物はすべて 1 溝より出土している。特筆すべき遺物としては、祭祀関連遺物である人面墨書土器が挙げられる。

35~42は土師器甕である。いずれも体部上半にかけての破片である。35は頸部外面に成形時の工具痕が残る。体部外面は縦方向のハケの調整を施している。復元口径は26.0cmである。36は口縁部内面に粗い横方向のハケの調整を施している。体部外面は縦方向のハケの調整を施している。復元口径は18.1cmである。37は体部が摩滅しており、縦方向のハケをわずかに確認できる。体部外面では指頭痕が確認できる。体部内面はヘラ状工具による横方向の強いナデの調整を施している。復元口径は22.0cmである。38は口縁端部を小さくつまみ上げ成形する。外面にナデの後縦方向のハケの調整を施している。復元口径は15.4cmである。39は口縁部内面に横方向のハケの調整を施している。体部外面は縦方向のハケの調整を施している。体部外面では指頭痕が確認できる。復元口径は16.8cmである。40は口縁端部外面に沈線を施している。体部外面は縦方向のハケの調整を施し、内面には粘土接合痕が残る。復元口径は15.6cmである。41は口縁部の外面を縦方向のハケ、内面は不定方向のハケによる調整を施している。体部外面はナデの後横方向のハケ、内面は強い板ナデの調整を施している。復元口径は14.4cmである。42は体部外面に縦方向のハケの調整を施し、内面では不定方向のハケの調整を施している。復元口径14.7cmである。43は土師器皿である。口縁部はヨコナデの調整を施している。体部下半で指オサエによる成形痕が顕著に残る。内面はナデの後、横方向の粗いハケの調整を施している。復元口径は15.6cmである。44~46は製塩土器である。いずれも指オサエによる成形痕が顕著に残る。47は須恵器の大型盤の蓋と思われる。内外面ともに回転ナデの調整を施している。内面には自然釉が付着する。復元口径は30.4cmである。48は須恵器長頸壺の体部である。外面は体部上方を回転ナデ、下半は回転ヘラケズリを施している。体部中位には、2条の沈線の間で5点を単位とする櫛描列点文を施している。49は弥生土器壺の底部である。摩耗が著しく調整は不明である。50は甗の羽口である。外面はナデの後ハケ、内面はナデの調整を施している。外面には被熱痕がある。

51~58はすべて土師器甕である。51・52・54は人面墨書土器、53・55~58は墨書土器である。51の人面は頭髪、額、目、鼻、口、顎髭を描いている。頭髪は数本の線を下方から上方にはらい表現する。額は右回りの不整形な二重円により描いている。目は扁平な円を左右に1つずつ描いている。その下方には左右1つずつの円を描くことにより鼻孔を表現する。口は扁平な円を何度も線を書き足しながら右回りに描いている。顎髭は口の線に半円を付け足し、この半円の中に短い縦線を描くことで表現する。口縁部外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケの調整を施している。体部外面は縦方向のハケ、内面上

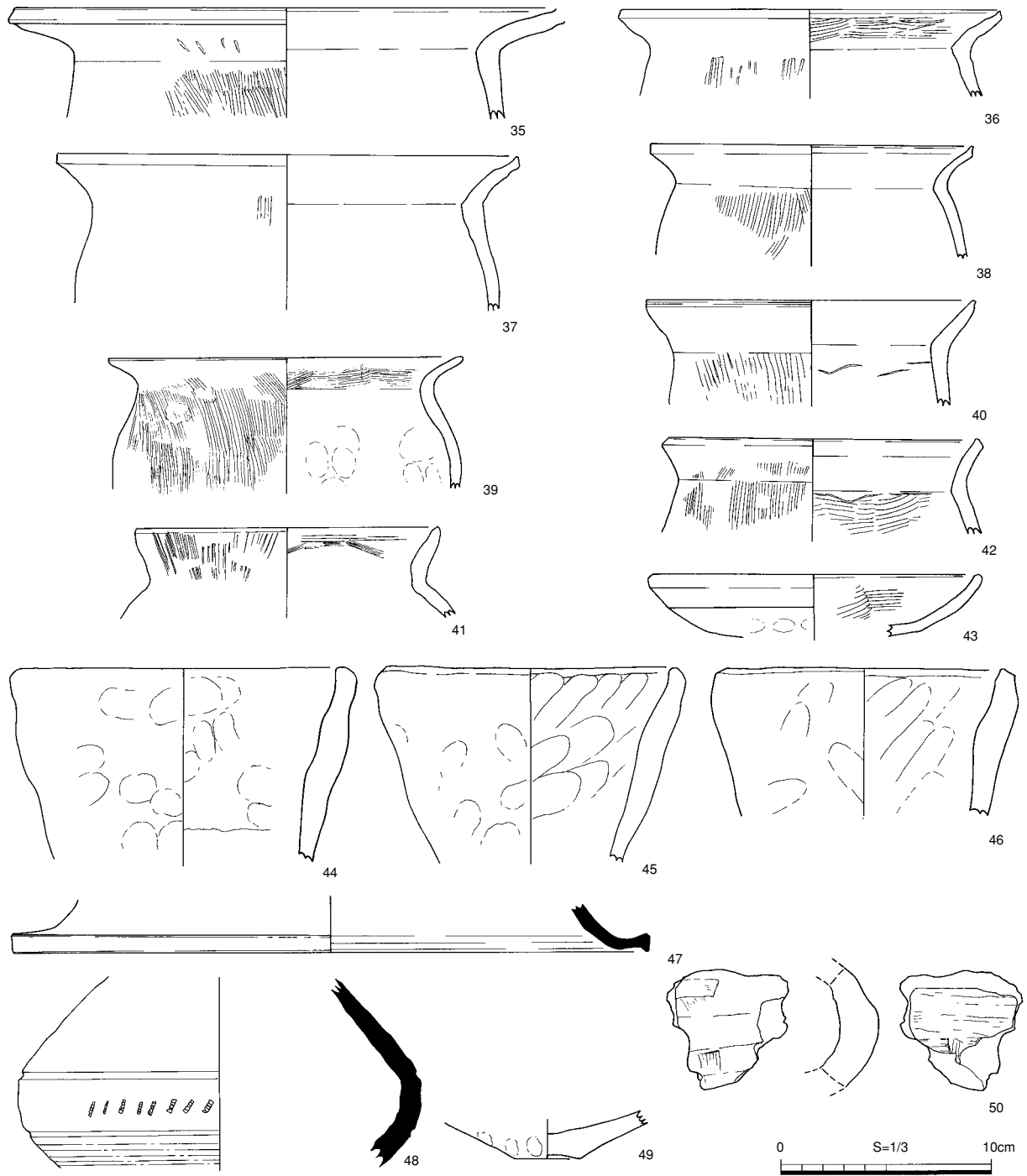


図18 04-1-4 (西半) 出土遺物 (1)

位は木端による横方向のナデ、内面下位はナデの調整を施している。胎土は密で、0.5mm～3.0mmの白色砂粒、礫をわずかに含む。復元口径は約30cmである。52の人面は額、目、鼻、頬、口を描いている。額は右回りの円を鼻筋と思われる直線につけたし描いている。額の中にある数条の線は、皺の表現かと思われる。鼻は左右2本の縦方向の線を伸ばし、その先端を円で収める。この縦線は鼻筋、先端の円は鼻孔を表現している。頬は右回りの円で表現されていたと考えられる。口は下方が欠損しているため詳細は不明であるが、何度も線を重ね描いている。口縁部は横方向のナデの調整を施している。体部外面上位は縦方向のハケ、内面上位は木端による横方向のナデ、内面下位はナデの調整を施している。胎土は密で0.2mm～2.5mmの白色灰色砂粒、礫、最大5mmの白色礫を含む。復元口径は29.4cmである。54の人面は



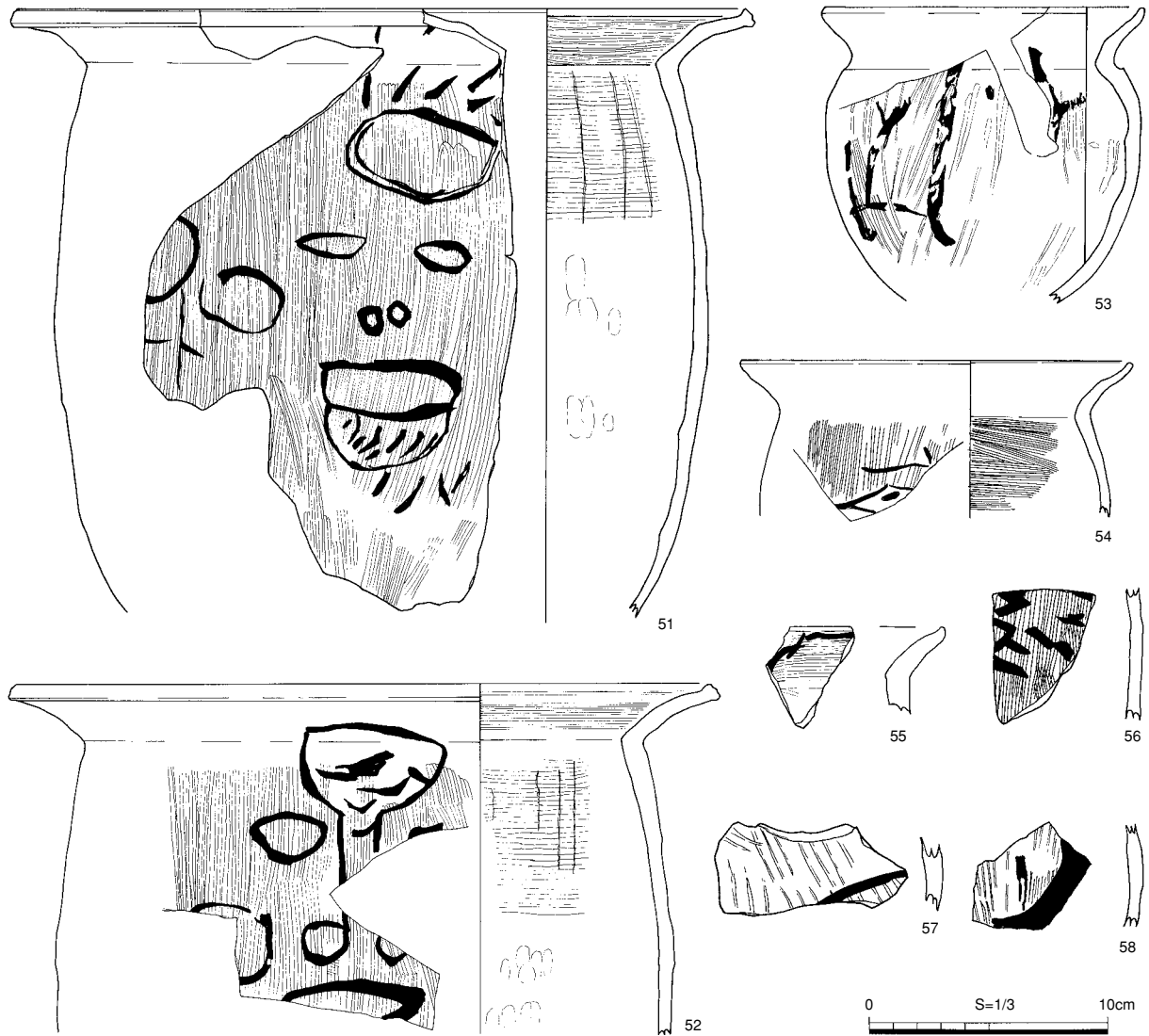


図19 04-1-4 (西半) 出土遺物 (2)

吊り上がった眉、切れ長の目が確認できる。体部外面を縦方向のハケ、内面は横方向のハケの調整を施している。復元口径は16.6cmである。53は体部外面に墨書がみられる。摩滅が著しいため何を表現したものかは不明である。口縁部は横方向のナデによる調整を施している。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は不定方向のナデによる調整を施している。胎土は極めて密である。復元口径は13.6cmである。55は口縁部片である。墨書は口縁部内面に描いている。口縁部内面は横方向のハケの調整を施している。頸部外面は縦方向のハケの調整を施している。胎土には直径0.2mm～2.0mmの砂粒、雲母片、赤色酸化土粒を含む。56は体部片である。外面に縦方向のハケの調整を施している。胎土はやや粗、直径0.5mm～2.0mmの砂礫を含む。57・58は体部片である。ともに外面に粗いハケの調整を施している。

59は砂岩の置砥石である。研面は平滑。仕上げ砥として用いられたものと思われる。全長9.2cm、最大幅5.5cm、最大厚4.1cm、重さ205.27gを測る。

60～63は木製品である。60は曲物側板である。樺皮で一列に綴じる。欠損しているため段数は不明である。木取は縦木取である。残存長14.9cm、最大幅3.4cm、最大厚5.6mmを測る。61は板状の木製品で一端を尖らせ、もう一方の端は平坦で、端に刳込みをいれる。全長21.7cm、最大幅1.8cm、最大厚1.1cmを測る。縦木取である。60・61ともに材はヒノキである。62は一端に細いハツリを施し、丸く成形する。も

う一端は欠損しているものの柄穴を穿っていたと思われる。その両側には径4mm程度の孔を穿つ。木取は横木取で、材はツガである。全長23.1cm、最大幅2.4cm、最大厚2.1cmを測る。63は杭であると思われる。一端を粗いハツリにより先細りの形状に成形する。もう一端は折れた後火を受けて炭化する。炭化部分との境は明瞭に区別でき、地面に設置された状態で火を受けたと考えられる。木取は横木取である。材はスギである。残存長63.4cm、最大幅12.6cm、最大厚12.4cm、炭化部分長11.2cmを測る。

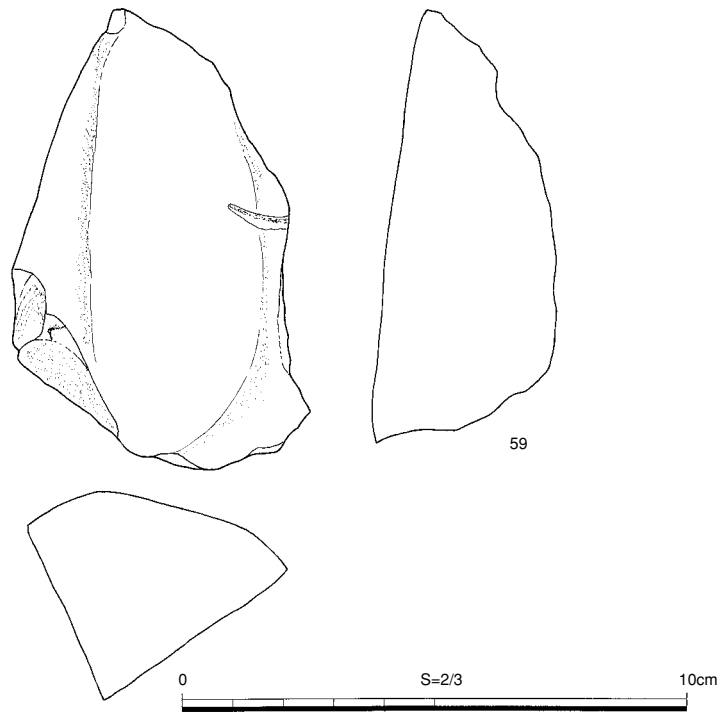


図20 04-1-4 (西半) 出土遺物 (3)

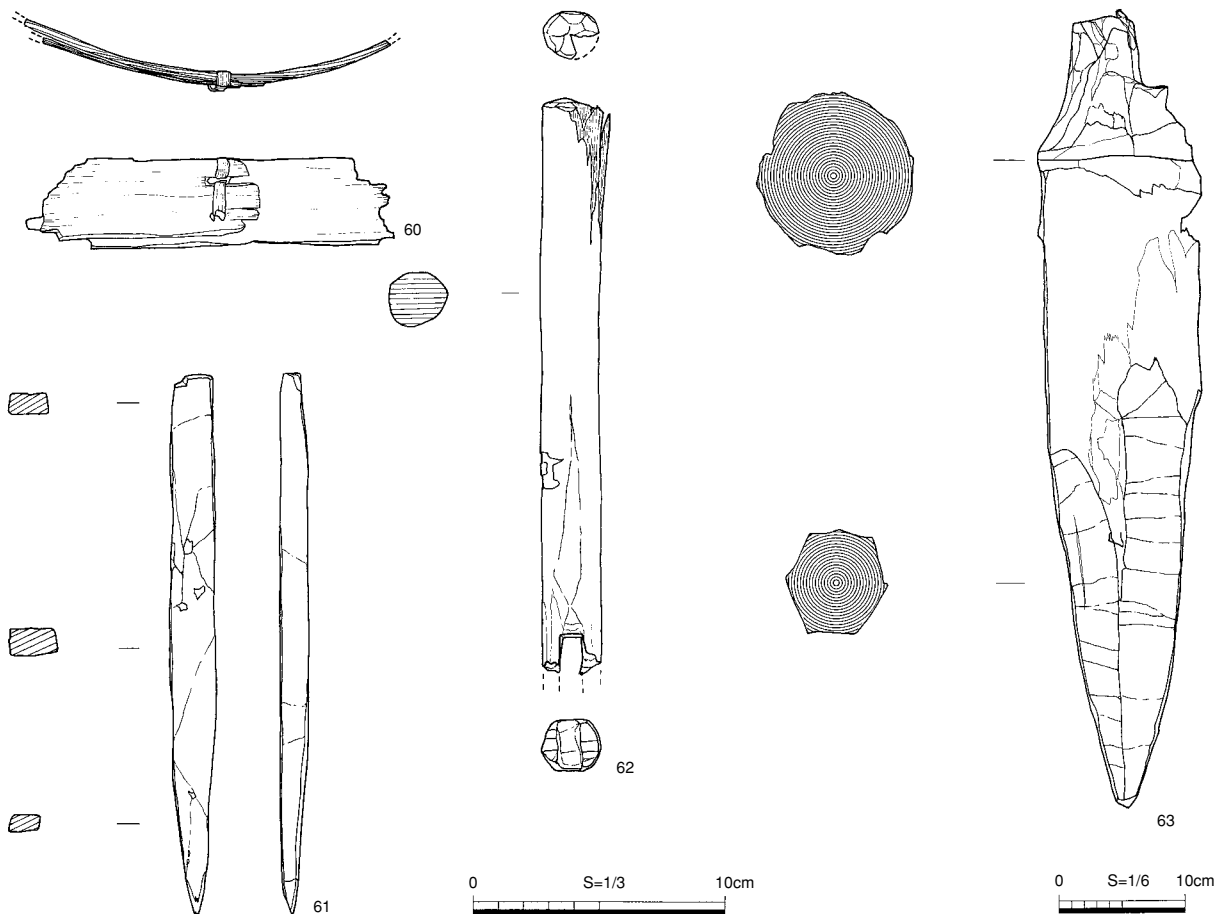


図21 04-1-4 (西半) 出土遺物 (4)

## 第2節 小路遺跡04 - 2

今回のこの地点の調査の主眼は、以前に発掘調査を実施した讚良郡条里遺跡（その1）で発見された27溝（図4）、小路遺跡（その2）で発見された20流路（図4）につながる溝を発掘することであった。以前の調査で発見された2つの溝は上流と下流で一本の溝としてつながるものである。この溝の中からは多数の人面墨書土器ならびに絵馬、斎串、人形等の木製品、馬歯等、古代・奈良時代を中心とした祭祀に関連する遺物が多く出土している。年代は奈良時代から平安時代初めに属する。今回の調査はそれらの溝のさらに上流の続きであり、祭祀関連遺物が出土する可能性が高いと予測して発掘したものである。現地表はT.P. 10.30m前後である。厚さ約2m強の現代の盛土、旧耕土等は機械掘削で除去した後、人力掘削をおこなった。耕土から約0.8mの間に8層が存在する。上半部では若干の鋤溝がみられただけで、顕著な遺構は認められなかった。下半部で予測していた祭祀関連の溝を検出、人面墨書土器等の破片が出土した。また古墳時代初頭に属する溝も発掘した。出土遺物は少量であったが庄内式土器等の破片が出土している。

### 04 - 2 - 1（図1、3、4、22~27、図版11~13・23・28）

地山面で2本の溝が発見された。予測されていた祭祀関連の溝は調査当初、2本の溝が切りあっていると判断されるような状態で検出された。1溝とした溝は黒褐色の土が埋没し、調査当初、2溝とした溝の埋没土とは顕著な差が認められた。しかし、下層を掘りあげた結果、1溝・2溝とした溝は本来1本の溝であることが判明した（図22~24）。しかし、遺物の取り上げとの関係もあり、ここでは便宜上、2本の溝として記述する。

1溝は2溝の東側に重なって検出された。検出レベルはT.P. 8.6m前後で、溝幅は6m強、残存深さは最深部で0.9mを測る。埋土の上層部は黒褐色土であったが東寄りの下層部は灰色の細粒砂が堆積していた。東寄り最下層部から上半部を欠失した須恵器壺1点（図26 - 80）、箸と思われる木器破片1点、馬の下顎の一固まりと考えられる骨と歯（6~7本分）が出土した。これらは祭祀に関連する遺物と考

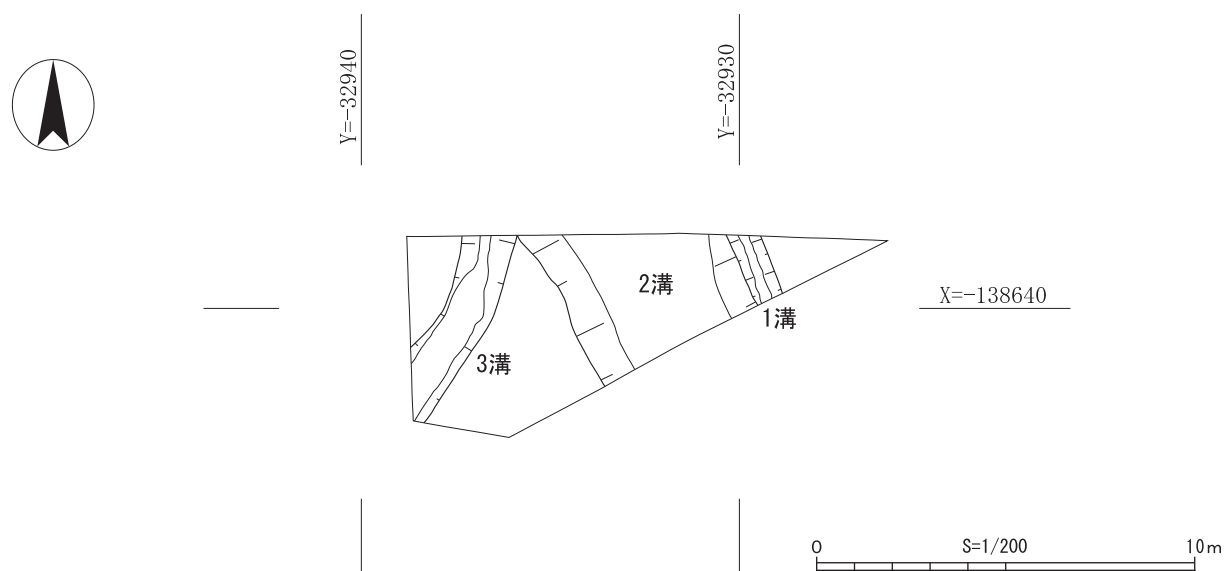
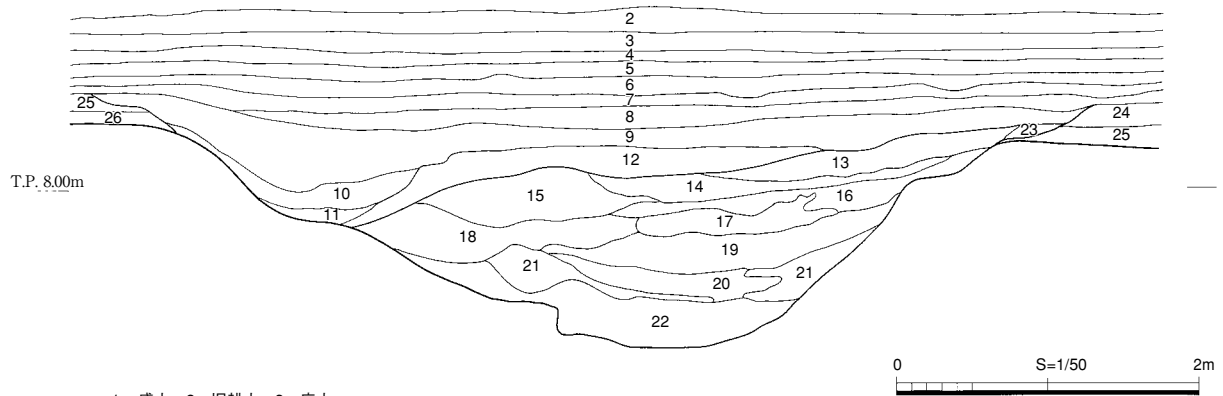


図22 04-2-1 平面図

T.P. 10.00m

1



- 1 盛土 2 旧耕土 3 床土
- 4 暗灰黄 2.5Y5/2 微粒砂～粗粒砂 Fe分沈着あり 墨粒を含む 極粗粒砂～0.5cm大の礫を5%含む 5層より粒子が細かい Fe分は少ない
- 5 暗灰黄 2.5Y5/2 微粒砂～細粒砂 Fe分沈着あり 極粗粒砂～1.0cm大の礫を10%含む
- 6 暗灰黄 2.5Y5/2 微粒砂～中粒砂 Fe分沈着あり(5層よりも多い) 粗粒砂～極粗粒砂を20%含む 1.0cm大の礫を10%含む 5層より粒子が細かい
- 7 黄灰 2.5Y5/1 微粒砂～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂を30%含む 0.5cm～3.0cm大の礫を10%含む 白粒粗粒砂～極粗粒砂を20%含む
- 8 灰 7.5Y4/1 中粒砂～極粗粒砂 極粗粒砂～0.5cm大の礫を20%含む(土壌化層)
- 9 黒褐 2.5Y3/1 シルト～微粒砂 中粒砂～0.5cm大の礫を30%含む 地山ブロックを含む 白粒極粗粒砂を20%含む Fe分を含む
- 10 黒 N2/ シルト～中粒砂 粗粒砂～極粗粒砂を20%含む 雲母を20%含む
- 11 灰 7.5Y4/1 微粒砂～細粒砂 植物遺体を含む 上方細粒化 極粗粒砂～0.2cm大の礫を30%含む 微粒砂～細粒砂をベースに 中粒砂～極粗粒砂ラミナを含む互層 この層から須恵器(80)が出土 10層と11層の境目から馬の歯が出土
- 12 オリーブ灰 10Y5/2 微粒砂 ブロックを含む ラミナを含む
- 13 青灰 10BG5/1 微粒砂 Fe分沈着あり シルトブロックを含む 粗粒砂～極粗粒砂を30%含む
- 14 灰 5Y6/1 中粒砂～粗粒砂
- 15 灰 7.5Y4/1 微粒砂～0.5cm大の礫 植物遺体を含む 微粒砂～細粒砂ベースに中粒砂～0.5cm大のラミナを含む 雲母を20%含む
- 16 黄灰 2.5Y4/1 シルト～細粒砂 植物遺体を含む
- 17 黄灰 2.5Y4/2 微粒砂～粗粒砂 植物遺体を含む
- 18 暗灰 N3/ シルト～微粒砂 植物遺体を含む この層の下半部で人面墨書土器(77)が出土(土壌化層)
- 19 オリーブ黒 5Y3/1 シルト～細粒砂 ラミナを含む この層で曲物(84)が出土
- 20 黄灰 2.5Y4/1 シルト～中粒砂 微粒砂ブロックを含む
- 21 黄灰 2.5Y6/1 シルト 微粒砂ブロックを含む
- 22 灰 5Y6/1 中粒砂～0.5cm大の礫 極粗粒砂～0.5cm大の礫をラミナ状に含む
- 23 青灰 10BG5/1 微粒砂 Fe分沈着あり シルトブロックを含む 粗粒砂～微粒砂を30%含む
- 24 緑灰 10G5/1 シルト～微粒砂 Fe分沈着あり 白粒中粒砂～粗粒砂を10%含む
- 25 暗灰 2.5Y5/1 細粒砂～0.5cm大の礫 上方細粒化
- 26 暗緑灰 5B4/1～オリーブ黒 5Y3/1 シルト

図23 04-2-1 2溝断面図(調査区南東壁)

えられる。この馬は歯からみて老齢であると推定される。(大阪府教育委員会、宮崎泰史氏の教示による。)

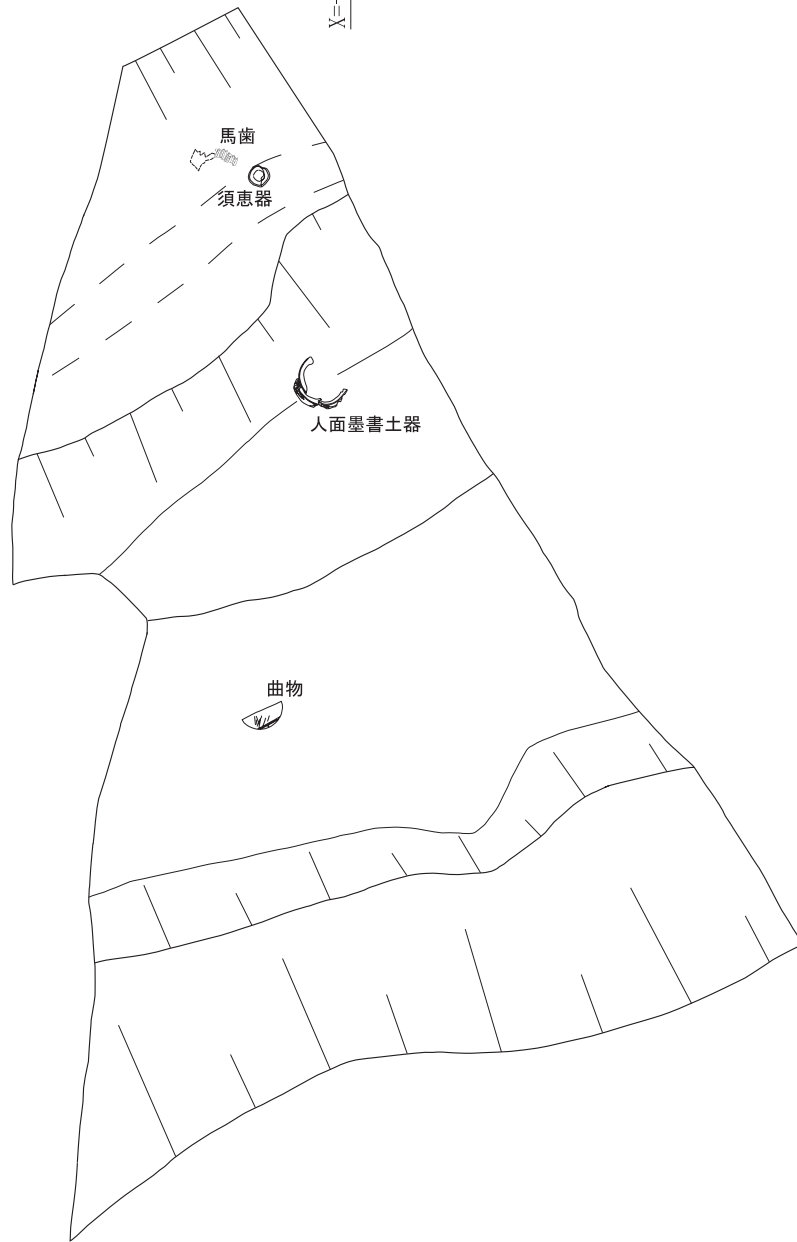
2溝は細粒砂、シルトの互層が多く1溝よりも多くの水が流れたと考えられる。溝幅は5.0m～6.0m、残存深さは約1.5mを測る。遺物は従前の調査に比べるとごく少量しか出土しなかった。人面墨書土器の破片数点(図26-76・77)、須恵器破片数点(81・82)、製塩土器の破片(78)数点の他、木器で破片ではあるが盤(図27-83)、曲物の蓋(84)が各1点出土した。1溝としたものは2溝の最終堆積と判断される。

3溝は小路遺跡(その2)の発掘調査で検出された22、23流路(図4)の続きと考えられる溝で、調査区の西部で発見された。検出面はT.P. 8.3mあたりで、幅1.0m～1.4m、深さは0.25m前後を測る。



Y=-32930

X=-138640



Y=-32935

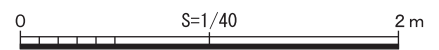


图24 04-2-1 2 溝遺物出土狀況

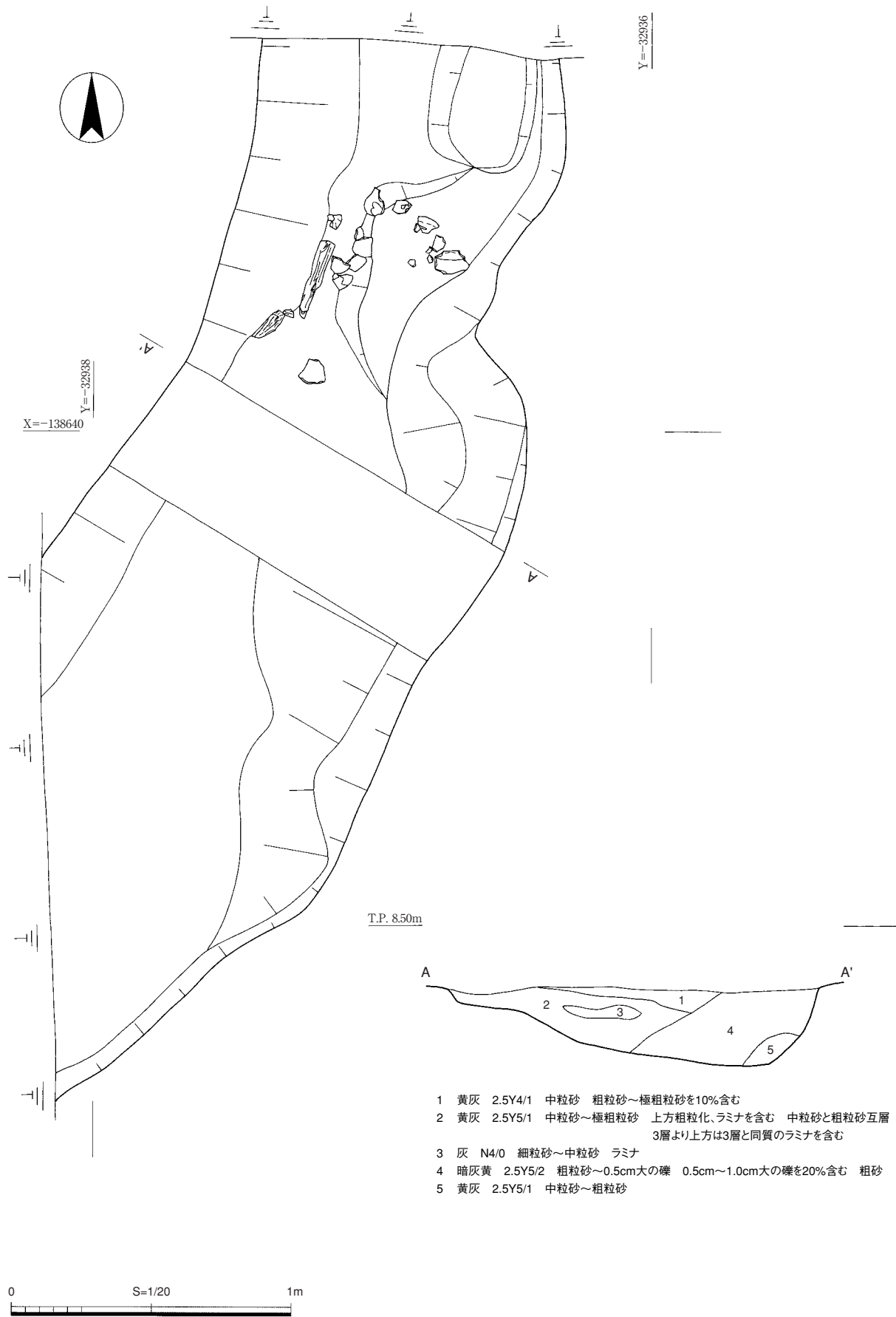


図25 04-2-1 3溝平面・断面図

今回の検出状態はほぼ北々東～南南東に走行しているが従前調査の小路遺跡（その2）の22・23流路もほぼ同じ方向で、出土遺物も同時期であり、それらに続く溝であると考えられる。またこの溝は小路遺跡（その3）の溝71（図4）に続く可能性がある。埋土は中粒砂、粗粒砂が多く急激にかなりの量の水が流れたものと推定される。自然流路かあるいは人工的に掘削した溝であるのかは判然としないが溝71に続くのがまちがいなければ、人工的な溝である可能性が高い。溝底部付近で弥生時代後期から古墳時代初頭の土器がある程度まとまって出土した（図26 - 67～75）。今回の発掘は人面墨書土器等が出土する溝の調査が主眼であったためそれ以下の層は調査しなかった。さらに下層を掘り下げれば、縄文時代の自然流路などが発見されたかもしれない。

04 - 2 - 1 出土遺物（図26・27、図版23・28） 04 - 2 - 1からは、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、木器等が出土した。80、85は1溝、76、77、78、79、81、82～84は2溝、それ以外は3溝からの出土である。

64は縄文土器深鉢の波頂部である。外面には突起部に集約する幅5mm～7mmの沈線を施している。胎

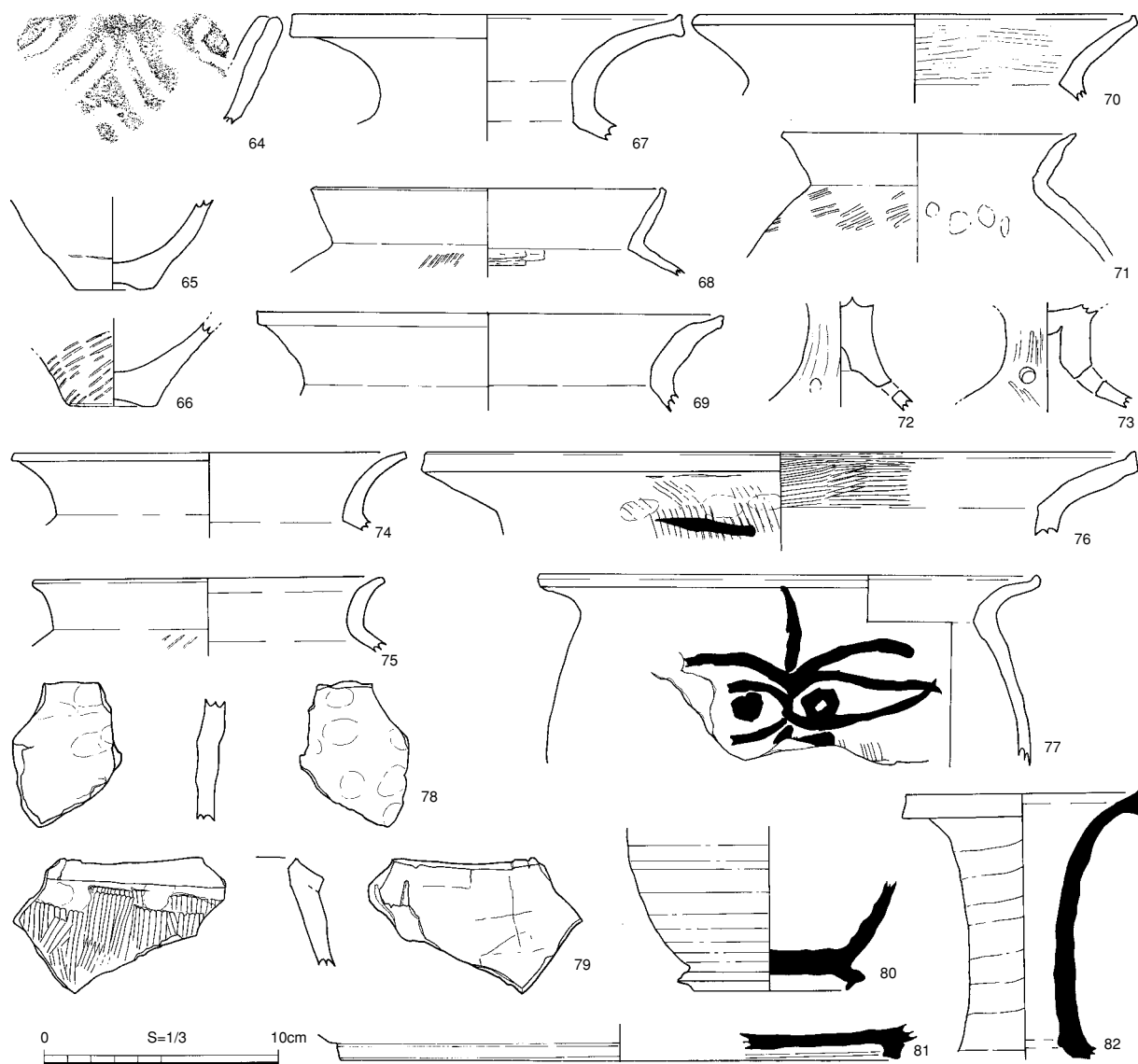


図26 04-2-1 出土遺物（1）

土は比較的密で、わずかに 0.1mm～ 3.6mm程度の長石粒、 0.2mm～ 3.0mm程度の角閃石を含む。

65・66は弥生土器甕の底部である。65は内外面ともに摩耗が著しく調整は不明である。66は内外面ともに摩耗が著しく不明瞭であるが、外面にはタタキの成形痕が残る。67は弥生土器の壺である。内外面ともに摩耗が著しく調整は不明である。復元口径は16.8cmである。

68～71は土師器甕である。68は口縁端部を上方につまみ上げる。体部外面はタタキ、内面にはヘラケズリの調整を施している。復元口径は14.7cmである。69は体部外面にタタキの痕跡が認められる。口縁部はナデの調整を施している。復元口径は19.7cmである。70は外面の摩耗が著しく、調整は不明である。口縁部内面はハケの後ナデの調整を施している。体部内面はヘラケズリの調整を施している。71は口縁部の内外面ともにナデの調整を施している。体部外面はタタキ、内面はナデの調整を施している。復元口径は12.4cmである。72・73は土師器高杯の脚柱部である。72は内外面ともに摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面ではわずかに縦方向のミガキによる調整が確認できる。脚部には円孔を穿つ。73は内外面ともに不定方向のヘラミガキの調整を施している。脚部には円孔を穿つ。残存している円孔の位置より3孔～4孔であったと考えられる。74・75は土師器甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。74は内外面ともに横方向のナデを施している。復元口径は16.8cmである。75は口縁部の内外面ともにナデの調整を施している。肩部外面はタタキ、内面はナデの調整を施している。復元口径は15.0cmである。

76・77は人面墨書土器である。76は筆で右から左に一本の線をはらう。この線は人面の眉であると思われる。口縁端部はつまみ上げるように成形する。口縁部外面は縦方向のハケの後ナデ、内面は横方向のハケの調整を施している。体部外面は縦方向のハケ、内面は不定方向のナデの調整を施している。胎土は密で、焼成は不良である。色調は外面が浅黄色で、内面が灰黄色である。復元口径は30.4cmである。77は描かれた人面のうち眉・目と鼻の一部を確認できる。眉毛は額から円弧を左右1つずつ描き表現する。眉間から額にのびている顔の中心にある直線は、下方から上方へはらい、さらに口縁端部まで至る。目の輪郭は目元より上下に円弧を1つずつ描き、目尻で繋ぎあわせるように描いている。瞳は白抜きの円により表現する。この人面の左右にも1面ずつ人面が描かれているが、欠損しており詳細は不明である。口縁部は内外ともにナデの調整を施している。体部外面は縦方向のハケの後ナデ、内面はナデの調整を施している。胎土は密で、0.5mm～ 2.5mmの白色砂粒、礫を含む。復元口径は、21.4cmである。78は製塩土器である。粗い不定方向のナデを施している。79は竈形土器の口縁部と思われる。口縁端部はナデの調整を施している。体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のナデの調整を施している。内面は二次焼成を受けている。

80は須恵器壺の底部から体部である。体部外面は回転ヘラケズリの調整を施している。高台付近は回転ナデの調整を施している。底部外面はヘラ切りの後、不定方向のナデの調整を施している。底部内面と高台外面に灰被りが見られる。胎土は密で、焼成は良好である。色調は外面が灰色で、内面が灰白色である。底径は 6.4cm～ 6.5cmを測る。81は須恵器大型杯である。体部と高台付近は回転ナデの調整を施している。底部は不定方向のナデの調整を施している。高台の内側にはヘラ工具等により施していると思われる、爪圧痕様の浅い沈線が認められる。復元高台径は23.7cmである。82は須恵器長頸壺の頸部である。内外面ともに回転ナデの調整を施している。外面にはマキアゲミズビキ痕が残る。内外面ともに部分的に灰被りが見られる。口径は10.1cmを測る。

83～85は木製品である。材はすべてヒノキである。83は盤である。平坦な底部と短く立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は先細るように成形している。内面には不定方向の無数の直線状の刃痕が確認で



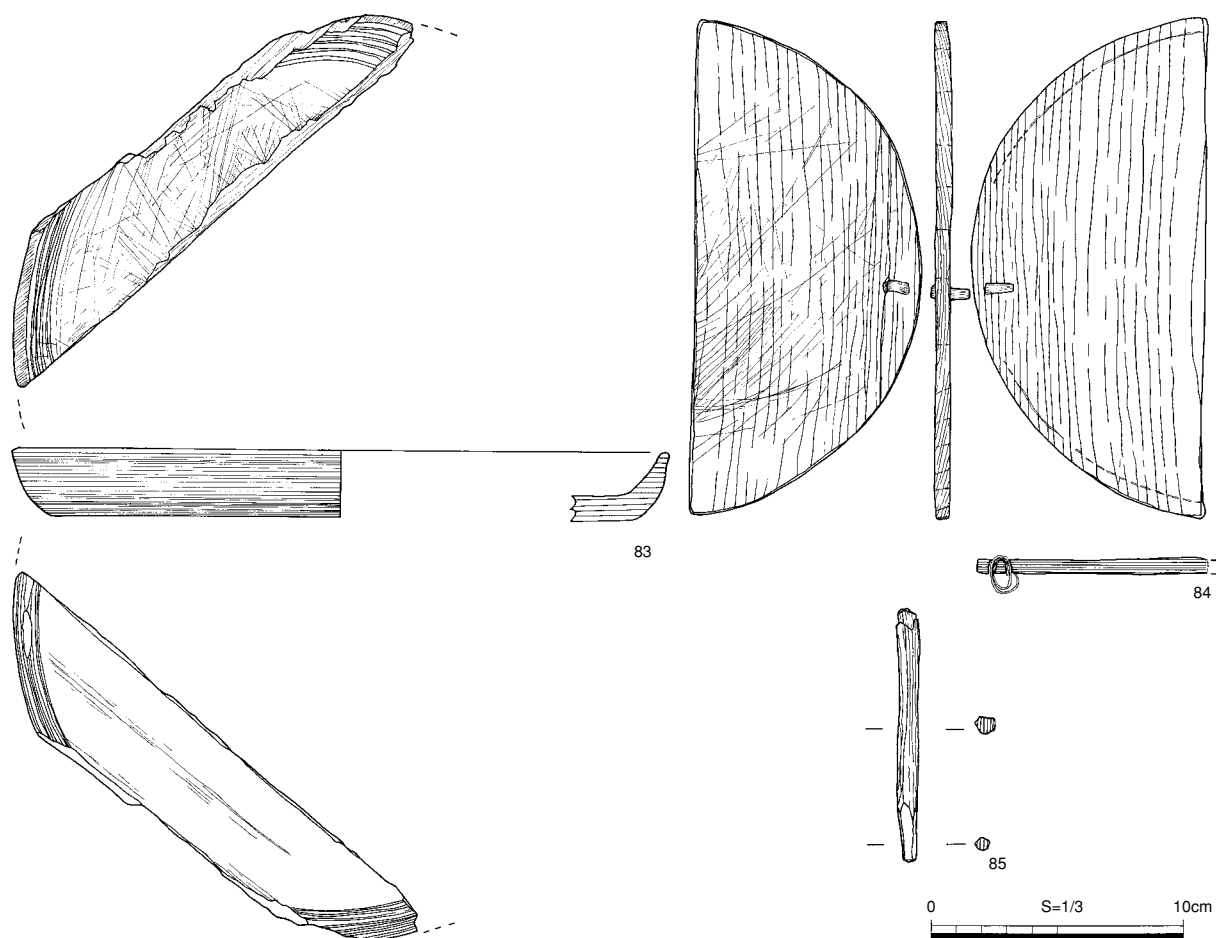


図27 04-2-1 出土遺物(2)

きる。木取りは横木取りである。最大厚 1.1cm、高さ 2.7cmである。84は曲物蓋の天板である。樺皮が残存する。円板を樺皮紐のみで結合するタイプのものであったと考えられる。外面には不定方向の無数の刃痕が確認できる。内面には側板の接合の際についた痕跡が円を描くようにうっすらと確認できる。木取りは横木取りである。復元径は20.2cmで、厚さ 6.0cmである。85は箸である。木片を棒状に成形している。先端は細かいハツリにより成形される。残存長10.1cmで、最大厚 0.8cmを測る。

04-2-2 (図28~33、図版14~18・24~27)

今回のこの地点の発掘調査の主眼は以前に発掘調査を実施した、讚良郡条里遺跡(その3)の調査で検出された溝27(図4)の続き等を発掘することであった。以前に発掘調査した讚良郡条里遺跡(その3)の第4遺構面で検出した溝27からは縄文時代前期末~縄文時代中期の土器が出土しており、この溝は縄文時代に属するものと報告されている。その調査区の第3遺構面では古墳時代の土坑、溝等が発見され、その上層の第2遺構面では奈良時代から平安時代初めの掘立柱建物、井戸等の遺構が発掘されている。今回の調査区は<sup>じっぽち</sup>十八川と呼ばれる農業用幹線水路である。東側に仮設水路を付け替えて発掘調査を実施した。現代水路はコンクリートでつくられていた(図29)。コンクリートを重機で掘り起こすと、その直下に現代水路と同じ北々西方向に流れる1溝が検出された。中世~近代初頭にかけての溝である。

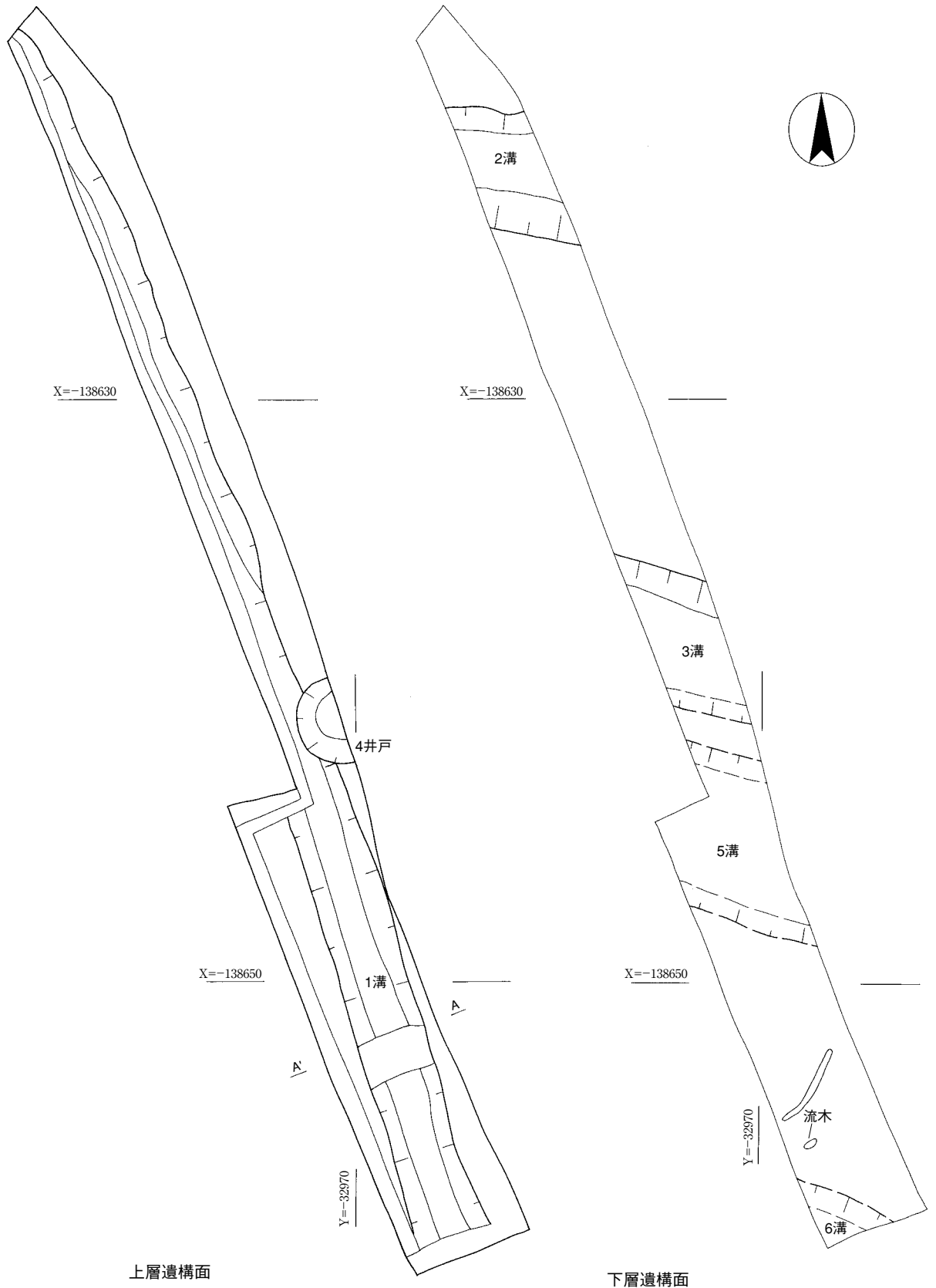


図28 04-2-2 遺構平面図

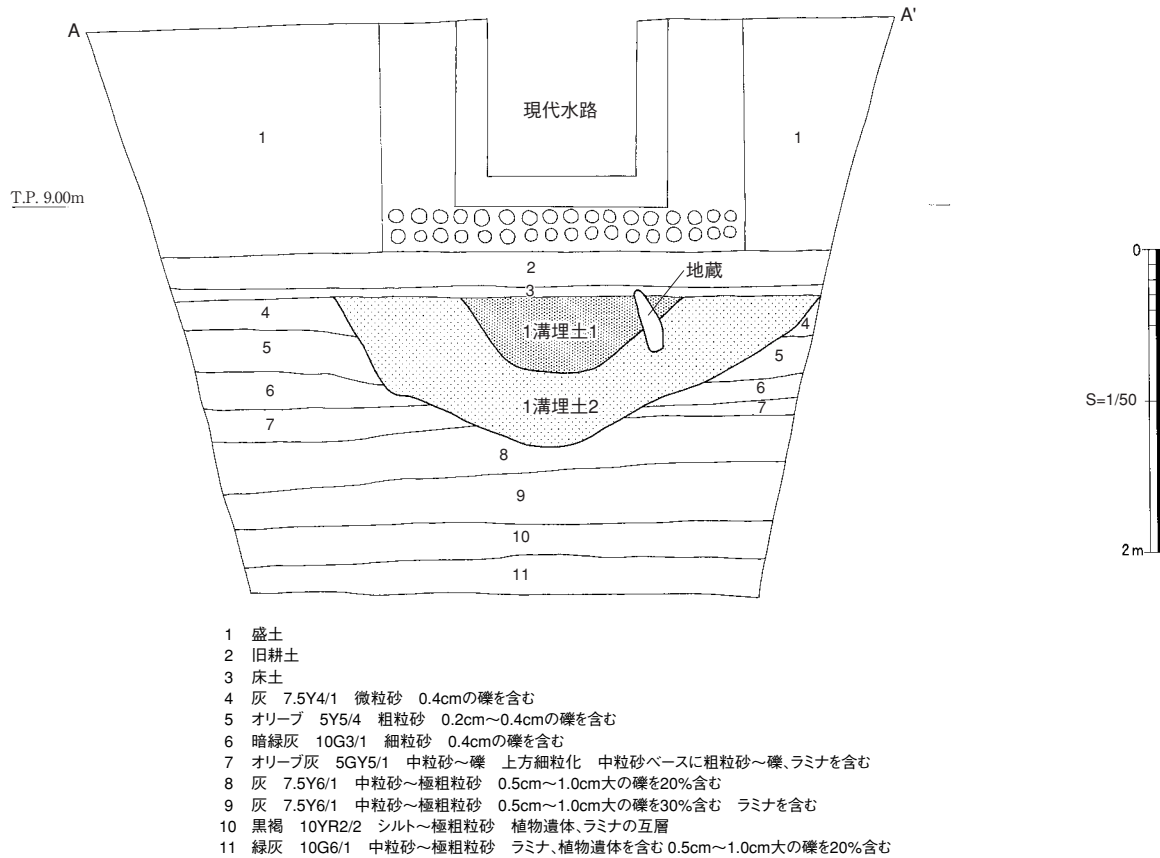


図29 04-2-2 東西断面図

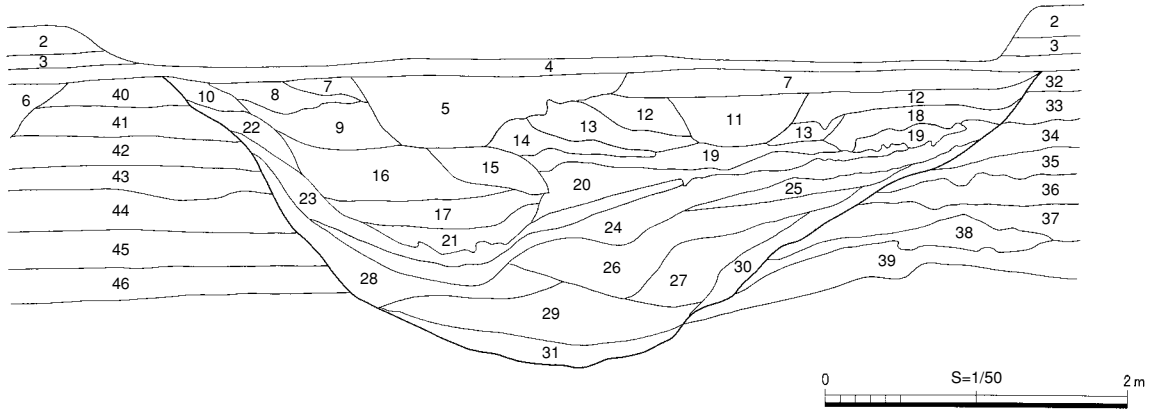
また調査区中央部で現代の4井戸(図28)を確認。北端部で溝27に続く2溝を発掘、その他に溝3本が(図28)検出された。

1溝は現代水路の直下で検出された溝でT.P. 8.4mあたりから掘り込みが確認された。1溝は堆積土の違いで上下に2本の溝が重なっているような状態であった。1溝埋土1の最終堆積の規模は幅約1.5m、深さ0.55mを測る。その埋土は径3cm前後の礫石を多量に含む粗砂であった。その層に多量の染付磁器の破片が混入して出土した。他に少量の陶器、瓦、土師器、須恵器の破片も出土した。大半の遺物は江戸時代中期から明治時代初めに属する。調査区南半部1溝の横断面壁帯の西肩部で石製の地蔵が1躯東側を向いて立てられていた(図29、図版16)。1溝下層の埋土2は幅2.4m~3.2m、深さ約1mを測る。この埋土には大きな礫石は入っておらず、微砂層が10層前後堆積していた。遺物はまったく出土しなかった。

2溝は讚良郡条里遺跡(その3)の発掘調査で発見された溝27に続く溝である(図4)。調査区の北端部で検出された(図28)。残存切り込み面はT.P. 8.3mあたりである。溝幅は約5.8mを測り、深さ2.0mが残存する。埋土は20数層にわかれていた(図30)。細粒砂~粗粒砂の互層であった。大量の縄文土器が出土するのを期待していたが今回、遺物はまったく出土しなかった。しかし、西隣の発掘調査報告書によると年代は縄文時代前期末~縄文時代中期に属する。これは自然流路であろう。

T.P. 9.00m

1



- 1 盛土 2 旧耕土 3 床土
- 4 灰 7.5Y4/1 細粒砂～粗粒砂 Fe分沈着多い
- 5 灰オリーブ 5Y4/2 シルト～中粒砂
- 6 灰オリーブ 5Y4/2 微粒砂～細粒砂 Fe分沈着あり 白粒中粒砂～粗粒砂を10%含む
- 7 灰オリーブ 5Y4/2 シルト～中粒砂 白粒微粒砂～極粗粒砂を20%含む
- 8 褐灰 10YR4/1 微粒砂～極粗粒砂 Fe分沈着あり 白粒粗粒砂～礫を40%含む
- 9 褐灰 10YR4/1 微粒砂～極粗粒砂 Fe分沈着あり 0.5cm～1.0cm大の礫を30%含む
- 10 灰 7.5Y4/1 細粒砂～粗粒砂 Fe分沈着あり 白粒極粗粒砂を30%含む
- 11 灰オリーブ 5Y5/2 Fe分沈着あり 白粒粗粒砂～極粗粒砂を30%含む
- 12 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト～粗粒砂 Fe分沈着あり 白粒粗粒砂を30%含む
- 13 暗緑灰 5G4/1 細粒砂～中粒砂 Fe分沈着あり
- 14 暗青灰 5BG4/1 細粒砂～中粒砂 Fe分沈着あり 13層よりも粒子が粗い
- 15 黄褐 2.5Y5/3 中粒砂 粗粒砂ラミナを含む
- 16 褐灰 10YR4/1 微粒砂～極粗粒砂 Fe分沈着あり 0.5cm～1.0cm大の礫を40%含む
- 17 灰オリーブ 7.5Y5/2 粗粒砂～極粗粒砂
- 18 暗緑灰 5G4/1 細粒砂～中粒砂 Fe分沈着あり
- 19 灰 7.5Y5/1 シルト～中粒砂 Fe分沈着あり シルトベースに中粒砂ブロックを含む
- 20 青灰 5BG5/1 微粒砂～細粒砂 微粒砂ベースに細粒砂ラミナを含む
- 21 オリーブ灰 5GY5/1 粗粒砂～礫 23層のブロックを含む
- 22 暗青灰 5BG4/1 微粒砂～粗粒砂 Fe分沈着あり 白粒粗粒砂から礫を10%含む 粗粒砂ブロックを含む
- 23 黒褐 2.5Y3/1 微粒砂～粗粒砂 腐植土の可能性
- 24 暗緑灰 5G4/1 細粒砂～中粒砂 中粒砂～粗粒砂ラミナを含む
- 25 暗オリーブ灰 5GY4/1 シルト～微粒砂
- 26 暗オリーブ灰 5GY4/1 細粒砂～粗粒砂 細粒砂ベースに粗粒砂ラミナを含む
- 27 オリーブ灰 5GY5/1 細粒砂～中粒砂 ラミナ、植物遺体を含む
- 28 オリーブ灰 5GY5/1 細粒砂～粗粒砂 細粒砂ベースに粗粒砂ラミナを含む 植物遺体を含む 1.0cm大の礫を10%含む
- 29 オリーブ灰 2.5GY6/1 中粒砂～粗粒砂 中粒砂ベースに粗粒砂ラミナを含む 植物遺体を含む
- 30 灰 10Y4/1 細粒砂～極粗粒砂 互いにラミナを含む
- 31 黒褐 10YR3/1 中粒砂～礫 シルトブロックを含む
- 32 灰黄褐 10YR4/2 細粒砂～粗粒砂
- 33 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト～微粒砂
- 34 黒褐 10YR3/1 シルト
- 35 緑灰 10G5/1 細粒砂～中粒砂 Fe分沈着あり 白粒極粗粒砂を20%含む
- 36 オリーブ灰 5GY6/1 微粒砂～細粒砂 Fe分沈着あり 白粒極粗粒砂を20%含む
- 37 灰 5Y4/1 微粒砂 Fe分沈着あり 白粒極粗粒砂を10%含む
- 38 オリーブ灰 2.5GY5/1 細粒砂～粗粒砂 極粗粒砂ブロックを下部に多く含む
- 39 暗青灰 10BG4/1 シルト～極粗粒砂 シルト、中粒砂、粗粒砂～極粗粒砂ラミナを含む
- 40 灰 7.5Y4/1 細粒砂～粗粒砂 Fe分沈着あり 白粒粗粒砂を30%含む
- 41 暗青灰 5BG4/1 微粒砂～粗粒砂 Fe分沈着あり 中粒砂～細粒砂、白粒極粗粒砂を30%含む
- 42 青灰 5BG5/1 微粒砂～細粒砂 細粒砂ラミナを含む
- 43 灰 N6/0 灰 細粒砂～粗粒砂
- 44 灰 N6/0 灰 細粒砂～粗粒砂 白粒粗粒砂～極粗粒砂を10%含む
- 45 青灰 5BG5/1 微粒砂 白粒粗粒砂を5%含む
- 46 緑灰 10GY5/1 微粒砂～細粒砂 中粒砂～極粗粒砂ラミナを含む

図30 04-2-2 2 溝断面図 (調査区東壁)

3溝は調査区ほぼ中央部で検出された溝である。この溝も残存掘り込み面はT.P. 8.3mである。北側の肩部は大半残存していたが、南肩部は1溝、4井戸により欠失しており、正確にはわからない。溝幅は推定約5m、深さ1.8m以上を測る。埋土はシルト層と微・粗砂層の互層で10数層が東壁断面で確認された。自然流路と考えられる。縄文時代後期～晩期に属する土器小片が2点出土した(図31-86・87)。

5溝は調査区中央部やや南よりで検出された。3溝と平行するような形で流れていたようである。北の肩部は4井戸、1溝により切断され欠失している。溝幅は約5m、深さ1.8m以上を測る。埋土は3溝に比べやや粗い粗粒砂が多く一部に黒褐色粘土が含まれた自然流路で、土器はまったく出土しなかった。一部に小枝、葉などの植物遺体が混じっていた。これも土層から判断して縄文時代に属すると推定される。

6溝は調査区南端部西壁で一部が検出された溝である。大半は1溝により削平されていた。断面でつかめる溝幅は約2mである。これは溝肩からその下端までであり、本来の溝幅は5m前後と推定される。なお、5溝と6溝の間、T.P. 6.7m～7.0mの深さで直径約30cm、長さ約3mの木が発見された(図28)。樹種はオニグルミである。縄文時代前期～中期頃のものとして推定される。

04-2-2 出土遺物(図31～33、図版24～27) 本調査区では、縄文土器、土師器、須恵器、瓦器、染付、陶器、石器などの遺物が出土した。86・87は3溝、それ以外は1溝からの出土である。

86・87は縄文土器である。86は角閃石を含む生駒山西麓の胎土で、石英粒が卓越する。小片のために詳細は判らないが、図の上部に突帯を貼りつけている。器壁厚は5mmほどである。87は灰褐色の胎土精良の土器片で、わずかにだが角閃石を含む。器表に凹凸があるが、条痕様のものか磨耗のため判断できない。器壁厚は7mmほどである。

88は須恵器の器台部であると思われる。3条の沈線、波状文、流水文、波状文、1条の沈線を施している。89は土師器甕である。復元口径は15.6cmである。外面はナデの後斜め方向のハケの調整を施している。頸部内面は斜め方向のハケの調整を施している。90～92は須恵器である。90は壺の底部、91、92は坏である。93は黒色土器椀の底部である。内面はナデの後、ヘラによるミガキの調整を施している。94は土師質羽釜である。

95～113は染付碗である。95～97・100・101・103・104・109は外面に露草文を描いている。99・107・110・111は外面に草花文を描いている。98・102も外面に草花文を描いていたと思われるが、焼成不良のため詳細は不明である。105は外面に二重網目文を描いている。106・108は、呉須の発色が悪く描いた絵の詳細は不明である。112は絵柄は不明である。113は口縁部付近のみ残存する。外面は呉須で2条の線を描き、その下に「寿」の呉須銘が見られる。内面には1条の線、雲文、2条の線を描いている。破片のため詳細は不明である。106・107・109・110・111は高台裏に呉須銘が見られる。106・109は不鮮明なため呉須銘は不明である。107は「寿」の渦巻き福、110は「太明年製」、111は「寿」の銘が見られる。また、111は内面見込みでは圏線を2条に配し、中央にコンニャク印判で梅花文を施している。95・96・100・102・103・110は蛇ノ目の釉剥ぎを施している。112・113は瀬戸焼、それ以外は肥前焼であると思われる。114は染付皿である。体部内面には蔓草文を描いている。内面見込みでは圏線を2条配し、菖蒲を描いている。115は青磁盤である。内面に何らかの絵が描かれているが破片のため詳細は不明である。破損した部分では漆接ぎの痕跡が認められる。116は磁器皿である。内面に菊弁を描く。内面見込みでは菊弁の内に、菊花文と鳥文を描いている。釉は高台裏が白釉で、それ以外はコバルト釉である。117は染付仏花瓶である。体部外面には草花文、高台外面には2条と3条

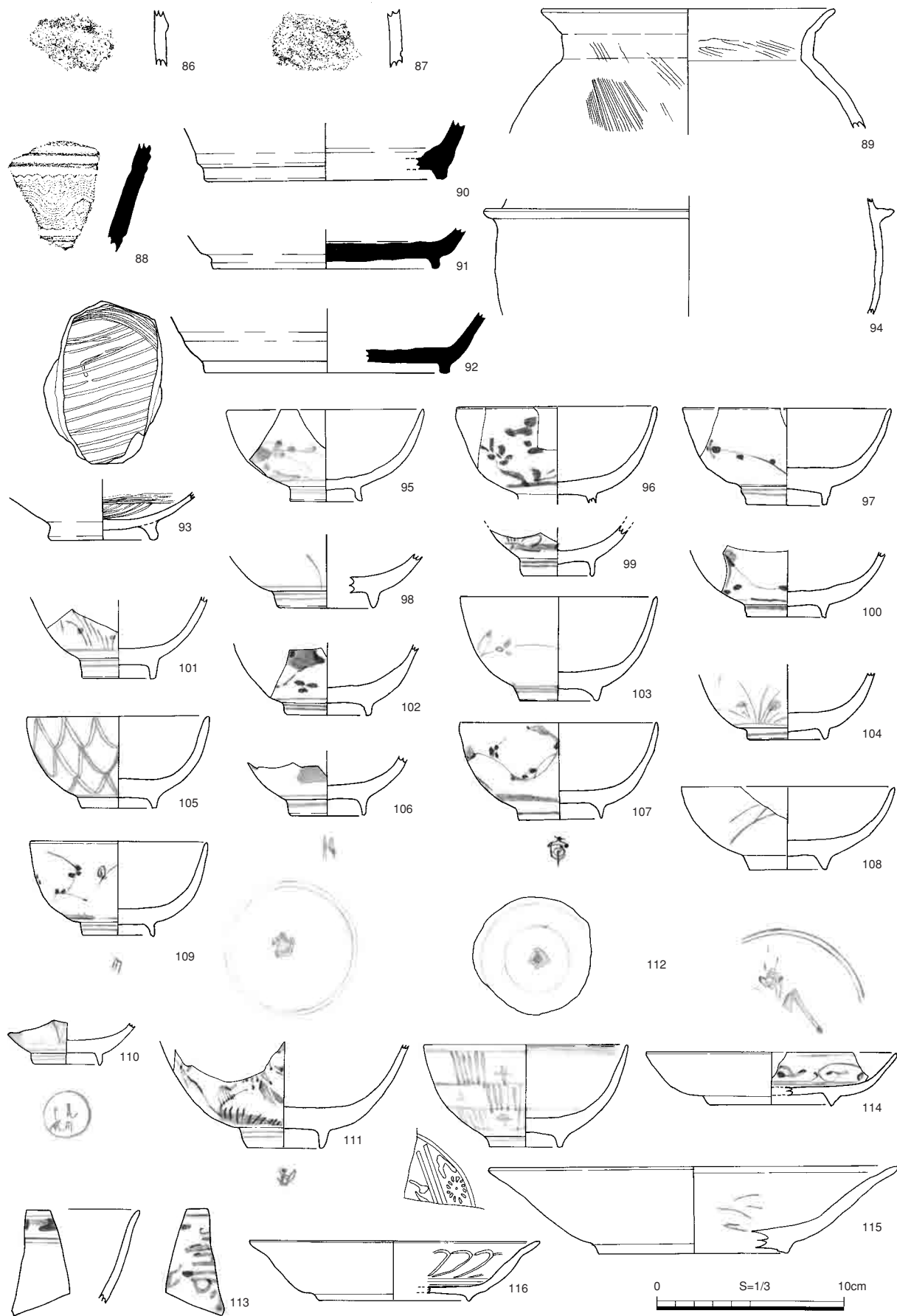


图31 04-2-2 出土遺物 (1)

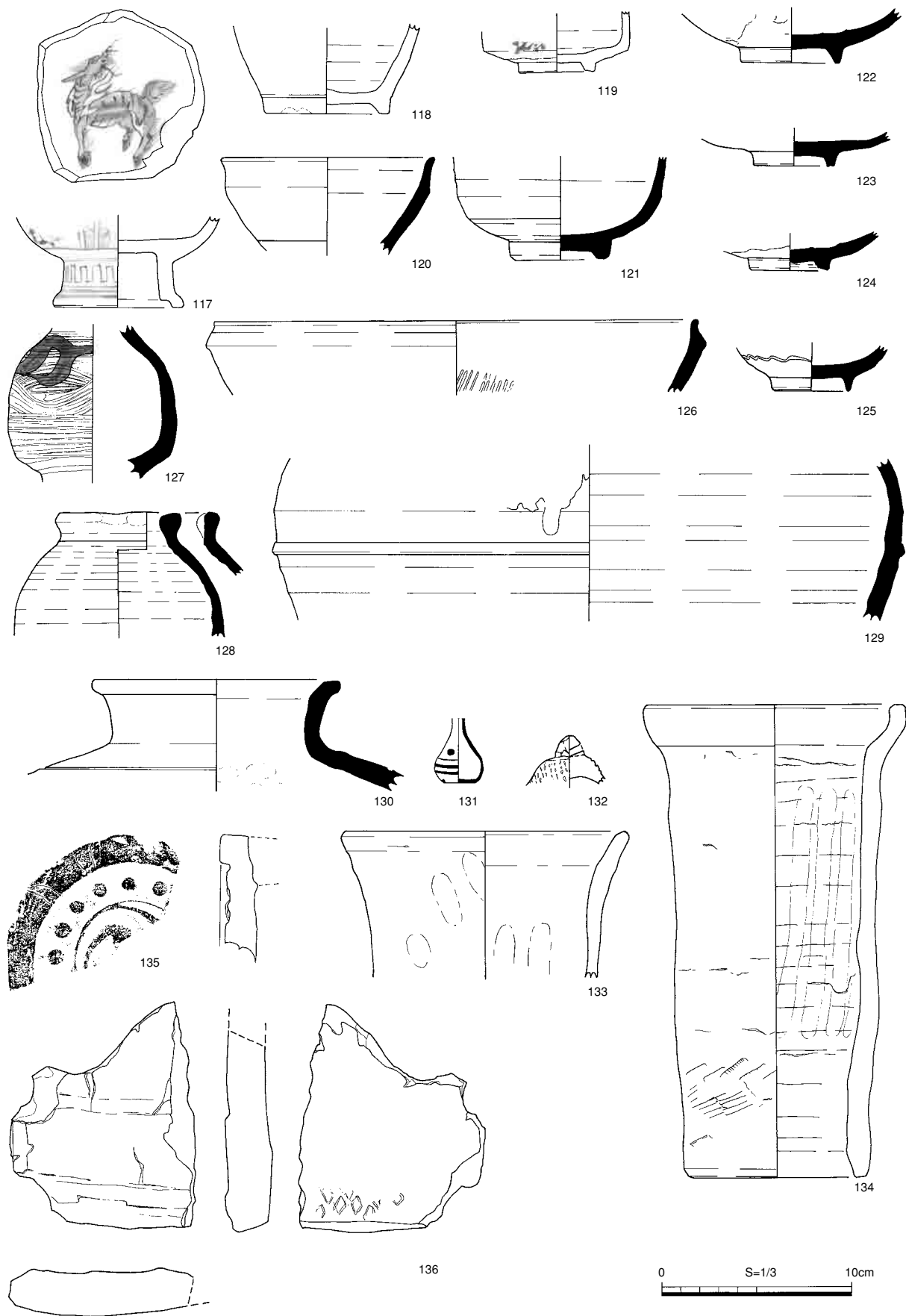


图32 04-2-2 出土遺物(2)

の線の間には雷文が描いている。内面見込みには麒麟が描いている。瀬戸焼である。118は壺又は甕の底部である。釉は灰白色である。119は筒茶碗である。外面には何らかの絵が描かれていたが、欠損しているため不明である。瀬戸焼である。120～131は陶器である。120は天目茶碗である。釉はにぶい赤褐色で、胎土は密である。121は碗である。体部外面上方ではナデ、下方ではハラケズリの調整を施している。釉は暗褐色で、胎土は密である。122～124は皿である。122は唐津焼であると思われる。内面見込みには蛇ノ目の釉剥ぎを施している。釉は灰白色で、胎土は密である。123は唐津焼である。釉は銅緑釉で、胎土は密である。124は内外面ともに釉が弾けており詳細は不明である。釉は緑灰色で、胎土は密である。125は碗である。内外面ともに釉が弾け詳細は不明である。釉は白灰色で、胎土は密である。126は播鉢である。播目は7条以上を単位とする原体により施している。色調は褐灰色で、胎土は粗である。127～130は壺である。127は唐津焼であると思われる。ハケにより施釉する。釉は灰白色で、胎土はやや密である。128はお歯黒壺であると思われる。口縁端部の一部をつまみ、ハラで切り込みを入れた片口をもつ。釉はにぶい赤褐色で、胎土は密である。129は自然釉が付着している。釉は灰白色で、胎土はやや密である。130は肩部に1条の沈線を施している。備前焼である。色調は暗赤灰で、胎土はやや密である。131は船徳利のミニチュアである。ロクロ成形である。江戸時代の遊玩具であったと考えられる。釉は暗褐色で、胎土は密である。132は土鈴である。外面は乳を模した無数の刺痕がみられる。鈕は何回か粘土を継ぎ足し成形している。133・134は瓦質の土管である。133は内外面ともにナデの調整を施している。134は体部下方でハケによる調整を施している。135は軒丸瓦である。瓦当のみ残存する。内区には右回りの細い巴文を配し、巴文の尾は圏線と一体となる。外区には、径が大きく間隔の広い珠文帯がある。瓦当表面には布目と離れ砂が付着している。136は平瓦である。凹面には布目痕と平行した横方向の筋が確認できる。凸面は、格子叩きを施した後、粗くナデ消している。

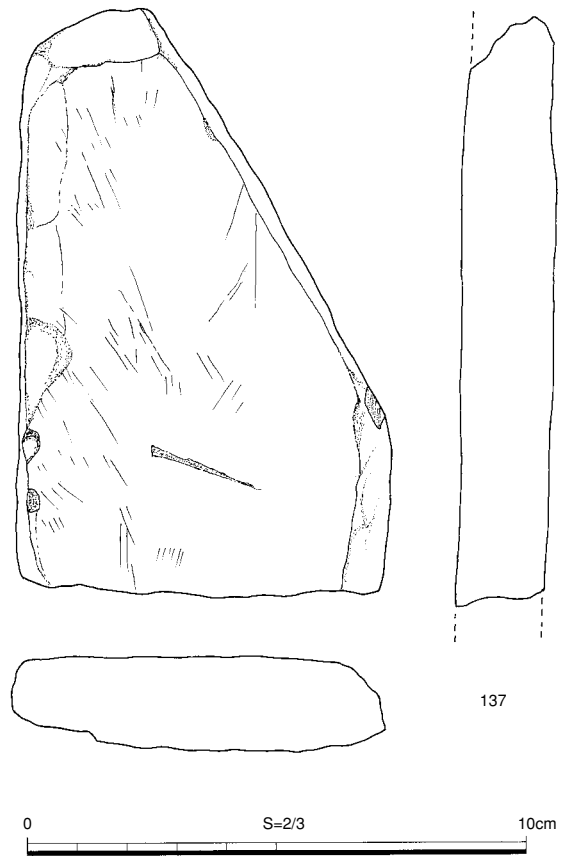


図33 04-2-2 出土遺物(3)

137は硬質砂岩の置砥である。研面にはわずかに擦り跡が残るが、極めて平滑である。仕上砥として使用されていたと思われる。長さ11.6cm、幅7.5cm、厚さ1.8cm、重さ260.04gを測る。



## 第3章 まとめ

ここ数年間にわたって実施した第二京阪道路予定地内の大規模な面積の発掘調査の時点では、地元住民が頻繁に使用している現在の道路、里道、水路部分等は発掘調査対象から除外していた。しかし、発掘調査終了地区から道路建設工事が着手され始めたため、未調査部分の現道、里道、水路等のうち、隣接地で重要な遺構や遺物が発見されている部分に限定して大阪府教育委員会の指示により発掘調査を実施した。その中の一部が、今回ここに報告する小路遺跡04-1、04-2の発掘調査報告である。ここで今回の発掘調査の主眼である縄文時代の自然流路、古墳時代初めの前方後方形周溝墓の周溝、奈良時代～平安時代初頭期の祭祀遺物が多量に出土する溝、条里制に関連する可能性がある里道、水路等の問題を中心にしながら、小路遺跡周辺で発見されている遺構、遺物等について簡単なまとめをおこなってみたい。

### 旧石器時代

小路遺跡周辺では旧石器時代の遺構は発見されていない。この時期の遺物は寝屋川市内では国府型ナイフ形石器等が小路遺跡、高宮遺跡、讃良郡条里遺跡、讃良川遺跡、太秦遺跡、伝寝屋長者屋敷遺跡等で発見されている。

### 縄文時代

寝屋川市内の縄文時代では、小路遺跡に西隣する讃良郡条里遺跡（その1）で発見された早期の粕畑式土器、入海式土器が古い時期に属するもので、前期から晩期の土器は小路遺跡近辺のいくつかの遺跡で発見されている。小路遺跡の北に接する高宮遺跡では、昭和55～57（1980～1982）年の寝屋川市教育委員会の発掘調査により縄文時代前期の土坑が発見され、土器や石器が出土している。このあたりは海拔28m前後の低丘陵部で今回の小路遺跡の調査区とは20m近い比高差がある。今回の小路遺跡の調査でも少量ではあるが前期～晩期の土器片が流路などから出土している。今回調査の04-1-4区、04-2-2区（図4）で縄文時代前期～晩期の自然流路が5本以上発見されている事実からみても、小路遺跡周辺は度重なる氾濫が繰り返されたようである。何千年もの長い期間であり、ある時期には定住可能な安定した時があったかもしれない。当センターが発掘した讃良郡条里遺跡（その4）の調査では縄文時代中期後半、北白川C式期の土器が一箇所に相当量かたまっている（2007年度報告書刊行予定）。また、近辺で縄文時代の遺構が発見されている遺跡として小路遺跡の南東部に隣接する讃良川遺跡がよく知られている。この遺跡は寝屋川市教育委員会が平成2（1990）年度に発掘調査を実施し、縄文時代中期初頭から後期初頭に属する集落跡で、落ち込み、貯蔵穴、溝、土坑等が発見された。船元式Ⅱ・Ⅲ式土器を主体として、東北、関東、北陸、東海系の土器も出土している。出土した土器、石器の量は整理箱400箱以上を数える。大阪府下の縄文時代遺跡の中でも讃良川遺跡の出土遺物量の多さは群をぬいている。讃良川遺跡に東隣する四條畷市の更良岡山遺跡でも四條畷市教育委員会、大阪府教育委員会の発掘調査により土坑墓等の遺構や多量の遺物が発見されている。特に遺物で土偶、注口土器、ヒスイ製石斧、土製勾玉、北陸産の彫刻石棒等の出土は特筆に値する。年代は縄文時代後期～晩期に属する。土器は中津式、元住吉山式、宮滝式、滋賀里式などが出土している。小路遺跡の南南西約600mの四條畷市砂遺跡では1983年度の大阪府教育委員会の発掘調査で縄文時代中期～晩期の遺物が発見されている。中期の土器は船元Ⅱ・Ⅲ式が多い。晩期の土偶の破片も出土している。流路、土器棺墓、土坑墓



が発掘されている。小路遺跡、讃良郡条里遺跡、砂遺跡、讃良川遺跡等、現在の平地部およびその周辺の丘陵裾部にはかなりの量の縄文時代遺物が埋没しているものとみられる。この一帯には谷状地形がいくつか入り組んで存在したのであろうが、資料が少なく形状、方向、規模は不明である。低地部に立地する長保寺遺跡では縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式、Ⅳ式期の土器が出土しており、Ⅲ式の深鉢土器に杓の圧痕跡が認められた。高宮八丁遺跡では同じく縄文時代晩期の船橋式、長原式の土器が出土している。

#### 弥生時代

弥生時代、小路遺跡では顕著な遺構、遺物は今のところ発見されていない。弥生時代中期、後期の土器片が少量発見されているが、遺構は不明である。寝屋川市域全体ではいくつかの弥生時代集落跡が発見されている。弥生時代前期の集落としては、小路遺跡の北西約 1.5km、府立寝屋川高等学校、市立中央小学校の南東部に隣接する位置に高宮八丁遺跡がある。この遺跡は京阪・寝屋川市駅の南東約 500m に位置し、低地部に立地する遺跡である。この遺跡では竪穴住居址は検出されていないが柱穴、土坑、貯蔵穴、溝などが発見されており、多量の土器、石器、木器等が出土している。この遺跡は弥生時代中期前葉まで継続し、以降、途切れるが、古墳時代に再び集落として利用されている。

弥生時代中期前葉には小路遺跡北東約 1 km の寝屋川丘陵上に弥生集落が出現する。太秦遺跡（中央部）である。昭和40（1965）年、大阪市水道局豊野浄水場の工事中に弥生時代中期前葉の土器の他、石鏃、石庖丁などの石器が相当量採集されている。また、太秦遺跡（中央部）の北西約 600m の場所で昭和62（1987）年の発掘調査で弥生時代中期中葉～後葉の土器、石器が出土している。これは『寝屋川市史』第一巻では、太秦中町遺跡として記載されている。現在の大阪府遺跡分布図ではこの地域は太秦遺跡、太秦古墳群にまとめられているが、今回は便宜上、太秦遺跡（北西部）として記述する。太秦遺跡（中央部）の南側隣接地が第二京阪道路の予定地となり、当センターが確認調査で発見し、遺跡範囲拡大により本格的な発掘調査を実施した太秦遺跡（南端部）では38棟の竪穴住居址、方形周溝墓 1 基などが発掘されている（年度内報告書刊行予定）。同じく大尾遺跡では40基前後の方形周溝墓、2 棟の竪穴住居址が発見されている。その年代は弥生時代中期中葉～中期末葉に属する。太秦遺跡（南端部）、大尾遺跡で竪穴住居址群をつくり弥生人が居住した期間と大尾遺跡、太秦遺跡（南端部）の方形周溝墓群の造営期間はほぼ一致する。太秦遺跡（南端部）、大尾遺跡の住人たちがつくったお墓が大尾遺跡、太秦遺跡の方形周溝墓であったと考えられる。それは弥生時代中期後半の 100年弱の期間、3～4 世代の間と推定される。

小路遺跡周辺では弥生時代後期のまとまった遺構は今のところ発見されていない。小路遺跡の北西約 3 km の低地部で楠遺跡、池田西遺跡、高柳遺跡等から遺構、遺物がいくらか発見されている。その中で、楠遺跡で青銅器鑄造用土製鑄型等が出土していることは注目される。丘陵上では平成元（1989）年太秦遺跡（中央部）の大阪市水道局豊野浄水場内の試掘調査で遺構は発見されていないが、弥生時代後期の土器が出土している。また小路遺跡の東方約 1.5km に位置する打上中道遺跡でも後期の土器が発見されている。また太秦遺跡、大尾遺跡に比べ10m 以上標高差がある低丘陵上に位置する高宮遺跡では弥生時代中期末～後期の方形周溝墓が 2 基発見されている。この一帯にはもっと多数の方形周溝墓が存在したと推定されるが古墳時代中期以降、集落となり階段状の大造成が行われた結果消滅したものと考えられる。この高宮遺跡の報告書では弥生時代中期後半には丘陵最高所につくられていたお墓が後期には丘陵中部の高宮遺跡一帯につくられ、墓地が続いていたのではないかと推測している。そこで高宮遺跡の北に隣接する丘陵、現在の「あさひ丘住宅」が開発された地域が問題となる。この地域は東西約 600m、

南北約 300mにわたる。この住宅の開発時にはまだ文化財の調査体制が整っておらず、発掘調査は実施されていないので遺跡の存否は不明であるが、この範囲内に弥生時代中期～後期の集落、墓域が存在した可能性も考えられる。

#### 古墳時代前期

今回、未調査部分の発掘調査をおこなった前方後方形周溝墓は古墳時代前期初頭に属する。以前の発掘調査結果でみると、この前方後方形周溝墓は自然傾斜と平行して北東から南西方向に主軸をもち、全長22.7mを測る。後方部長さ12.2m、幅10.2m、ややバチ形をした前方部は長さ10.5m、前方部先端の幅7m、くびれ部での幅3.4mであり、周溝の幅は2.5m～3.5m、深さ0.4m～0.5mを測る(図35)。残念ながら埋葬主体部は削平により消失している。周溝内に堆積した黒褐色粘土層中の一部の場所から波状文、円形浮文、竹管文などで飾られた壺形土器などが以前の発掘調査で10数点出土している(図35)。今回の調査でも壺形土器の破片が出土した(図9)。また、今回の調査では後方部の北側周溝内で黒褐色粘土層が埋没した径1m弱の土坑が発見された(図7)。この土坑は現代井戸、中～近世の水路で切断され、約四分の一しか残存していなかったが、その中心部がピット状に窪んでいた(図8)。水路で切断されているのでこの土坑が複数存在したのか、単独であったのかはわからない。この土坑は形状、規模から埋葬遺構、柱穴の可能性は考えにくいものである。その用途、機能は判然としない。以前の調査で周溝から出土した土器の中には、口縁部が周溝底面に接しているものもあり、前方後方形周溝墓の盛土上に据えられていたものが転落したと考えられる。また出土土器の中には東海・伊勢地方、瀬戸内東部の影響をうけているものも含まれていると報告されている。奈良県桜井市所在の「ホケの山古墳」出土の壺形土器にも似たものが存在する。これらの出土土器は庄内式期に併行し古墳時代初頭に属するものと考えられる。この前方後方形周溝墓の周辺には一辺数mから10m前後の規模の方形周溝墓が16基～17基(図4)発見されている。これらの方形周溝墓で土器を出土している例は少ししかないが、それらはいずれも前方後方形周溝墓の年代に近い時期に属する。また、土器を伴わない大半の方形周溝墓もほぼ同じ時期に属するものと推定される。この墓域は道路用地外の北側にのびており発掘すればまだ相当数の方形周溝墓が発見されると思われる。

弥生時代中期後半に太秦遺跡(南端部)、大尾遺跡等、寝屋川丘陵の最高所一帯に作られていた方形周溝墓群が弥生時代後期には一段低い丘陵の高宮遺跡一帯につくられ、古墳時代初頭期にはさらに一段下がった平地部の小路遺跡一帯につくられていると想定できるならば、近辺の集落遺跡の歴史的な継続性が考えられる。この小路遺跡の前方後方形周溝墓とほぼ同じ時期の前方後方形周溝墓は大阪府下では八尾市久宝寺遺跡などで発見されているがその形態はかなり相違している。小路遺跡内ではこれらのお墓をつくった人たちが住んでいた集落・堅穴住居址は発見されていないが小溝などが検出されている。また約200m西隣の讃良郡条里遺跡(その4)の発掘調査で、方形周溝墓群の築造時期に少し先行する時期の堅穴住居址5棟、掘立柱建物2棟、井戸等が発見されている(2007年度報告書刊行予定)。この堅穴住居址群は集落の端部にあたり集落跡の中心部には方形周溝墓と同時期の堅穴住居址があったと推定される。その集落を営んだ人たちおよび周辺の集落の人々が小路遺跡の前方後方形周溝墓を含む周溝墓群を築造したと想定される。讃良郡条里遺跡(その4)で発見された堅穴住居址群は掘り込みや壁溝がわずかに残存するだけである。この点から判断して平地部では相当数にのぼる堅穴住居址が後世の削平により消滅し、なくなっていると推定される。また、讃良郡条里遺跡(その5)調査区(府道大阪外環状線の東隣接地)でも同時期の井戸が1基発掘されている(2006年度報告書刊行予定)。寝屋川市域

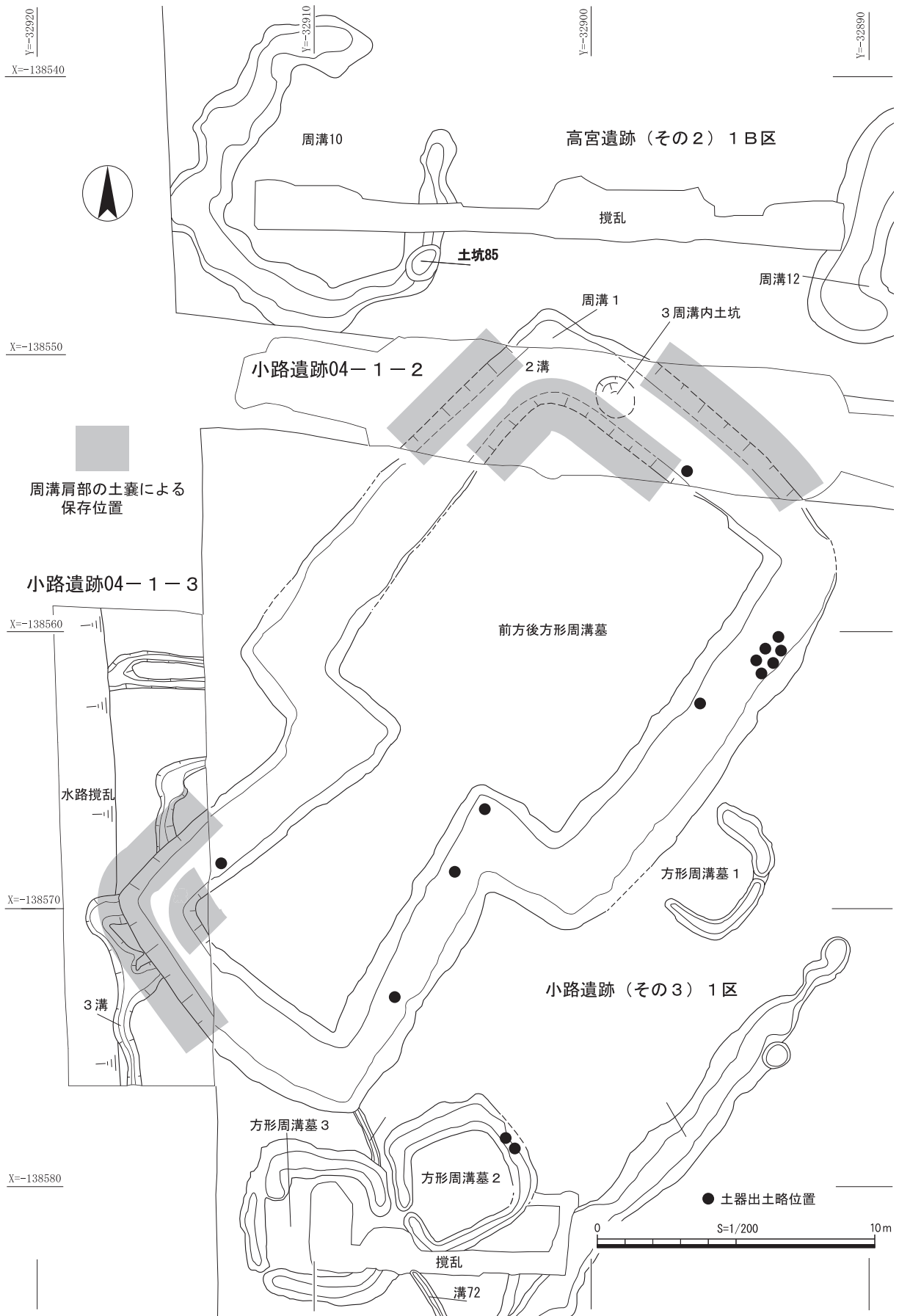


図35 04-1-2・3 調査区と既調査区遺構配置図

では小路遺跡の周溝墓群の築造年代に近い時期に築かれた古墳は今のところ発見されていない。北河内地域では交野市森の丘陵上に築かれた全長 106m、バチ形前方後円墳である森古墳群 1 号墳（雷塚）およびその傍の鍋塚古墳が近い時期と考えられる。4 世紀代には近くでは四條畷市岡山の忍陵神社が鎮座する独立丘陵上に全長87mの前方後円墳、「忍岡古墳」が築造されている。この古墳の主体部埋葬施設は南北に長軸をもつ長さ約 6.3mの竪穴式石室である。盗掘を受けており青銅鏡は確認されていないが鉄形石、石釧、紡錘車、鉄剣、鉾、鉄鏃、鎌、刀子、小札等が出土している。

#### 古墳時代中期～後期

また、古墳時代中期～後期には小路遺跡周辺の遺跡で竪穴住居址等の遺構がかなりの量発見されている。小路遺跡の北に隣接する高宮遺跡では当センターの調査で中期、5 世紀代を中心とした29基以上の竪穴住居址が検出されている。韓式系土器も多く出土し、作り付け竈をもつものも多くある。小路遺跡の西北西約 1.5kmに所在する長保寺遺跡、北北西約 3 kmに位置する楠遺跡等、寝屋川市教育委員会による発掘調査でも韓式系土器が多く出土しており、これらの遺跡は渡来系氏族と濃厚な関連があったと考えられる。小路遺跡の北方約 1 kmの地には太秦という地名も存在し、秦氏の居住地といわれている。またこの時期には四條畷市域を含めこの地域の大半の遺跡から馬歯が出土する。小路遺跡の南西約 1.2kmに位置する四條畷市葎屋北遺跡からは馬 1 頭が埋葬され、その全身骨格がほぼ完全な形で出土している。この遺跡では 5～6 世紀代の竪穴住居址が約50棟、掘立柱建物が約60棟、井戸が約10基発見されている。寝屋川市域、四條畷市域一帯のこれらの遺跡はこの時期、ヤマト政権と深く結びつくと思われる馬の飼育等に関与する渡来人集団との関連が想定される。製塩土器も大量に出土しており、塩は馬の飼育に使用したものであろう。またこれらの集落遺跡の発掘では井戸も多数発掘されており、井筒、井戸枠に船材、扉材が使用された井戸が数例発見されている。古墳時代の馬の全身骨格が発見された例としては東大阪市日下遺跡等がある。この時期の古墳としては小路遺跡の北東約 1 kmの寝屋川丘陵上、標高45mの最高所に直径37mの円墳、太秦高塚古墳（別名トノ山古墳、寝屋川市指定史跡）が築かれる。この古墳は高さ 7 m、2 段築成の円墳で、造り出しが付設されている。朝顔形埴輪および円筒埴輪の列がめぐり、造り出し部では人物、水鳥、鶏、家、盾、衣蓋などの器財形埴輪も出土している。主体部は木棺直葬で、盗掘を受けていたが短甲、鉄鏃、鉄斧、鏡などが残存していた。5 世紀後半に属する。この古墳と秦氏との関連は地名以外には何ら指摘できないが、現在判明している中では寝屋川市内で最大規模の古墳である。また太秦高塚古墳を含むこの一帯の太秦古墳群、その周辺にはモロ塚、廻シ塚、小金塚など古墳の存在を示す地名があり、小字、宮ノ奥では鹿形埴輪の頭部が出土しており、ゲンゲ谷、北ノ垣外からも埴輪が発見されている。その他に 4 世紀～5 世紀前半に属すると考えられる銅鏃、中期～後期に属する小形方格規矩文鏡、獣帯六鈴鏡、金環、三環鈴、直刀、鉄鏃、勾玉、子持勾玉、紡錘車などが採集品として伝わっている。これらの遺物がこの地域で出土したことに間違いのないなら、太秦古墳群内およびその近くに古墳時代前期の古墳が存在し、また中期～後期の古墳もいくつか存在したものと推定される。また国守の教育センターの隣接地、三味頭遺跡で寝屋川市教育委員会の発掘調査により、一辺約15m程度の方墳の周溝が発見され、その中から須恵器、土師器の他、家、鳥、衣蓋などの器財形埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪が出土している。本来この古墳は南に隣接して存在する四條畷市域の更良岡山古墳群と一体の古墳群と考えられる。第二京阪道路予定地内の太秦古墳群南端部では当センターの発掘調査で27基の方墳、円墳が発見されている。全ての墳丘は削平されており埋葬施設は 1 例を除き大半が消滅していたが、ほぼすべてが木棺直葬であったと推定される。築造年代は 5 世紀後半～6 世紀に属する。その

内、15基分は既に発掘調査報告書が出版されている。残りの12基分は今年度内に報告書の刊行を予定している。寝屋川市内で横穴式石室をもつ古墳は2基確認されている。一つは太秦古墳群の東方1km弱の場所に当センターで調査した直径18mの円墳、奥山1号墳である。もう一つは奥山1号墳の東方約400mの府営寝屋川公園内にある北河内地域最大の巨石を使用した直径22mの円墳、寝屋古墳（大阪府指定史跡）である。その他に太秦高塚古墳の南東約1kmの打上地域に横穴式石室の石材と推定される巨石が集められている。近辺に何基かの横穴式石室墳が存在し、破壊されたものと推定される。それにしても横穴式石室を主体部とする古墳は数が少量である。それに比し木棺直葬墳はかなりの数発見されている。また今後も相当数発見される可能性が指摘できるのに比べ、横穴式石室墳の発見はあまり期待できない。北河内地域全体でも横穴式石室墳は少ない。横穴式石室墳と木棺直葬墳との数量の差は北河内地域全体でも同様の傾向であり、河内地域全体の中でも北河内地域に所在する古墳群の特徴であると考えられる。また、太秦高塚古墳の南東約1.6kmの標高約100m、打上神社（高良神社）の社地に石の宝殿古墳（国指定史跡）が築造されている。この古墳は寝屋川市内の古墳としては最高所に築かれており、古墳時代終末期の花崗岩を削りぬいた横口式石郭を主体部とする全国的にも数少ない特殊な古墳である。被葬者は相当上位の階層の人物と推定される。

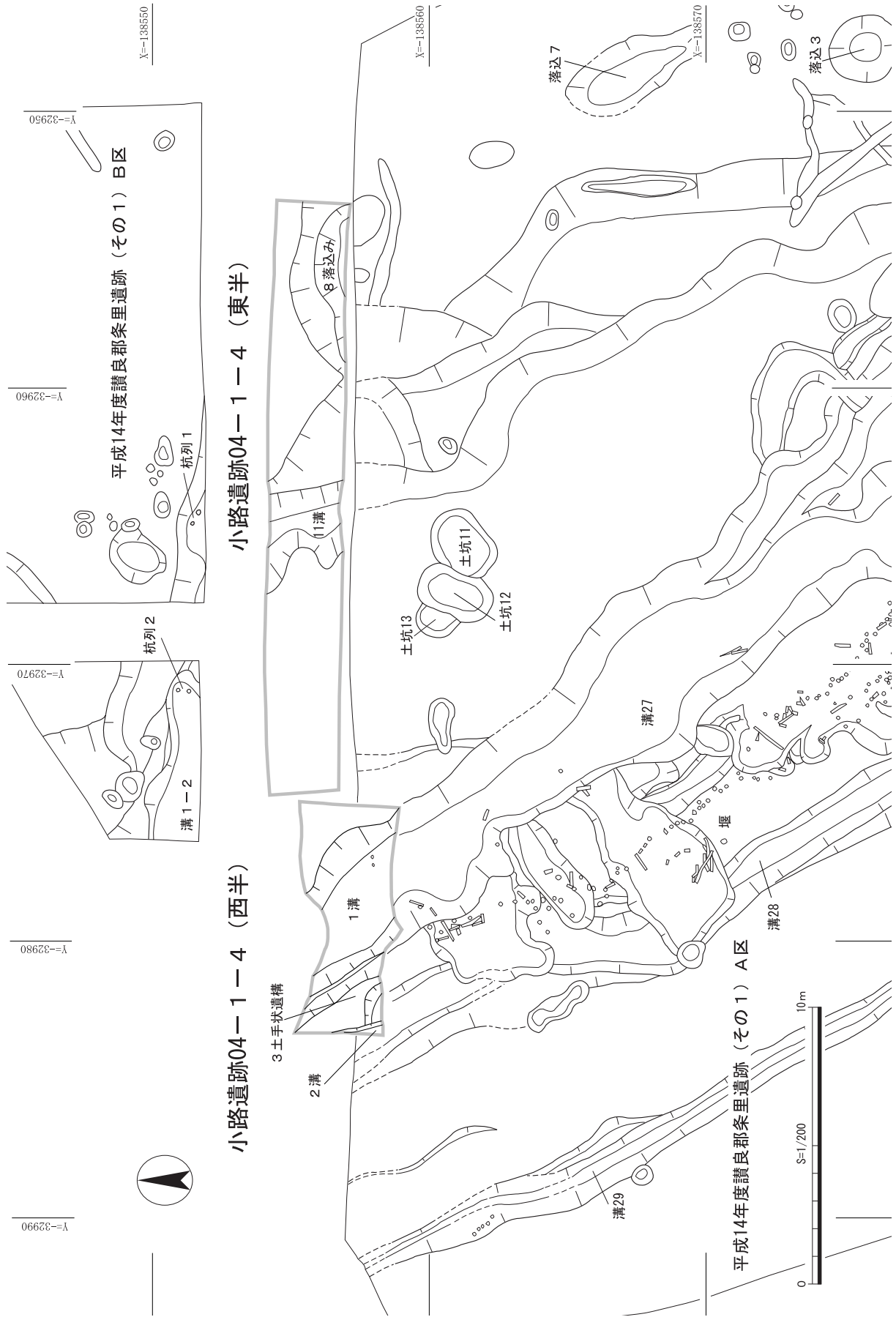
#### 古代

律令制下、現在の寝屋川市域は市域の南西部、西部、北部一帯が河内の国の「茨田郡」の一部に属し、他の地域は「讃良郡」の一部に属していた。讃良郡内には現四條畷市内の「正法寺跡」を含め、現寝屋川市内に「高宮廃寺」、「讃良寺跡」、「太秦廃寺」の4寺院が存在する。白鳳時代、小路遺跡の数百m北の低丘陵上に薬師寺式伽藍配置をもつ高宮廃寺が建立される。その周辺が高宮遺跡であり、寺跡の西側では寝屋川市教育委員会の発掘調査で7～8世紀代の掘立柱建物11棟以上、柵列の他、7世紀後半～8世紀初頭の竪穴住居址が6棟以上検出されている。律令制下、河内国讃良郡には「高宮郷」、「甲可郷」、「牧岡郷」、「山家郷」、「石井郷」の五郷が存在したことが『和名類聚抄』に記されている。小路遺跡およびその周辺地域は高宮郷に属するか、または枚岡郷との境界域に属していたと思われる。高宮遺跡は高宮廃寺、および式内社の「高宮大杜御祖神社」、同じく式内社で讃良郡の一の宮である「高宮神社」の存在からみて高宮郷に属することは確実であろう。高宮遺跡では当センターの発掘調査でこの時期の遺構としては奈良時代の大形総柱掘立柱建物が5棟発見されている。これは東西方向に整然と並ぶ倉庫群で米などを貯蔵した正倉であろう。規模は2間×2間、3間×3間で、掘り方の一辺は約1.2m～1.5m、柱痕跡の直径は約40cm～50cmを測る。これらの倉庫群は高宮廃寺との関連が考えられる。高宮遺跡ではこの他にも当センターの発掘調査により数十棟におよぶ掘立柱建物が検出されている。当センターが発掘調査を実施した第二京阪道路建設予定地内の小路遺跡周辺の遺跡では大半の遺跡で奈良時代、およびその前後の時代の掘立柱建物が検出されている。讃良郡条里遺跡（その3）、大尾遺跡、寝屋東遺跡でも多数の掘立柱建物が確認されている。

讃良郡の郡役所と推定される遺構は未だ発見されていないが、河内国「讃良郡」の郡名と同じ名称で呼ばれていたと推定されている「讃良寺跡」（小路遺跡の南東約600mに所在）周辺で検出される可能性が高いのではないかと考えられる。

#### 古代の溝

奈良時代から平安時代初めに属する祭祀に関連する溝の発掘調査も今回の調査主眼の一つであった。道路用地の北端と南端、2箇所を追加調査を実施した結果、いずれの調査でも祭祀に関連する遺物が出



小路遺跡04-1-4 (西半) 小路遺跡04-1-4 (東半)

図36 04-1-4 調査区と既調査区遺構配置図



土した。北端部の04 - 1 - 4（西半）調査区では人面墨書土器が3点、墨書土器破片5点、製塩土器破片数点等が出土した。またこの調査区の1溝と2溝の間で土手状遺構が検出された。雑木を敷き詰めて盛土を行い、杭による護岸の痕跡が確認されたことも特筆に値する。この2溝は1溝の堰で堰き止めた水を引水する水路であり、讃良郡条里遺跡（その1）の溝28に繋がる溝（図36）である。南端部の04 - 2 - 1調査区では人面墨書土器2点、馬歯、須恵器、土師器、製塩土器等の破片、木器で盤、曲物、箸、その他に桃の種子等が出土した。これらの遺物は災厄除去の祓え、病気平癒の祈願等々様々の祭祀を行う際、食物・飲み物など神様へのお供え用容器等として使用し、意識的に破砕したのもあったようである。

人面墨書土器および墨書土器破片は讃良郡条里遺跡（その1）の調査で17個体、口径復元20点、破片153点が出土、小路遺跡（その2）の調査で13個体と破片20点が確認されている。これらの人面墨書は口径30cm前後の甕、口径20cm前後の甕、口径15cm～16cm前後の甕、把手つき鍋に書かれている。墨書の表現内容は人面だけを描くもの、曲線や幾何学的な文様を描くもの、その両者を組み合わせたものに分けられる。また人面の表現も10種類前後に分けられそうである。人面の表現では秋田県の古代の「秋田城跡」出土例に類似したものも出土している。人面墨書土器は全体で50個体以上出土しているとみて間違いないであろう。都城等の出土例を除くと小路遺跡における人面墨書土器の出土数は非常に大量である。この溝からは絵馬、人形、斎申、底部穿孔土器、文字が書かれた土器、牛馬の顎と歯（頭部？）、桃の種子など祭祀に関連する遺物が種類も数量も多く出土している。水は南々東から北々西（北から西へ30°）に流れている（図4）。堰も発見（図36）されており、この溝は当時のこの地域の幹線水路であったと考えられる。この場所での祭祀は讃良郡内における祭祀の中でも特に重要な位置を占めていたかもしれない。調査区内、またはその近くに橋が架けられていたことも想定しなければならないであろう。04 - 2 - 2調査区の中世～近代初頭の1溝、および現代水路（十八川）も少し角度はずれるが、似

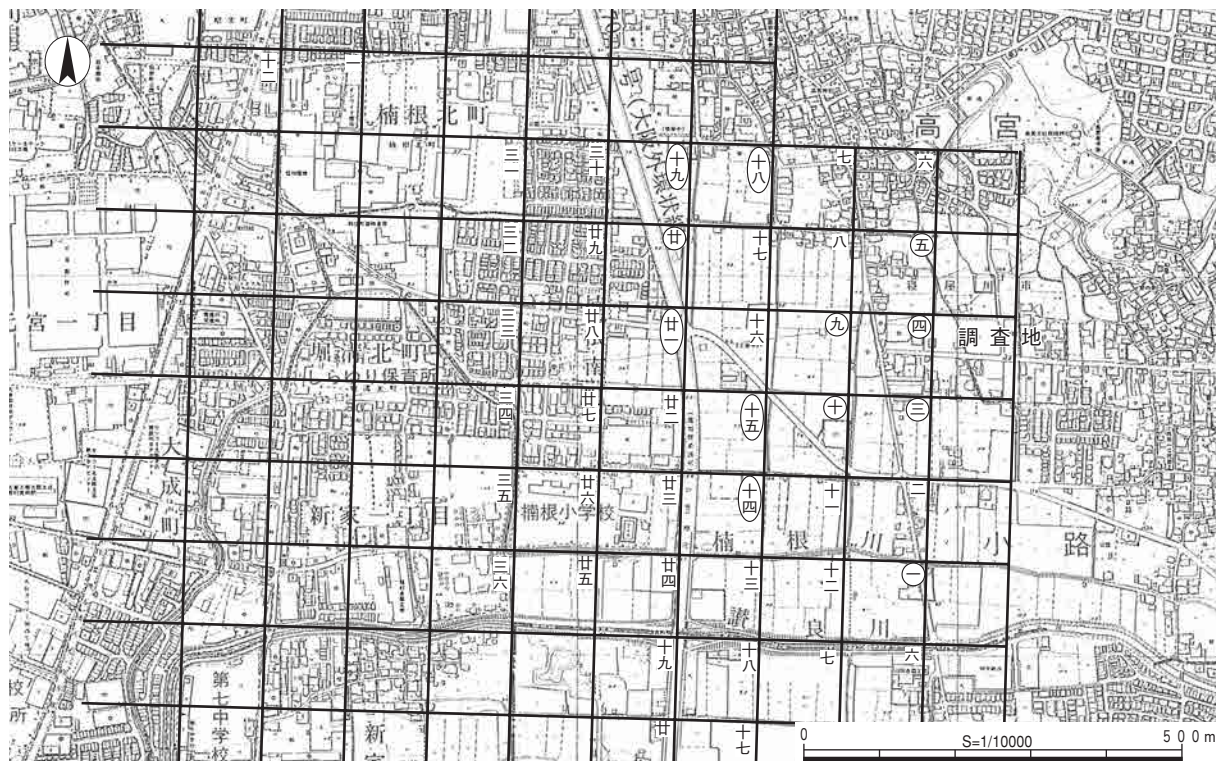


図37 小路遺跡周辺讃良郡条里復元図（漢数字の丸囲いは坪名が残存）

た方向に流れている（北から西へ約20°）。いずれの水路も南北方向にはのっていない。

## 条里制

条里制に関しては04 - 1 - 2～04 - 1 - 4 調査区のいずれも讃良郡条里遺跡の条里制の坪割り割付線上に位置している（図37）。それぞれの調査で流路等が確認されたが、数箇所瓦器の破片が出土しており、今回の発掘調査における条里区割りは鎌倉時代以降に属する時期と推定されるものであった。奈良時代に施行されたものが後に改修されれば、奈良時代に施行されたことを証明するのは難しい面がある。周辺の発掘調査でも似たような状況であるが、第二京阪道路予定地における讃良郡条里遺跡（その7）の条里遺構発掘調査では水田の畦畔から8世紀代と考えられる須恵器が出土しており、条里制が奈良時代に遡る可能性が拮めている。

## 参考文献

当センターの報告書で高宮遺跡の3冊（112集、115集、131集）小路遺跡の2冊（113集、122集）讃良郡条里遺跡の3冊（98、101集、109集）は第1章、第2節の参考文献で記載しているのでここでは再録しない。

寝屋川市	1966年	『寝屋川市誌』		
寝屋川市役所	1998年	『寝屋川市史』第一巻	考古資料編 I	
寝屋川市教育委員会	1979年	『国守遺跡』	寝屋川市文化財資料	
寝屋川市教育委員会	1981～1985年	『高宮廃寺』発掘調査概要報告Ⅱ～Ⅵ	（文化財資料3～6、8）	
寝屋川市教育委員会	1989年	『神田東後遺跡』	寝屋川市文化財資料	13
寝屋川市教育委員会	1991年	『高柳遺跡』	同	上 17
寝屋川市教育委員会	1992年	『高宮八丁遺跡 Ⅱ』	同	上 18
寝屋川市教育委員会	1993年	『長保寺遺跡』	同	上 19
寝屋川市教育委員会	1998年	『池田西遺跡』	同	上 24
寝屋川市教育委員会	1998年	『中神田遺跡 Ⅱ』	同	上 23
寝屋川市教育委員会	2001年	『楠遺跡 Ⅱ』	同	上 25
寝屋川市教育委員会	1997年	『石宝殿古墳の謎に迫る』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	1999年	『茨田堤と茨田屯倉』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	2000年	『よみがえる白鳳の伽藍』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	2001年	『青銅器の生産と弥生社会』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	2003年	『絵馬が語る古代の高宮』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	2004年	『邪馬台国と北河内』	（歴史シンポジウム資料）	
寝屋川市教育委員会	2005年	『奥山1号墳と北河内の後期古墳』	（歴史シンポジウム資料）	
四條畷市教育委員会	1981年	『更良岡山古墳群発掘調査概要』	四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報 9	
四條畷市教育委員会	2000年	『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』	讃良川改修工事に伴う発掘調査	
四條畷市教育委員会	2003年	『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』	（忍岡古墳ほか）	
大阪府教育委員会	2000年	『高柳遺跡』	大阪府埋蔵文化財調査報告 1999 - 3	
大阪府教育委員会	1991年	『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』	都市計画道路国守黒原線建設予定地	
大阪府教育委員会	1994年	『池田西遺跡発掘調査概要Ⅰ』	（現大阪府営寝屋川池田住宅敷地内）	
(財)大阪府文化財センター	2003年	『大尾遺跡』	(財)大阪府文化財センター調査報告書第 92 集	
(財)大阪府文化財センター	2003年	『太秦古墳群』	同	上 第 99 集
(財)大阪府文化財センター	2004年	『寝屋東遺跡Ⅰ』	同	上 第 123 集
(財)大阪府文化財センター	2005年	『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅰ』	同	上 第 126 集
(財)大阪府文化財センター	2005年	『大尾遺跡Ⅱ』	同	上 第 125 集
(財)大阪府文化財センター	2005年	『寝屋東遺跡Ⅱ』	同	上 第 130 集

古墳時代の採集遺物等は、現在 J R 東寝屋川駅近くにある「寝屋川市立埋蔵文化財資料館」で展示されている。

# 付章 讃良郡条里遺跡（その1）の出土遺物 <補遺編>

## 1. はじめに

讃良郡条里遺跡（その1）の発掘調査は、一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設予定地内の寝屋川市高宮に所在する地点に於て、国土交通省近畿地方整備局浪速国道工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが平成14年3月25日から平成14年12月20日まで実施した。調査報告書は既に『(財)大阪府文化財センター調査報告書第109集 讃良郡条里遺跡（その1）一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』として平成16年2月27日に刊行している。

本編は、調査報告書に於て諸事情により未掲載であった縄文時代以降の石器類の詳細な観察記録について、また同様に未掲載であった奈良時代中期から平安時代初頭にかけての祭祀関連遺物について補足して報告するものである。本編に未掲載の遺物写真については調査報告書に掲載されている。本編の執筆は京阪調査事務所調査第五係技師長戸満男（当時）が祭祀遺物、同専門調査員三浦基行が石器類を担当した<sup>註1)</sup>。尚、文章中の表現法や仮名遣いなどは執筆者の意向を尊重して敢えて統一していない。

## 2. 縄文時代以降の石器類（図38～42-1～45）

讃良郡条里遺跡（その1）の発掘調査では、合計45点の石器類が出土した。それらの多くは自然流路からの出土遺物ではあるが、奈良～平安時代に属する上面遺構の溝によって攪拌されているため、出土状況より明確な帰属時期を求めることは困難である。ただし8・27・28の3点に関しては、下層確認トレンチによる青灰色粘質土層から出土したもので、縄文時代前期後葉の土器と共伴している。

ここでは讃良郡条里遺跡（その1）で出土した石器を、剥片石器（1～35）・石製品（36～38）・礫石器（39～45）に分け、順に記述を行っていく事にする。なお、これらの出土地点や、法量については一覧表にまとめて掲載する。

### 石器類所見

1～3は、石鏃である。1は平基無茎式で縄文時代のもと考えられる。両面より刃部調整されているが、左右非対称で、先端部の調整も不十分なため未製品の可能性がある。2は平基無茎式で両面より連続した調整を施したもので、これも縄文時代のものであろう。先端部の約3～4mm程欠損している。3は弥生時代所産の突基有茎式で逆刺が屈曲し角を呈している。先端部を欠損しているが、背面には剥離痕が側縁部から中央部まで届く丁寧な調整が施されている。

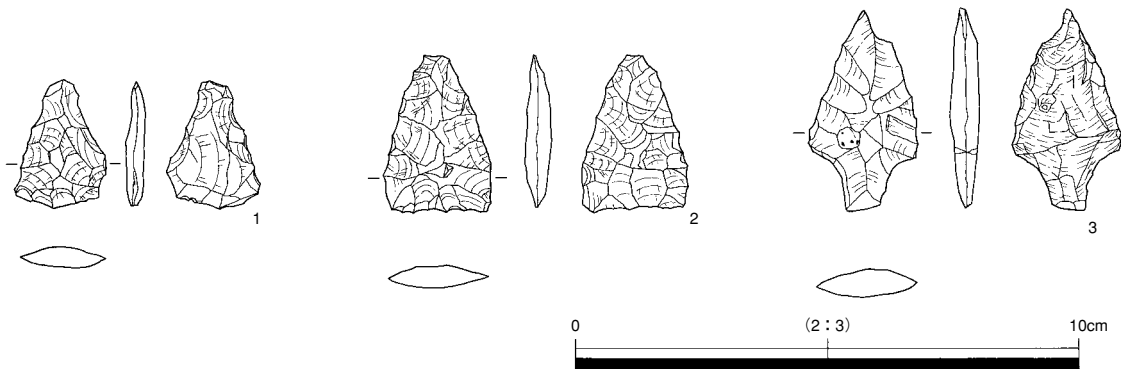


図38 石器実測図（1）

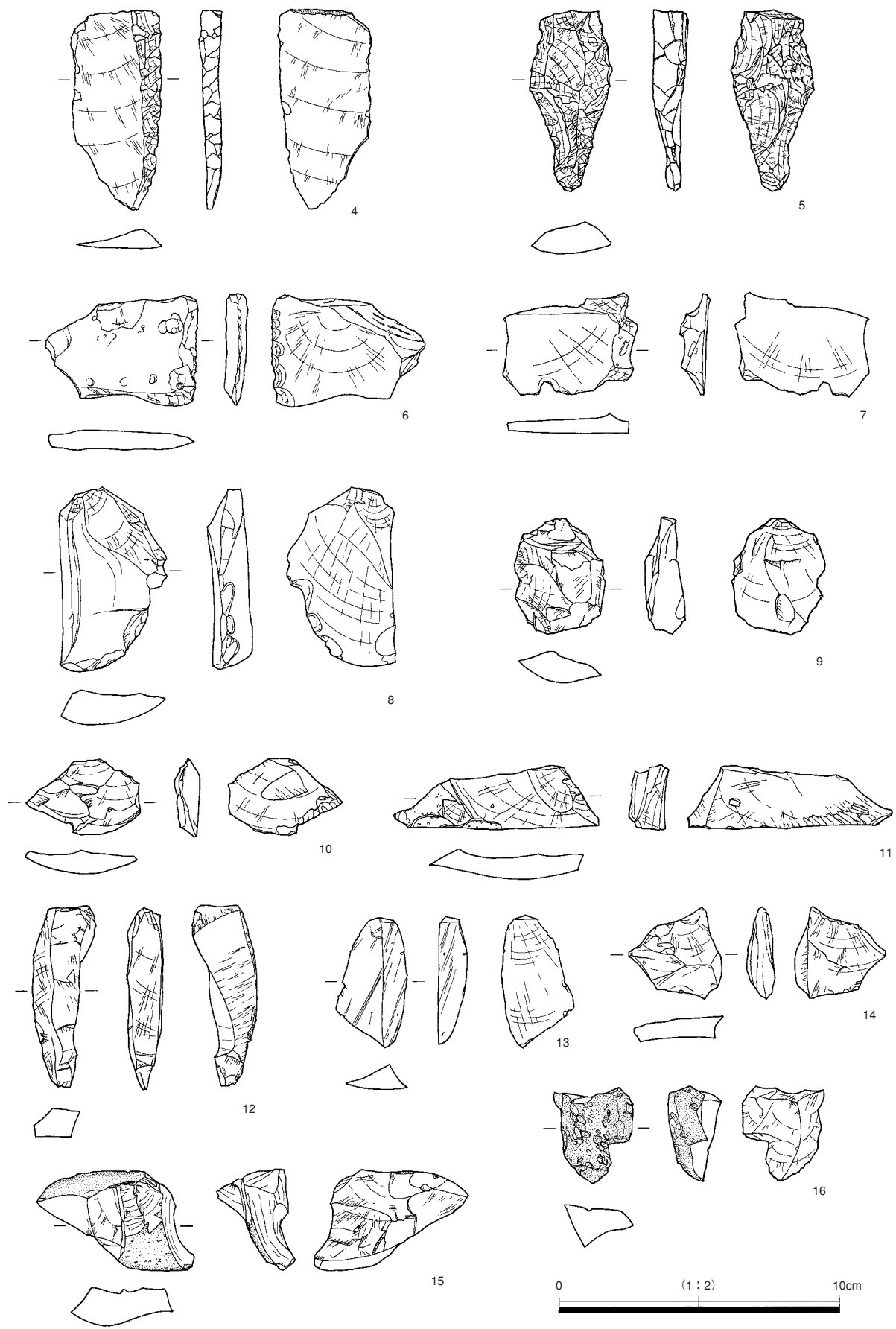


图39 石器实测图 (2)

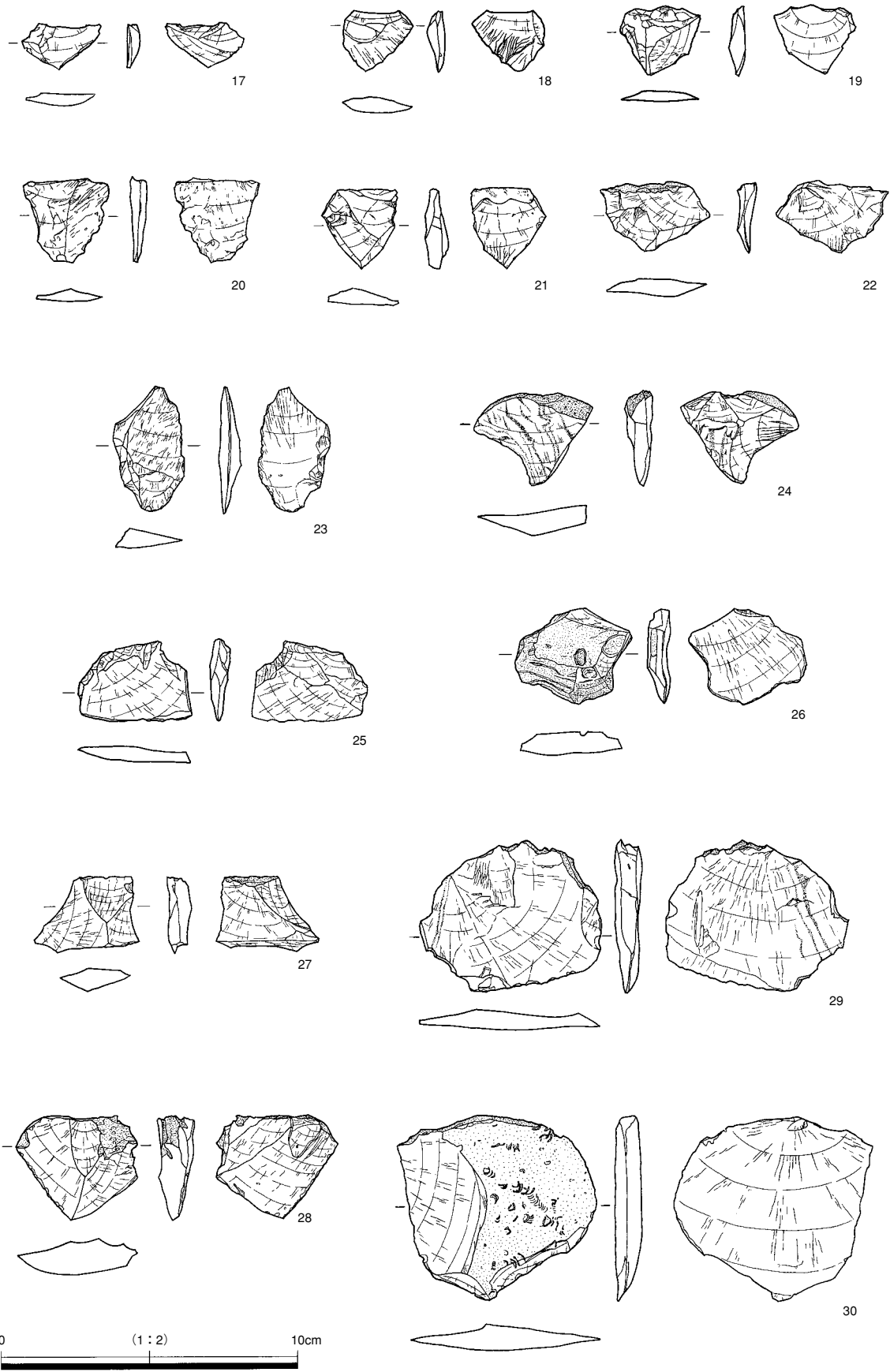


图40 石器实测图（3）

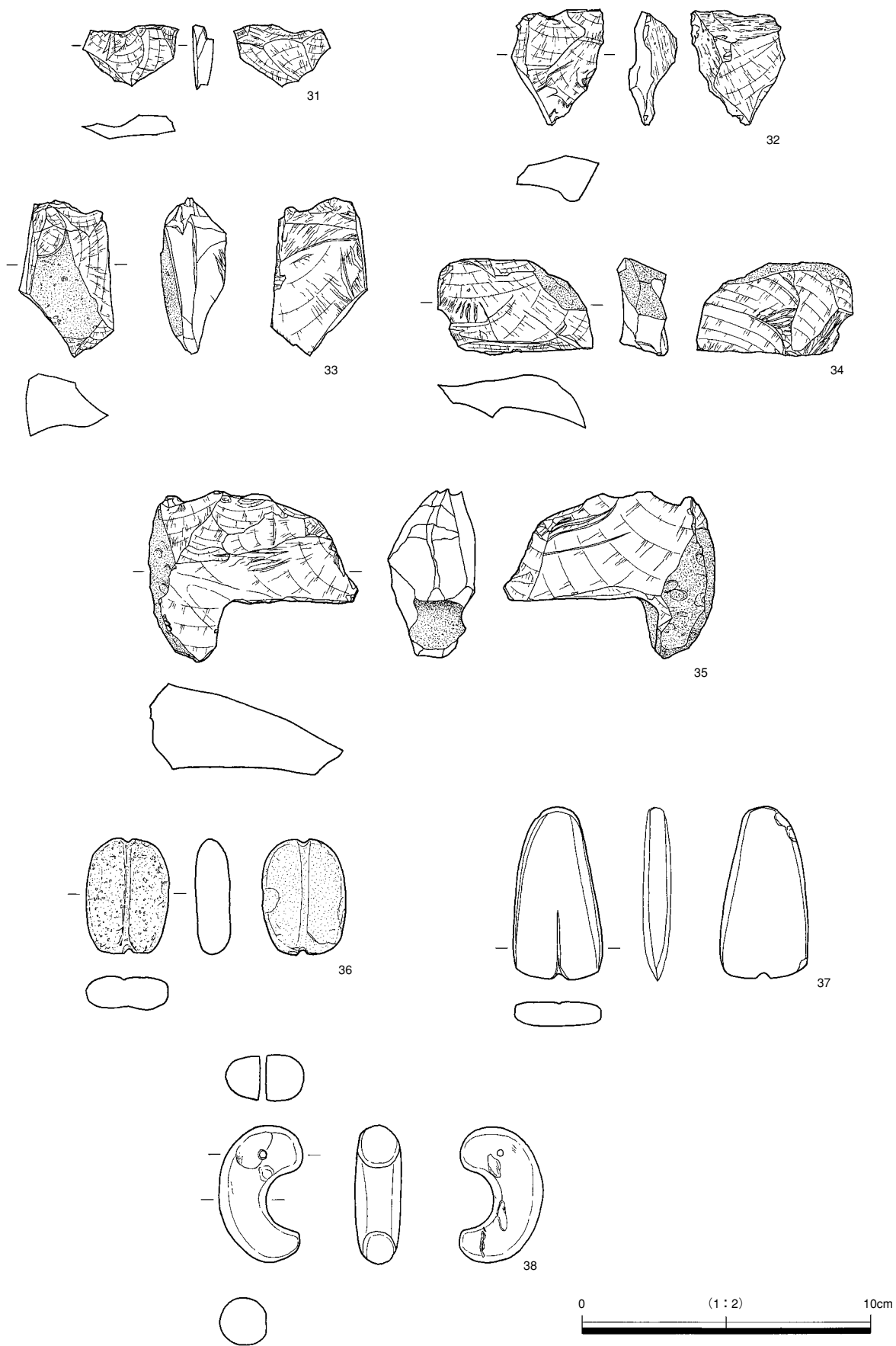


图41 石器实测图（4）

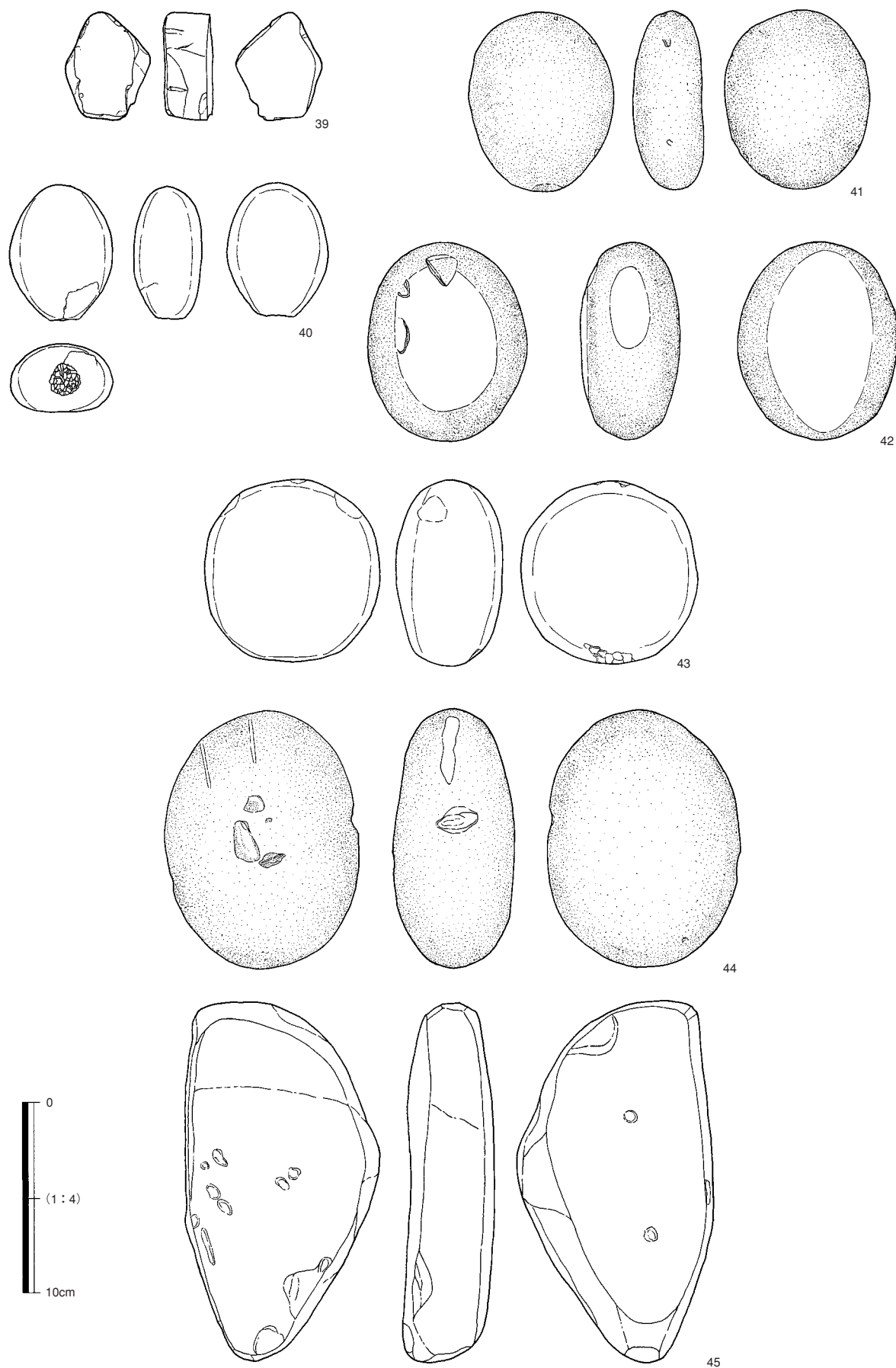


图42 石器实测图 (5)

4は、スクレイパーで縄文時代前期所産のものと考えられる。背面側縁部の一辺に、刃部調整を施している。打面には自然面が残る。

5は、石錐で縄文～弥生時代のものと考えられる。腹面には連続した調整痕、背面側縁部には部分的に微細な調整痕が認められる。背面には部分的に自然面が見られる。先端部については、さほど鋭利ではなく明確な加工痕も認められないため、使用時に欠損した可能性も考えられる。

6は、削器である。縄文時代所産のものと考えられる。腹面側より連続した調整を施し、刃部としている。背面には部分的に微細な調整が見られるが、腹面のような連続し整ったものではない。背面および腹面上部は自然面である。

7～9は、2次加工が施されている剥片である。7には腹面下端の一部、8には外湾する一辺の背腹両面より2次加工が施されているが、粗い加工でしっかりした刃部とはなっていない。9は下端部に非常に微細ではあるが、2次加工が見られる。

10・11は、横長剥片である。11は翼状剥片として剥離されたものと考えられ、下面部は自然面となっている。

12・13は、縦長剥片である。2点とも石器製作の素材として剥離されたものとみられるが、細部の加工はなされていない。

14～16は、楔形石器である。15は上端面が自然面である。

17～30は、2次加工等が施されていないサヌカイトの剥片である。そのうち25の1点のみは、今回出土した他のサヌカイト製の石器・剥片類の石材原産地が二上山地域と考えられるのに対し、石質のきめの粗さ等から、その産地が金山産の可能性が考えられるものである。

31～35は、石核である。32・34は上面、33は腹面、35は側面にそれぞれ自然面がある。

36は、石錘で縄文時代所産のものと考えられる。石材には緑色片岩を用いている。扁平で楕円形を呈する石材の長軸方向を一回りするよう、縄掛け用の溝を刻む。溝の深さは平面部で約0.5mm、側縁部では1.5mm程度である。表面の調整は粗く磨いた程度でザラザラしている。

37は、滑石を用いた小型の磨製石斧である。全面に丁寧な研磨がなされている。刃部中央に幅6mm、深さ2mm程の二等辺三角形の切込みを施している。さらに片面のみに、その切込みの三角形の頂点を延長するように刃部に対し垂直に浅い溝を約2cm程の長さで刻む。縄文時代以降のものではあるが、時代の特定は困難である。

38は、勾玉である。石材は蛇紋岩を用いている。両面より穿孔を施し、孔径は約3mmである。時代の特定は難しいが古墳時代所産のものであろう。

39は、チャート製の礫器である。一つの面のみザラザラとした手触りの平面をなしているが、他の面は自然面がそのまま残った状態の滑らかな手触りである。ただし、全体に明確な使用痕がみられないため、平面をなしている部分も人為的なものではない可能性も考えられる。

40・43・44は、叩石である。40は卵を扁平にしたような形状で、チャート製である。上下両端面に敲打痕が確認できる。43は花崗岩製で不明瞭ながら側面に敲打痕が確認できる。44には扁平形状の片面と両側面とに敲打痕が確認できる。

41・42は、磨石である。2点とも両面が磨耗により平滑である。42には側面の一部に敲打痕が確認できる。

45は台石である。両平面に敲打によるものとみられる窪みが確認できる。



番号	調査区	地区	遺構・出土地点	時期	器種	法量 (cm)			備考	第109集 写真番号
						最大長	最大幅	最大厚		
1	A-1	I-6. 16/F10 h6	遺構検出 (溝1・最上層)	縄文	石鏃	2.1	1.7	0.4		29
2	A-1	I-6. 16/F10 h6	溝15	縄文	石鏃	3.1	2.0	0.5		28
3	A-1	I-6. 16/F10 i7	溝27B 南壁	弥生	石鏃	4.0	2.0	0.4		30
4	A-1	I-6. 16/F10 i7	溝27B	縄文前期?	スクレイパー	7.1	3.2	0.7		26
5	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 第5層 (底)	縄文~弥生	石錐	6.5	2.9	1.2		27
6	A-2	I-6. 16/F10 h8	溝33	縄文	削器	4.0	5.5	0.7		34
7	A-1	I-6. 16/F10 g8	第4面 精査	縄文	剥片	3.2	4.7	0.8	二次加工あり	38
8	A-3	I-6. 16/F10 h9 I・III	イヌガヤ381 南西部 青灰シルト	縄文	剥片	6.5	4.0	1.2	二次加工あり	39
9	A-1・2	I-6. 16/F10 h7~8	溝27 堰2 杭列1	縄文	剥片	4.3	3.4	1.0	二次加工あり	40
10	A-2	I-6. 16/F10 g8	溝27 第1層	縄文	剥片	4.6	2.4	1.0		41
11	A-1	I-6. 16/F10 f6 II	第1層セクション下層 (-0.4m)	縄文	剥片	2.0	7.4	1.0		42
12	A-2	I-6. 16/F10 i7	溝28	縄文	剥片	6.4	2.0	1.3		43
13	B-1	I-6. 16/F10 e7 I	落込1	縄文	剥片	4.6	2.4	1.0		44
14	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭出し	縄文	楔形石器	3.2	3.4	0.8		35
15	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 第5層 (底)	縄文	楔形石器	3.9	4.9	1.7		36
16	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 第5層 (底)	縄文	楔形石器	3.1	2.8	1.7		37
17	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭出し	縄文	剥片	1.5	17.0	0.5		45
18	B-1	I-6. 16/F10 e7 I	落込1	縄文	剥片	2.7	2.5	0.6		46
19	A-2	I-6. 16/F10 h9 I	溝33 底部	縄文	剥片	2.3	2.8	0.4		47
20	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭列3 ベース最下層・砂礫	縄文	剥片	2.7	2.9	0.5		48
21	A-1	I-6. 16/F10 h7 I	溝27 第3層	縄文	剥片	2.7	2.5	0.6		49
22	B-1		溝1	縄文	剥片	2.3	3.9	0.6		50
23	A-1	I-6. 16/F10 ij6・7	溝27 セクション1	縄文	剥片	4.2	2.3	6.0		51
24	A-1	I-6. 16/F10 ij6・7	溝27 セクション北	縄文	剥片	3.1	4.1	0.9		52
25	A-1	I-6. 16/F10 i7	溝27B 北壁	縄文	剥片	2.7	3.8	0.5	金山産(?)	53
26	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭出し	縄文	剥片	4.2	3.2	0.6		54
27	A-3	I-6. 16/F10 h9 I・III	イヌガヤ381 南西部 青灰シルト	縄文	剥片	3.5	2.3	0.8		55
28	A-3	I-6. 16/F10 h9 I・III	イヌガヤ381 南西部 青灰シルト	縄文	剥片	4.4	3.5	1.2		56
29	A-1	I-6. 16/F10 ij6・7	溝27 セクション北3層	縄文	剥片	4.8	6.3	0.6		57
30	A-2	I-6. 16/F10 h8	溝33 底部	縄文	剥片	6.1	6.5	0.8		58
31	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭列1	縄文	石核	3.2	1.9	0.5		59
32	B-1	I-6. 16/F10 e7 I	落込1	縄文	石核	3.8	3.0	1.3		60
33	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭出し	縄文	石核	5.5	3.2	2.2		61
34	A-2	I-6. 16/F10 h7 I・III	溝27 第2層	縄文	石核	3.3	5.6	1.3		62
35	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 堰2 杭列3 ベース最下層・砂礫	縄文	石核	6.0	7.3	3.0		63
36	A-1	I-6. 16/F10 h7	溝27 堰2 下層	縄文	石錘	3.7	3.0	1.2		31
37	A-1	I-6. 16/F10 i7	溝27B セクション底部	縄文~(?)	石斧	6.0	3.0	0.9	滑石	32
38	A-2	I-6. 16/F10 g9	溝27 第1層	古墳(?)	勾玉	4.8	1.7	1.6	蛇紋岩	33
39	A-1	I-6. 16/F10 h7 IV	溝27 堰2 杭列1	縄文	礫器	5.8	4.2	2.4	チャート	64
40	A-1	I-6. 16/F10 j6	落込10 第3層	縄文	叩石	7.1	5.4	3.6	チャート	65
41	A-1	I-6. 16/F10 h7 III	溝27 堰2 杭出し (北側最下層粗砂)	縄文	磨石	9.4	7.6	3.6	砂岩	66
42	A-1	I-6. 16/F10 h7 III~IV	溝27 セクション北3層	縄文	磨石	10.4	8.2	5.1	砂岩	67
43	A-1	I-6. 16/F10 j6・7	溝27 セクション南	縄文	叩石	9.5	9.5	5.4	花崗岩	68
44	A-1	I-6. 16/F10 ij6・7	溝27 (トレンチ2)	縄文	叩石	13.5	10.1	6.4	砂岩	69
45	A-1	I-6. 16/F10 h7 IV	溝27 堰2 杭出し	縄文	台石	18.5	10.0	4.0	砂岩	70

表1 讃良郡条里遺跡 (その1) 出土石器一覧表

### 3. 奈良時代から平安時代の祭祀遺物（図43～50、図版29～30）

讚良郡条里遺跡（その1）出土の奈良時代中期から平安時代初頭にかけての祭祀遺物である人面墨書土器・人形・斎串については調査報告書に於て石膏復元したものから小破片に至るまで写真図版に限定したものも含め殆ど全てを掲載しているが、本項では猶且つ遺漏したものやその後接合したもの、また未掲載であった実測図や観察記録などについて補足する。

本項で報告する遺物の点数は人面墨書土器113点（個体復元8点、口径復元19点、破片86点）、人形1点、斎串4点で計118点となるが、人面墨書土器については調査報告書と重複したものを含んでいる。出土総点数については後に詳細を述べる。遺物番号は1～385が調査報告書と対応した番号で、386～405（20点）が本項で補足追加した遺物の番号である。

人面墨書土器（図43～49、図版29～30-186～190・194・195・199・200・202～205・208～219・222～224・226～243・245～276・278～282・284～290・292～296・298～300・386～400）

本項では今回出土した人面墨書土器が土師器中型甕もしくは長胴甕や把手付甕を使用しており、これら土師器甕類の製作技法や調整方法についてはほぼ共通することから器種器形に関わる記述は基本的に省略し、人面墨書などの観察記録を中心に報告する。また人面墨書土器176～185については既に報告書に於て実測図を含む観察記録を掲載しているため、本項ではそれ以降の重複分186～300と追加補足分の386～400について報告する。

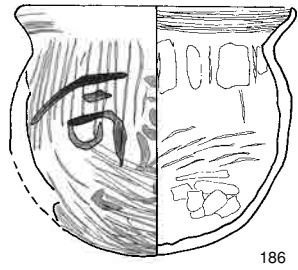
186～190・202・204・205・208・253・255～258・260～263・386・387は、土師器中型甕で体部外面などに人面が墨書された土器であり、底部に穿孔されたものも認められる。

186は、口径14.7cm、器高14.1cmを測る。残存率は約55%である。体部外面には人面の墨書が1箇所認められる。人面は頭部を表す円弧状の輪郭線と、短い直線状の眉、楕円形の目、直線状の鼻、楕円形の口などが描かれており、目には瞳を表現する。A区溝28下層（第2層）から出土している。

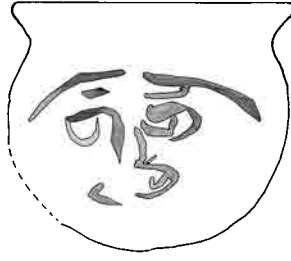
187は、口径16cm、器高残10.3cmを測る。破片の為に部分的であるが、体部外面上半には人面の墨書が2箇所に認められる。一方の人面は円弧状の顔の輪郭線、やや小さく描かれた直線的な鼻、目、瞳などで構成されている。もう一方の人面は円弧状の顔の輪郭線のみが残存する。A区溝29下層（第2層）から出土している。

188は、口径14.0cm、器高残12.1cmを測る。残存率は約70%で、底部中央には直径2.0cm前後の穿孔が認められる。口縁部内面の周縁に沿ってS字状の墨書、口縁部外面の周縁に沿って連続するV字状の墨書、体部外面の3箇所に人面の墨書が認められる。内1箇所の人面には顔部分を区切る様に頬の輪郭線、目尻の下がった眉と目、直線的な鼻筋などが認められ、目には縦方向の短い直線で瞳が表現されている。鼻の下には口と口髭が描かれている可能性がある。次の人面には同じく頬の輪郭線、目尻の下がった眉と目、口と口髭などが認められる。中央部分が欠損するので鼻については明らかでない。3箇所目の人面には頬の輪郭線、やや伏し目がちな眉と目などが認められ、目には瞳が表現される。中央部分が欠損する為に明らかでないが、小鼻を表現する様なやや曲線的な鼻筋が描かれている。A区溝27下層（第3層）から出土している。

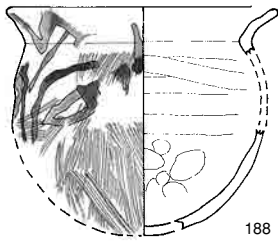
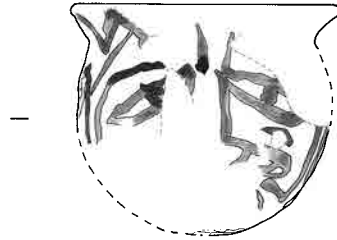
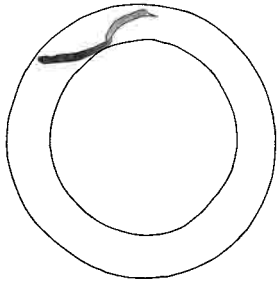
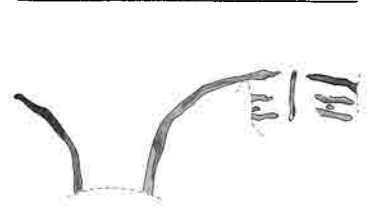
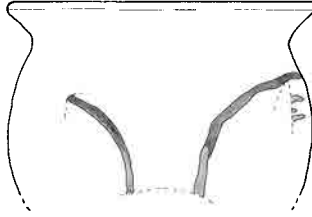
189は、口径16.0cm、器高残13.1cmを測る。残存率は約75%で、底部から体部下半にかけて1箇所にやや大きな穿孔が認められる。体部外面には人面の墨書が1箇所にのみ認められる。人面は187に類似しており、円弧状の顔の輪郭線や直線的な鼻、目、瞳などで構成されている。口部分が残存しないが、下



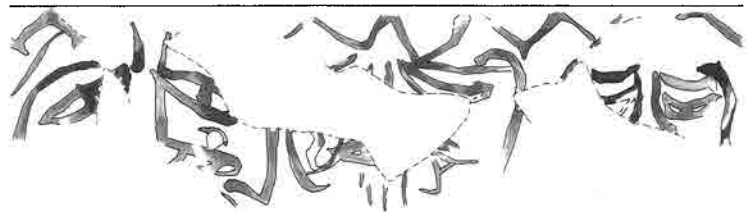
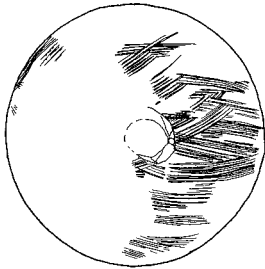
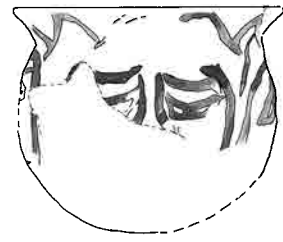
186



187



188



0 (1:4) 20cm

图43 人面墨书土器实测图(1)

方には髭らしき墨書が認められる。A区溝27上層（第1層）から出土している。

190は、口径16.0cm、器高残9.9cmを測る。破片の為に部分的であるが、体部外面上半には人面の墨書が1箇所認められる。人面は顔の輪郭線などが省略されており、眉、目、鼻、口などで構成されている。目尻の下がった描き方が特徴的である。A区溝27最下層（第4層）から出土している。

202は、口径18.8cm、器高残5.4cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面の周縁に沿って直線と円弧を組み合わせた様な墨書、体部外面上半には人面の輪郭線とみられる円弧状の墨書が1箇所認められる。A区溝27下層（第3層）から出土している。

204は、口径16.1cm、器高残3.5cmを測る。破片の為に一部であるが、口縁部外面から体部外面上端にかけてはやや間隔を開けて並列した6条ほどの直線状の墨書が1箇所認められる。A区溝27最下層（第4層）から出土している。

205は、口径17.2cm、器高残2.4cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面の周縁に沿って連続するU字状の墨書、口縁部外面に短い横方向の墨書が認められる。A区溝27堰2から出土している。

208は、口径19.6cm、器高残3.4cmを測る。破片の為に一部であるが、口縁部内面の周縁に沿って並列する縦方向の直線あるいはV字状とみられる墨書が認められる。A区溝27中層（第2層）から出土している。

253は、口径16.4cm、器高残8.4cmを測る。破片の為に部分的であるが、体部外面上半の2箇所に人面の輪郭線とみられる曲線状の墨書が認められる。A区溝27下層（第3層）から出土している。

255は、口径15.6cm、器高残9.2cmを測る。破片の為に部分的であるが、体部外面上半などに横方向や縦方向の直線的な墨書が認められる。A区溝27上層（第1層）から出土している。

256は、口径17.6cm、器高残8.4cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面に短い直線状の墨書、口縁部外面から体部外面上半にかけては長い横方向の直線2条と短い縦方向の直線2条を交叉させた墨書が1箇所認められる。A区溝27中層（第2層）から出土している。

257は、口径15.4cm、器高残1.7cmを測る。破片の為に一部であるが、口縁部内面には斜め方向の直線を組み合わせた墨書、口縁部外面には横方向と縦方向の直線を組み合わせた様な墨書が各々1箇所に認められる。A区溝27堰2（堰4S）から出土している。

258は、口径16.2cm、器高残4.7cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面には周縁に沿う円弧状の曲線とこれに交叉する様に直線を組み合わせた墨書、体部外面上半には間隔を開けた縦方向の円弧状の曲線と斜め方向の直線の墨書が認められる。A区溝27下層（第3層）から出土している。

260は、口径17.9cm、器高残3.3cmを測る。破片の為に一部であるが、口縁部内面には不整形な墨書、口縁部外面から体部外面上半にかけては横方向の墨書などが認められる。A区溝27下層（第3層）から出土している。

261は、口径15.5cm、器高残3.0cmを測る。破片の為に一部であるが、口縁部内面には細く短い縦方向の墨書2条が認められる。A区溝27下層（第3層）から出土している。

262は、口径18.2cm、器高残5.9cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部外面から体部外面上半にかけては短い直線状の墨書1条、体部外面上半には人面の輪郭線とみられる曲線状の墨書1条が認められる。A区溝29の北半部から出土している。

263は、口径18.2cm、器高残8.9cmを測る。破片の為に部分的であるが、体部外面上半には縦方向の墨書などが1～2箇所に認められる。A区溝27最下層（第4層）から出土している。

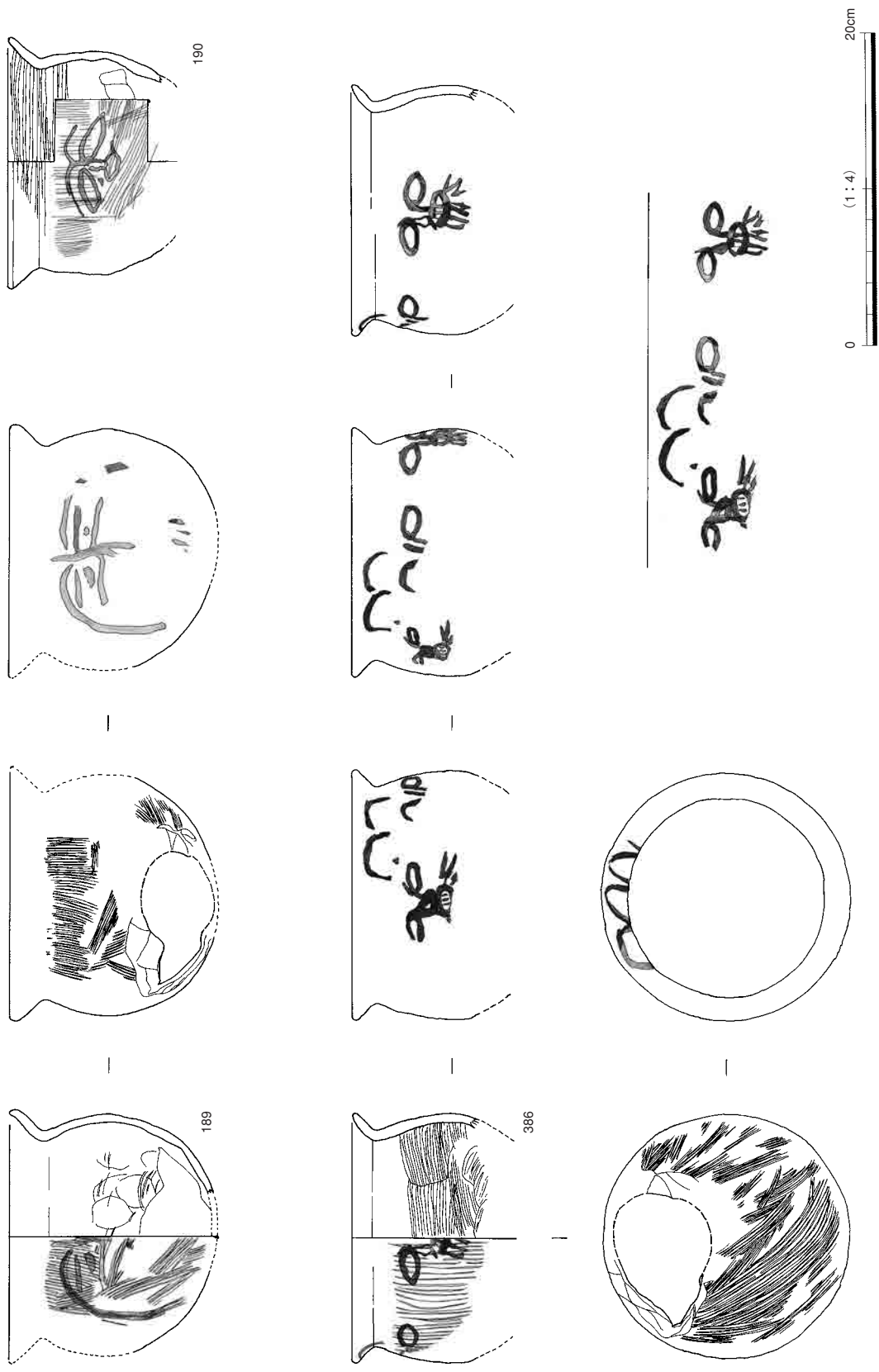


图44 人面墨书土器实测图(2)

386は、口径15.8cm、器高残8.2cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面の周縁に沿って並列するU字状の墨書、口縁部外面から体部外面上端にかけて円弧状の墨書2条、体部外面の3箇所の人面の墨書が認められる。人面は顔の輪郭線などが省略されており、目、鼻、口、口髭あるいは顎髭などで構成されている。出土箇所はA区溝27上層（第1層）と西側に分流するA区溝28下層（第3層）や最下層（第4層）などに分散している。他に接合面が未確認であるが、A区溝28下層（第3層）から出土した197は人面の特徴や器面の調整痕などが共通すること、出土層位や座標位置が一致することなどから同一個体の破片とみられる。

387は、口径16.0cm、器高残5.4cmを測る。破片の為に部分的であるが、口縁部内面の周縁に沿って並列するV字状の墨書、体部外面上半には二重の円弧状の墨書が1箇所に認められる。387は既報告の207・269が接合したものである。A区溝27中層（第2層）から出土している。

388は、今回の出土例中では数少ない部類に属するやや大振りの土師器中型甕である。

388は、口径20.8cm、器高17.3cmを測る。残存率は約90%である。底部には焼成後の穿孔かと思われる痕跡が1箇所に認められる。墨書は体部外面の5箇所に人面が認められ、体部外面中央から下半にかけて1箇所に連続する不整曲線で記号状のものが描かれている。5箇所の人面は顔の輪郭線などは省略されているが、それぞれに眉、目、鼻、口、髭が写実的に描かれている。しかし内1箇所の人面のみが目の描き方や筆遣いが微妙に異なる事、図柄の配置に間隔の余裕が無く不自然である事などから、内1箇所の人面は4箇所の人面が描かれた後に加筆された可能性が高い。388は既報告の192・193・221・244・277およびその他が接合したものである。192・193は報告書に於て土師器長胴甕と既述したが、接合によりやや大振りの中型甕であることが分かった。A区溝27下層（第3層）や堰2杭列3などに分散して出土している。

200・203・389～392は、土師器長胴甕で体部外面などの人面墨書が認められる。

200は、口径29.2cm、器高残6.7cmを測る。口径の大きさから長胴甕と考えられる。破片の為に部分的であるが、体部外面上半には長い横方向の直線1条と縦方向の直線多数を組み合わせた様な墨書が認められる。同様の墨書が既報告の201にも描かれている。200はA区溝27下層（第3層）、201はA区溝27堰2からの出土であるが、位置と層位はほぼ一致している。

203は、口径28.4cm、器高残6.8cmを測る。口径の大きさから長胴甕と考えられる。破片の為に部分的であるが、口縁部外面の1箇所に縦方向の短い直線6～7条が並列した墨書、その下方の体部外面上端には人面頭部の輪郭線とみられる墨書が認められる。A区溝28下層（第2層）から出土している。

389は、口径21.2cm、器高残4.5cmを測る。破片の為に一部であるが、体部外面上半には横方向の太い曲線状の墨書1条が認められる。A区溝27最下層（第4層）から出土している。

390は、口径27.1cm、器高残8.2cmを測る。口径の大きさから長胴甕と考えられる。破片の為に部分的であるが、体部外面上半には短く横方向に撥ねた様な墨書4～5条が1箇所に認められる。A区溝27中層（第2層）から出土している。

391は、口径28.6cm、器高残10.6cmを測る。口径の大きさから長胴甕と考えられる。破片の為に部分的であるが、口縁部内面の周縁に沿う波状の墨書、体部外面上半の1箇所に曲線と円と点で構成された墨書などが認められる。体部外面上半の墨書は人面の輪郭と目を描いた様にもみられるが、目の配置が不自然である。391は既報告の196・206・225が接合したものである。出土箇所はA区溝27上層（第1層）と下層（第3層）や堰2杭列3など、平面位置だけに限らず上層位から下層位にかけて分散している。

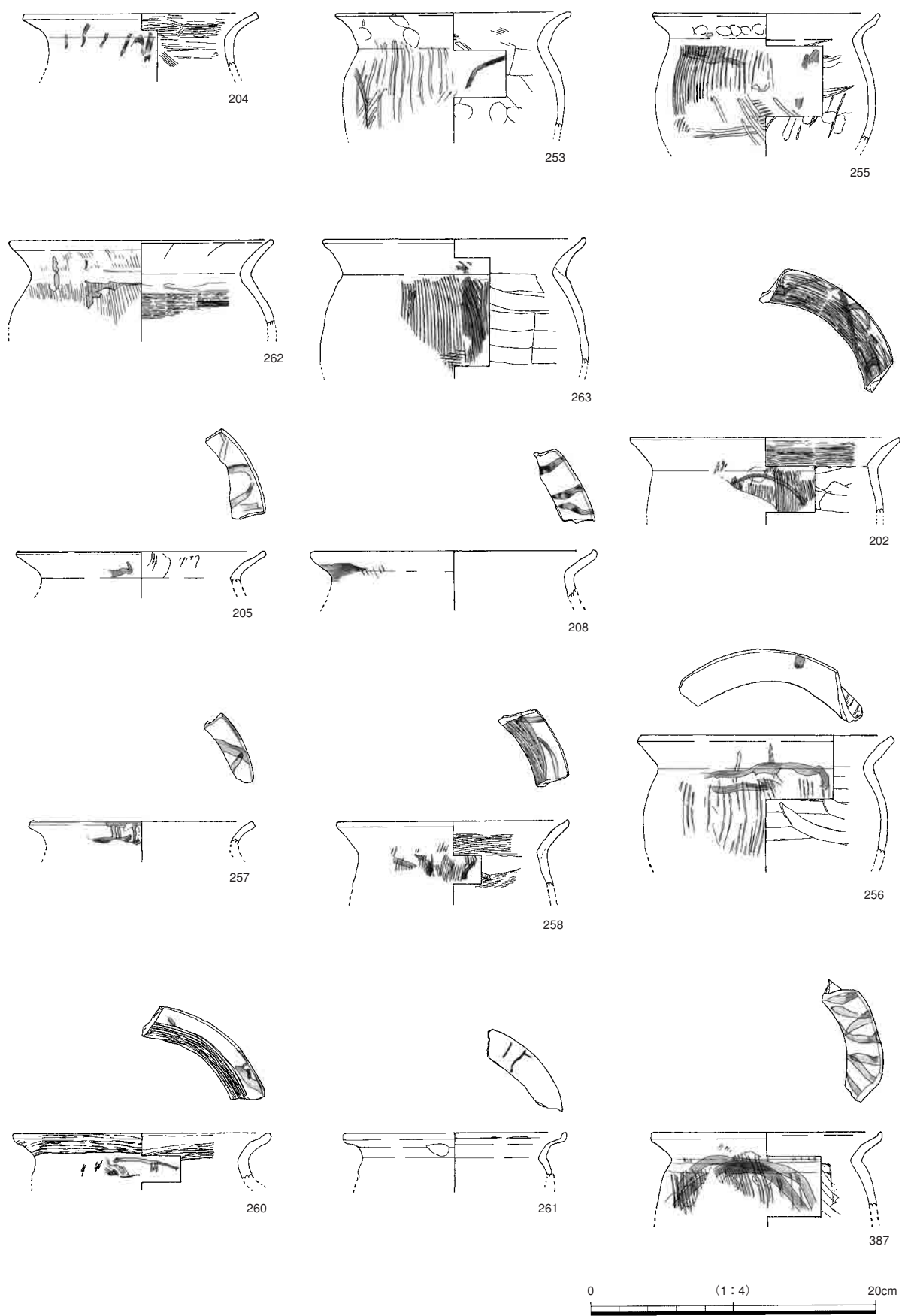
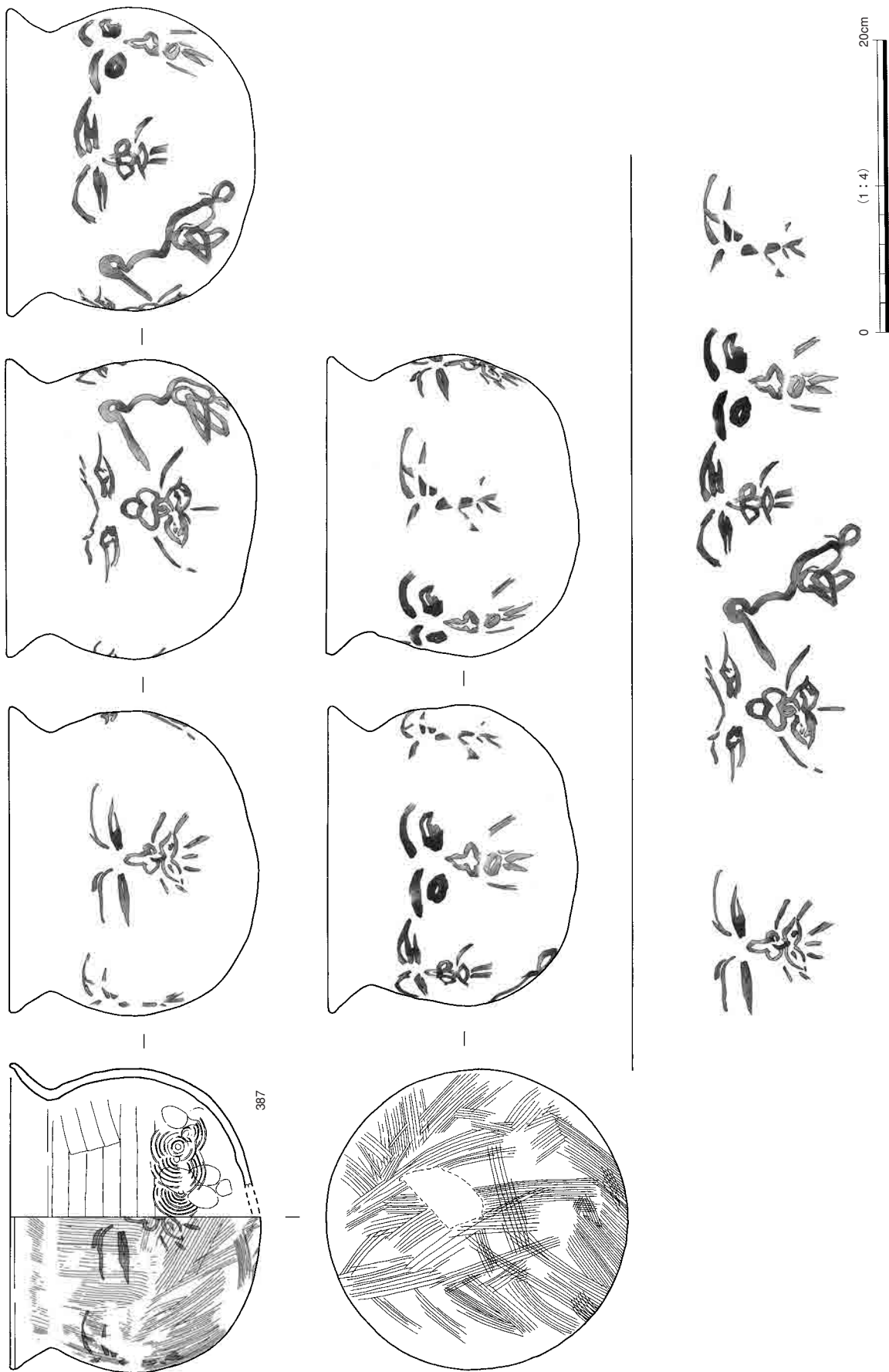


图45 人面墨書土器実測図（3）



387

图46 人面墨書土器実測図(4)



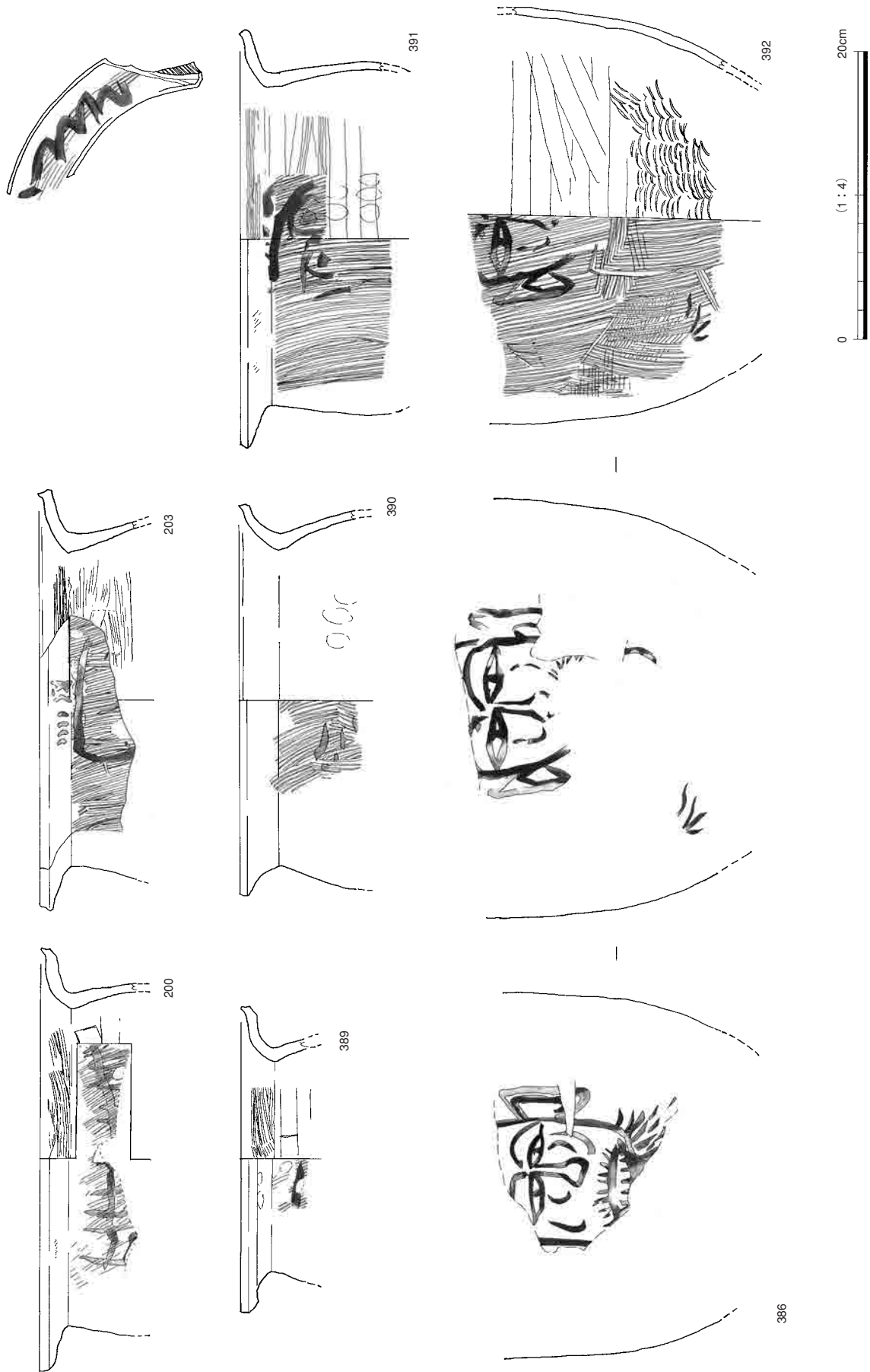


图47 人面墨書土器実測図(5)

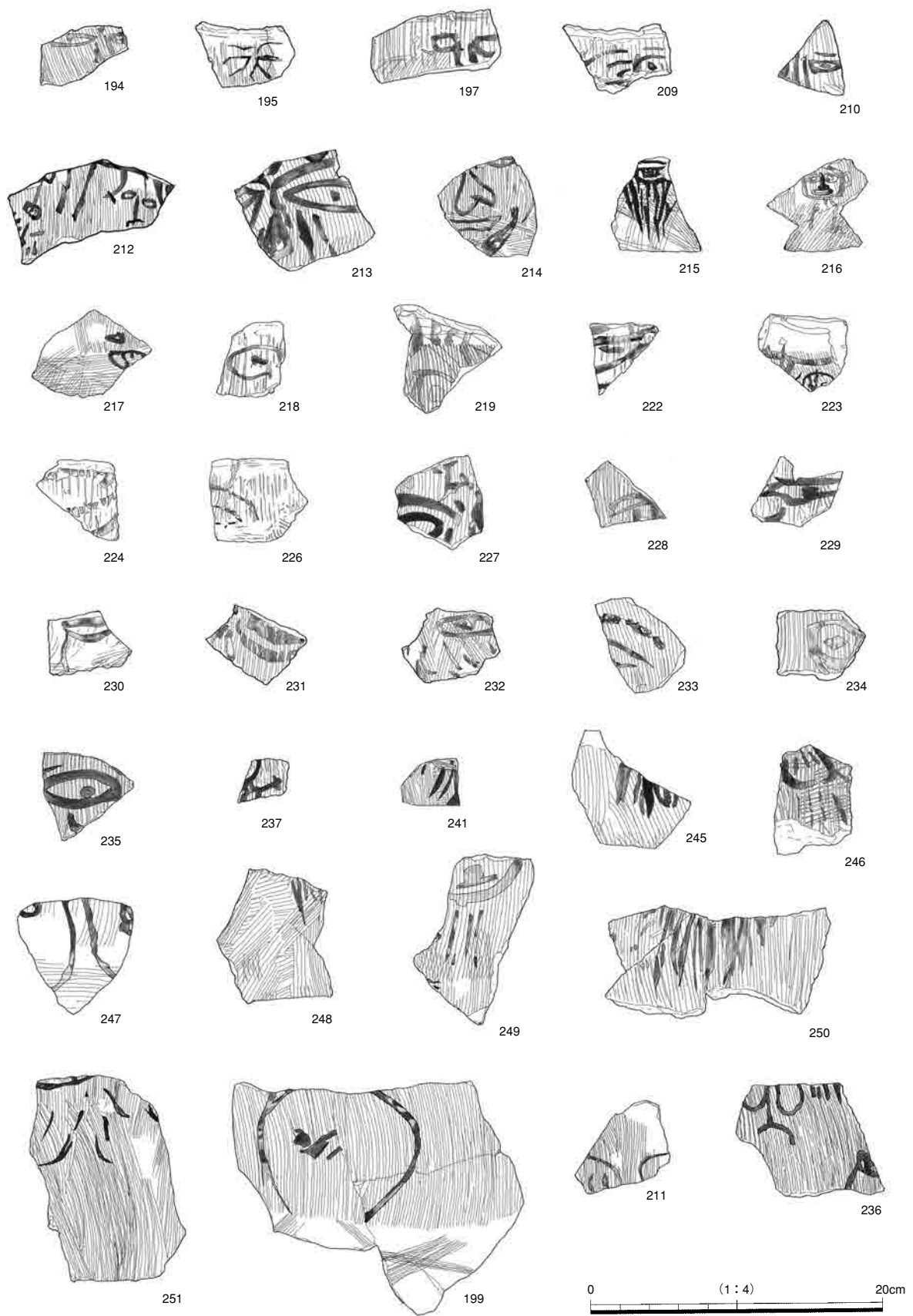


图48 人面墨书土器实测图(6)

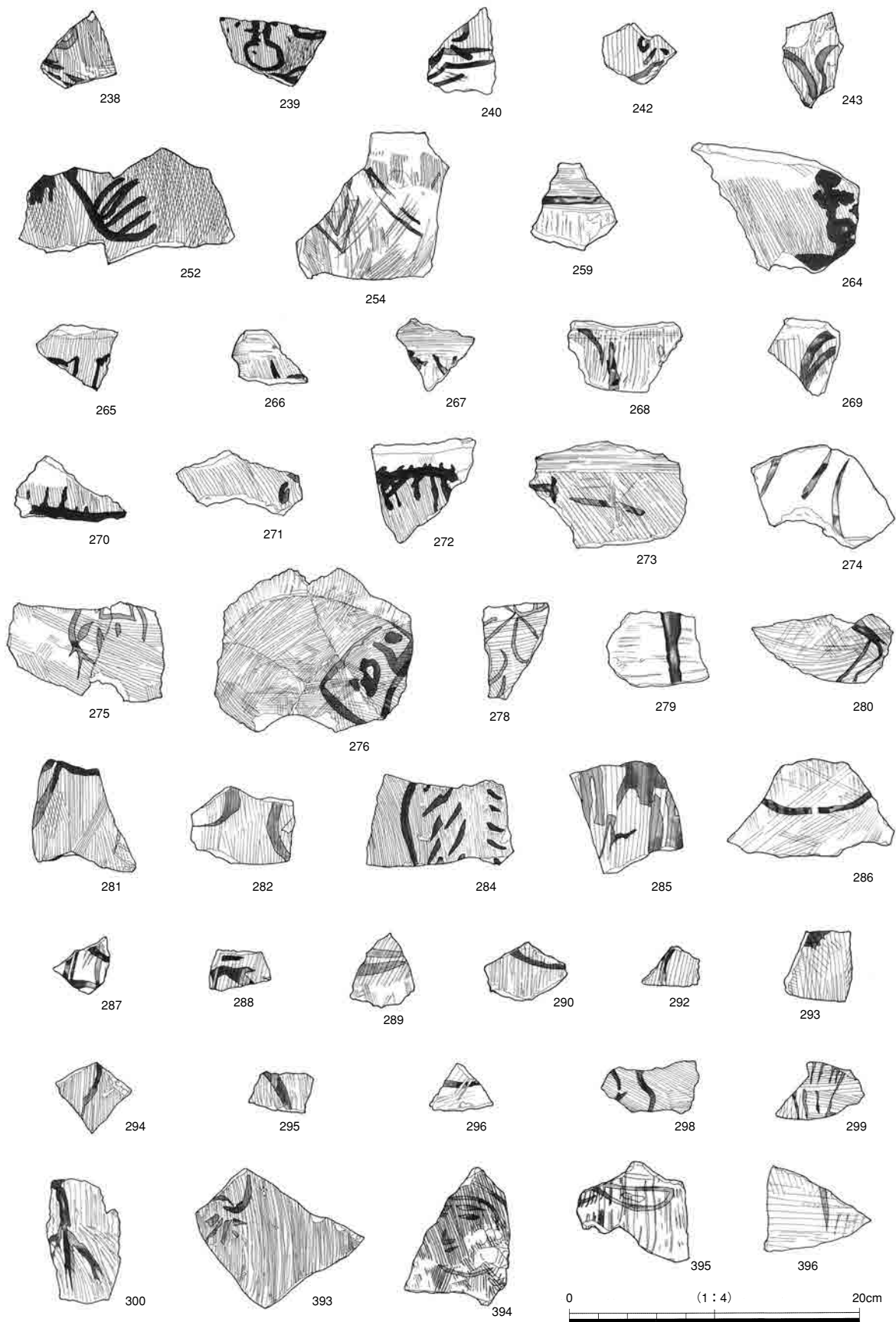


图49 人面墨书土器实测图(7)

392は、土師器長胴甕の体部のみが残存する。残存径最大29.2cm、残存高15.8cmを測る。人面墨書は体部外面の2箇所認められる。人面の墨書部分は一方が頭部、他方が頭部と口部以下を欠損する。人面は面長の顔に、大きな耳と眉と目、口、口髭と顎髭で構成されている。大きな耳は二重の墨線で表現されており、両頬には三日月状の曲線1～2条が描かれる。この三日月状の曲線やその他の顔の特徴は既報告の183の人面と同様であり、今回の出土例中2例を数える。392は既報告の191・283が接合したものである。A区溝27中層（第2層）から下層（第3層）や堰2杭列1、杭列3などに分散して出土している。その他の人面墨書が認められる口縁部から体部にかけての破片を図48・49、図版30に掲載した。既報告の破片は人面の一部とみられるもの（194～251）、幾何学的な文様を描くもの（199～300）に区別した。本編で補足した393～400については、393には髭と考えられる墨書、394・395には人面の墨書、396・398には直線状の墨書、397・400には曲線状の墨書などが認められ、いずれもA区溝27から出土している。これらの他に本編では報告を省いたが、人面様の墨書が認められる小破片62点が出土している。

#### 人形（図50、図版31－401）

401は、既報告の323と同様、大型の人形である。長さ残24.2cm、幅残4.8cm、厚さ0.7cmを測る。頭部の片側から胴部にかけて残存しており、腕や脚部は破損している。頭部はやや丁寧な周縁の加工が施されて円形に仕上げられており、頸部には深いV字状の切り込みがみられる。墨書などは認められない。頸部の切り込み位置や深さなどから推測すると幅6.3～8.5cmであったとみられ、長さ56.4cm、幅5.5cmの323よりも一回り大きな人形の可能性がある。A区溝27上層（第1層）から出土している。

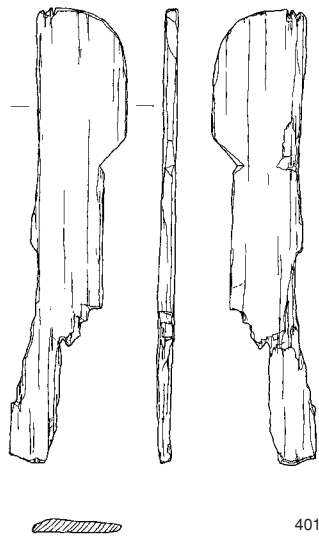
#### 斎串（図50、図版31－402～405）

402は、長さ残13.6cm、幅残1.7cm、厚さ0.3cmを測る。上端部から片側面にかけて残存している。材は木目に直交してやや丸く反っており、両面の加工はやや粗い。上端部は片側下方が破損しているが両端を切り落として圭頭状に加工している。圭頭部直下の側面には斜方向の短い切り込み1条が1箇所に認められる。A区溝27上層（第1層）から出土している。

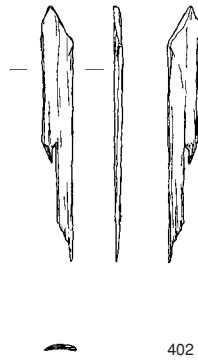
403は、長さ残13.4cm、幅残1.0cm、厚さ0.2cmを測る。上端部から片側面にかけて残存している。材の片面は丁寧な加工が施されているが、もう一方の面はやや粗く加工されている。上端部が鋭利な刃物により斜方向に切り落とされていることや0.2cmという板材の厚みなどから判断して、上端部を加工した斎串の一部が遺存したものとみられる。残存する片側面に切り込みは認められない。A区溝28中層（第2層）から出土している。

404は、長さ残41.2cm、幅残2.2cm、厚さ0.4cmを測る。上端部以下が残存しており、下端部は破損している。材は全体に丸味を帯びて反っており、両面共に粗い加工で側面の加工痕も不明瞭であることから、何らかの端切れ材などが転用されたものとみられる。上端部は両端を鋭利な刃物で切り落として圭頭状に加工している。A区溝27下層（第3層）から出土している。

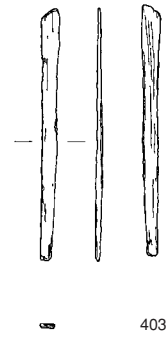
405は、長さ残45.1cm、幅残1.6cm、厚さ0.7cmを測る。上端部以下が残存しており、下端部は破損している。404と同様、材は両面共に仕上げを意識しない粗い加工で側面の加工痕も不明瞭であることから、破材類の転用とみられる。上端部は両端を鋭利な刃物で切り落として圭頭状に加工している。A区溝27下層（第3層）から出土している。



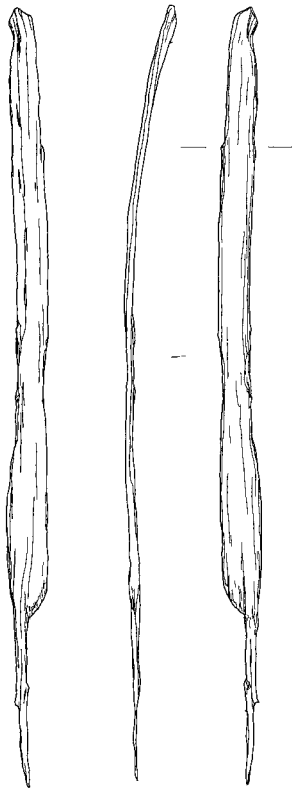
401



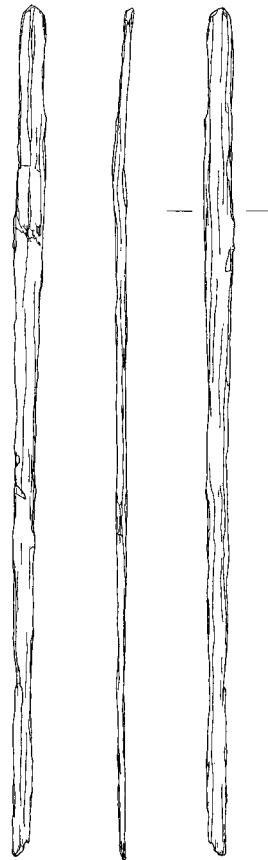
402



403



404



405

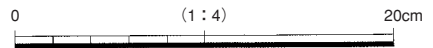


图50 人形・斎串実測図

#### 4. おわりに

##### (1) 縄文時代以降の石器類

石器については、この調査ではこれらの石器群と共に縄文時代前期を中心に早期から中期の土器も出土した。勾玉等、縄文時代以降のものと考えられるものも一部含まれているため、明確な時期を断定するのは困難ではあるが、剥片等の多くは縄文時代所産のものと考えてよいであろう。

##### (2) 奈良時代から平安時代の祭祀遺物

人面墨書土器については、報告書刊行後の実測作業によって口径復元し得た土器など重複したものを含め113点（個体復元8点、口径復元19点、破片86点）を補足して報告したが、これらの他に報告を省いた破片62点が認められる。出土点数は、調査報告書（第109集35・41・42頁、図22～26、図版31～45－176～300）掲載分を併せて、残存率50%以上で石膏復元の可能なものが、土師器中型甕12点（176～178・180・181・186～190・386・388）、同長胴甕4点（183～185・392）、同把手付甕1点（182）など計17点を数える。また口縁部の破片で口径復元まで可能なものが、土師器中型甕15点（179・202・204・205・208・253・255～258・260～263・387）、同長胴甕5点（200・203・389・390・391）など計20点となる。この他に体部から底部にかけての未接合破片など153点が認められ、総数は190点を数える。

人面墨書土器の土師器中型甕にみられる底部穿孔については、石膏復元可能な12点中の6点（176～178・180・181・388）に認められる。このことから共伴出土した土師器中型甕の底部穿孔土器8点（168～175）については、人面などが墨書される直前の状態であると判断され、祭祀行為に伴い穿孔された関連遺物とみられる。尚、人面墨書土器に施される底部穿孔の事例は加美遺跡・長原遺跡（共に大阪府大阪市平野区）・久宝寺遺跡（大阪府八尾市）出土の人面墨書土器にも同様に認められる<sup>註2)</sup>。

人面墨書の表現内容は、人面だけを描くものと曲線や幾何学的な文様を描くもの、また両者を組み合わせたものなど3種類に分けられる。長胴甕4点ではこの3種類が認められるが、中型甕では12点中のすべてが人面だけを描いている。人面は1～5箇所描かれており、顔の輪郭、頭髮、耳、眉、目、瞳、鼻、口、口髭、顎髭などで構成されている。

鼻の表現は正面像で小鼻を左右対称に描く場合や、簡略化して鼻筋を直線2条で描く場合が多いが、394の様やや斜め向きの表現としてL字状に描く例も認められる。このL字状の鼻の表現は時代が降るが斎宮跡（三重県明和町）出土の土師器皿（11世紀）に描かれた人面墨書、普賢寺遺跡（大阪府門真市）出土の土師器皿（13世紀）に描かれた人面墨書などにも認められる<sup>註3)</sup>。

188・205・386・387などにみられる口縁部内外面の連続するV字状あるいはU字状の墨書は、長原遺跡出土人面墨書土器の口縁部内外面に描かれた鋸歯文状の墨書に類似している。これらの墨書についてその具体的な表現内容は今のところ明らかではない。

他には216・237などの様に小さな人面墨書であるが、顔に加えて首、胴、腕、手まで表現しているものが認められる。また顔の輪郭線については、都城出土の人面墨書土器ではほぼ省略されているが、本遺跡の出土例では石膏復元可能なもの17点中の10点に認められることなどが特徴的であると考えられ、地方官衙および城柵などの関連遺跡から出土する人面墨書土器にもほぼ同様の傾向がみられる。

また調査報告書でも少し触れたが、長胴甕2点（既報告183・392）の人面に表現された両頬の三日月状の印については、その類似例が秋田城跡出土の人面墨書土器2例に認められるが、現在までに出土例はこの4例に限られる。讃良郡条里遺跡と秋田城跡との何らかの関連性、例えば人的交流などが行われていたことを示唆するものとも考えられるが、僅か4例の数少ない資料で断定は難しい<sup>註4)</sup>。

墨書技術は、177・182・388などの様に手慣れた巧みな筆遣いのもの、180・181などの様に2種類の図案化した顔の類型を交互に描くものなどが認められ、共伴出土した絵馬315・316の描写能力なども勘案すると作画の専門技術を習得した職人的な画師の存在などが推察される<sup>註5)</sup>。

人形については、1点(401)を補足追加して報告した。出土点数は調査報告書(第109集43・46頁、図28、図版50・51-317~327)掲載の11点を含めて計12点を数える。これらの内、顔などを墨書した人形は4点(317・318・324・325)、墨書痕跡を残す人形は2点(322・327)を数える。

斎串については、4点(402~405)を補足追加して報告した。出土点数は調査報告書(第109集46頁、図28、図版51-328・329)掲載の2点を含めて計6点を数える。404・405は薄板を加工したものではなく、破材類を転用したとみられる斎串であり、これを用いて執り行われた祭祀の等級や格式またその性格および内容を考察するうえで興味深い資料である。

讚良郡条里遺跡(その1)出土の奈良時代中期から平安時代初頭の祭祀遺物の総数について整理しておく、人面墨書土器190点(个体復元17点、口径復元20点、破片153点)、絵馬2点、人形12点、斎串6点など合計210点を数える。また共伴出土した底部穿孔土器8点(168~175)や獣骨3点(356・383・384)などを含めると祭祀関連遺物の総数については220点以上になる。

尚、古代祭祀遺物の出土遺跡については、現在までに絵馬が全国約21遺跡、人面墨書土器が全国約40遺跡を数える。また人面墨書土器については都城およびその周辺域を除くと二桁以上の出土点数をもつ遺跡は数少なく、前述した加美遺跡、長原遺跡と釜ヶ谷遺跡(京都府相楽郡木津町)、および本遺跡の4遺跡に限られる<sup>註6)</sup>。

## 謝辞

本編の作成にあたっては、下記の本センター職員から数々の教示と協力を頂き、また多くの非常勤職員から協力を得た。末尾ながら記して感謝の意を表する次第である(順不同)。

木下保明・黒須亜希子(以上、職員)、岡本智子(専門調査員)、泊清治郎・内海慎・辻浜代・吉住紗也香・高村真菜・相座茉莉子・村岡浩泰・大良賢一・横尾千恵子(以上、非常勤職員)

## 註

註1 石器類については、(財)大阪府文化財センター調査報告書第109集第V章まとめにおいて、近刊予定の『大阪文化財研究』(財)大阪府文化財センター)に三浦基行「讚良郡条里遺跡(その1)出土石器」として掲載する旨を述べたが、これを本編に変更する。

註2 大阪市文化財協会 2003 『加美遺跡発掘調査報告Ⅱ』  
大阪市文化財協会 2004 『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅶ』

永野 仁 2004 「久宝寺遺跡出土墨書土器について」『大阪府埋蔵文化財研究会』第48回資料 財団法人大阪府文化財センター

註3 斎宮歴史博物館 1990 『古代の祈り-祓いの顔-』

註4 秋田市教育委員会 1983 『秋田城跡(第39次発掘調査報告)』

註5 2種類の人面を交互に描く事例は成法寺遺跡(大阪府八尾市)出土の人面墨書土器にも認められる。

財団法人八尾市文化財調査研究会 1994 「成法寺遺跡 第12次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』

註6 有井広幸 1996 「釜ヶ谷遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報』第73冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

長戸満男 2003 「讃良郡条里遺跡で出土した絵馬」『歴史シンポジウム資料「絵馬が語る古代の高宮」-第二京阪道路関連の発掘調査成果から-』寝屋川市教育委員会

長戸満男 2004 「讃良郡条里遺跡の古代祭祀-絵馬・人面墨書土器・人形について-」『大阪府埋蔵文化財研究会』第48回資料 財団法人大阪府文化財センター



図51 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000) 国土地理院 1 : 50,000地形図『大阪東北部』より作成





図52 調査地周辺地形図

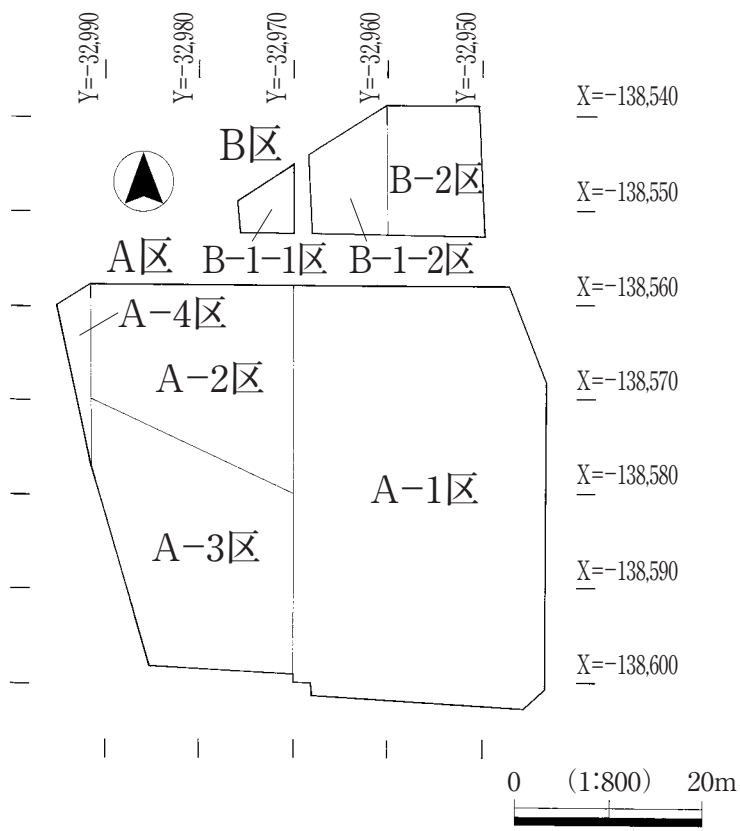
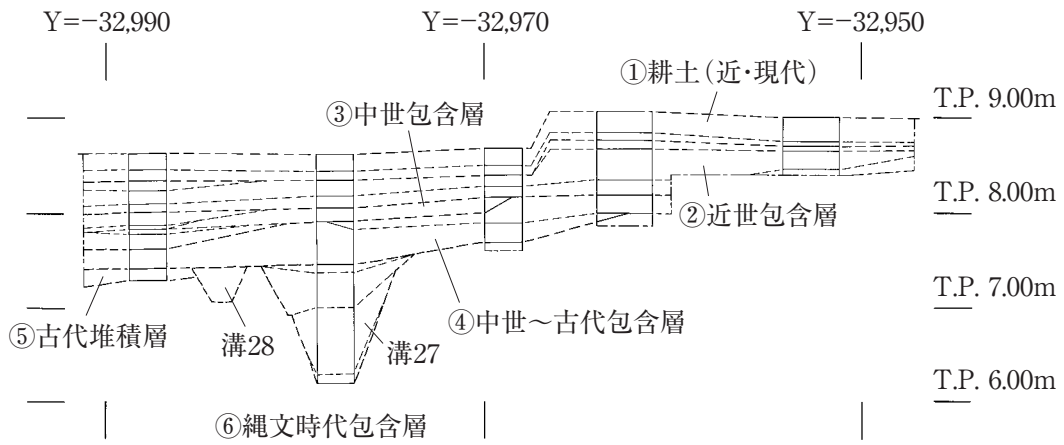


図53 調査区配置図



(水平1:400 垂直1:80) A区北壁断面より作成

図54 基本層位図

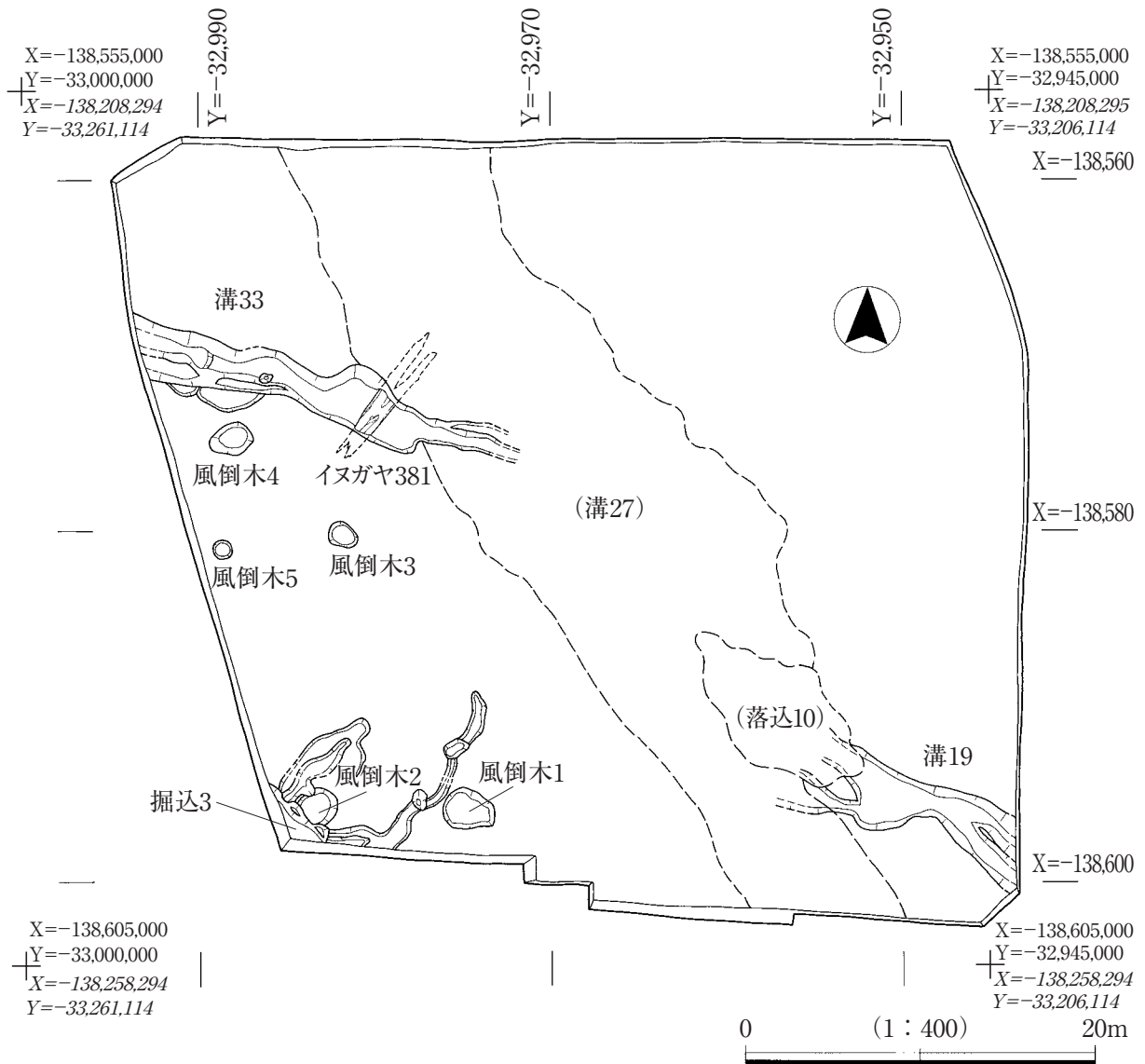


図55 A区 第5遺構面全体図

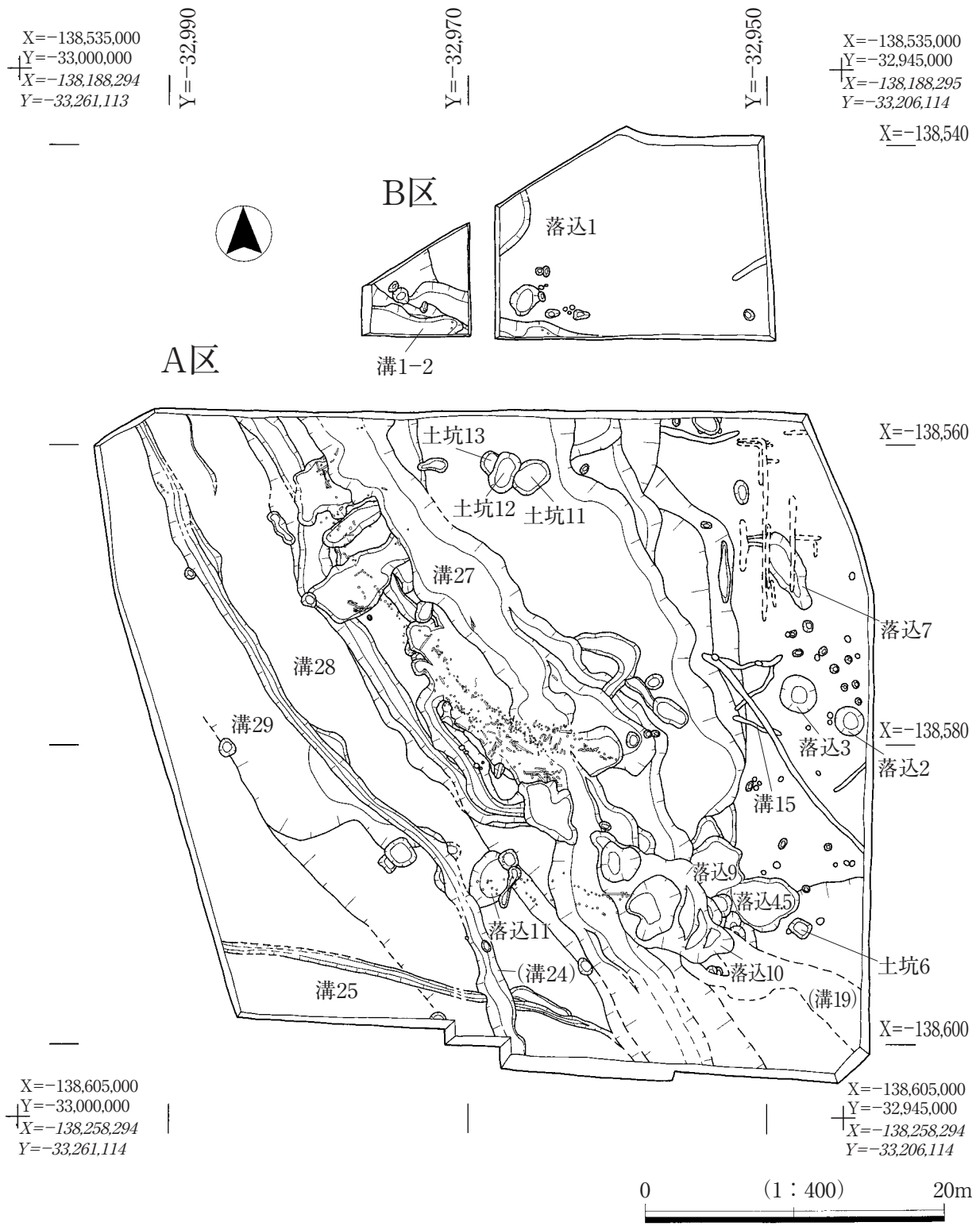


图56 A·B区 第4遺構面全体图

# 報告書抄録

ふりがな	しょうじいせき 3							
書名	小路遺跡Ⅲ							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター 調査報告書							
シリーズ番号	第142集							
編著者名	泉本知秀・平田 泰・大楽康宏・長戸満男・三浦基行・六辻彩香・宮野淳一							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階 TEL072(299)8791							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじいせき 小路遺跡	ねやがわし たかみや・しょうじ 寝屋川市高宮・小路	27215	28	34° 45' 00"	135° 38' 24"	2004年7月15日～ 2005年4月5日	596㎡	道路
さらぐんじょうりいせき 讃良郡条里遺跡	ねやがわし たかみや 寝屋川市高宮	27215	36	34° 45' 12"	135° 38' 13"	2002年3月25日～ 2002年12月20日	2,218㎡	道路
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
小路遺跡	集落跡	古墳時代 奈良時代		前方後方形周溝墓 自然河川(祭祀)		土師器・須恵器・人面墨書土器・木製品(曲物、杭) ・馬歯		
讃良郡条里遺跡	その他の遺跡	縄文時代 奈良時代		自然河川(祭祀)		石器 人面墨書土器・木製品 (人形、斎串)		
要 約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小路遺跡の調査では、04-1-2と04-1-3区で前方後方形周溝墓のコーナーを確認し、主軸をおよそ40度東にふる周溝墓の全形を明らかにすることができた。しかし、該期の遺物は壺形土器のみであった。04-2-1区では、奈良時代の河川から人面墨書土器が出土した。</li> <li>・ 讃良郡条里遺跡(その1)の石器は、主に自然流路から出土している。総数は45点で、大半が縄文時代の剥片である。製品では縄文時代のスクレーパー・石鏃・石錘・石斧・叩石・磨石、縄文または弥生時代の石錘、弥生時代の石鏃、古墳時代の勾玉がある。人面墨書土器は、報告書刊行後の整理作業によって新たに接合したものを含め、113点を補足報告した。その結果、今回の発掘調査での墨書土器は総数190点となった。中型甕が人面を描いているのに対し、長胴甕は人面のみのほか、曲線や幾何学文様を描くもの、両者を組み合わせたものなどがある。人形は1点を追加報告し、総数12点。斎串は新たに4点を報告して、総数6点となった。</li> </ul>							

# 版 圖





1 04-1-1 全景 (西から)



2 同上 (北から)



1 04-1-2 調査区から東方を望む（南西から）



2 04-1-2 全景（南西から）





1 04-1-2 東半遺構検出状況（北西から）



2 04-1-2 遺物出土状況（南から）



1 04-1-2 周溝堆積状況 (南から)



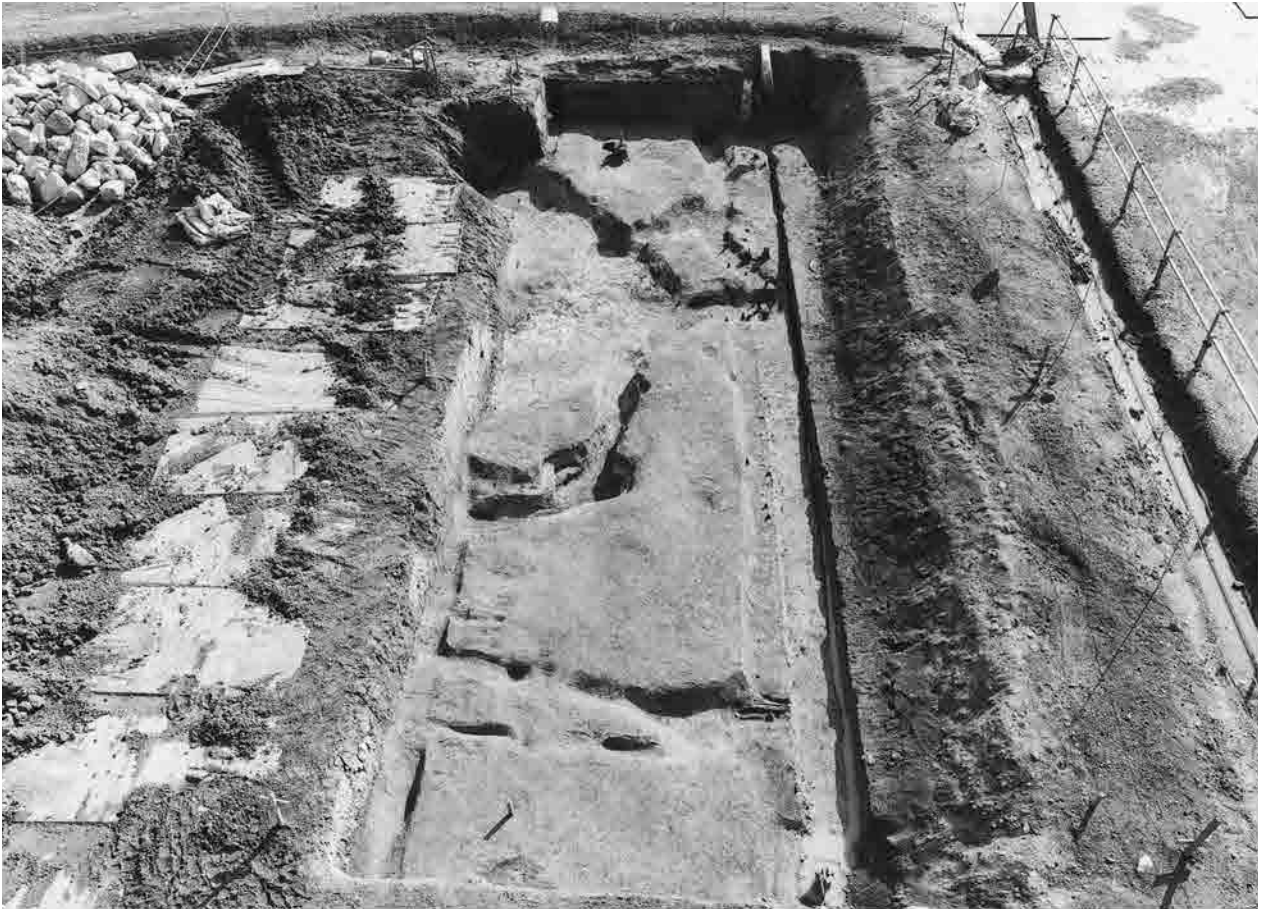
2 同上 (南東から)



1 04-1-2 土嚢による周溝肩部の保護（東から）



2 同上（南西から）



1 04-1-3 全景（北から）



2 同上（北西から）



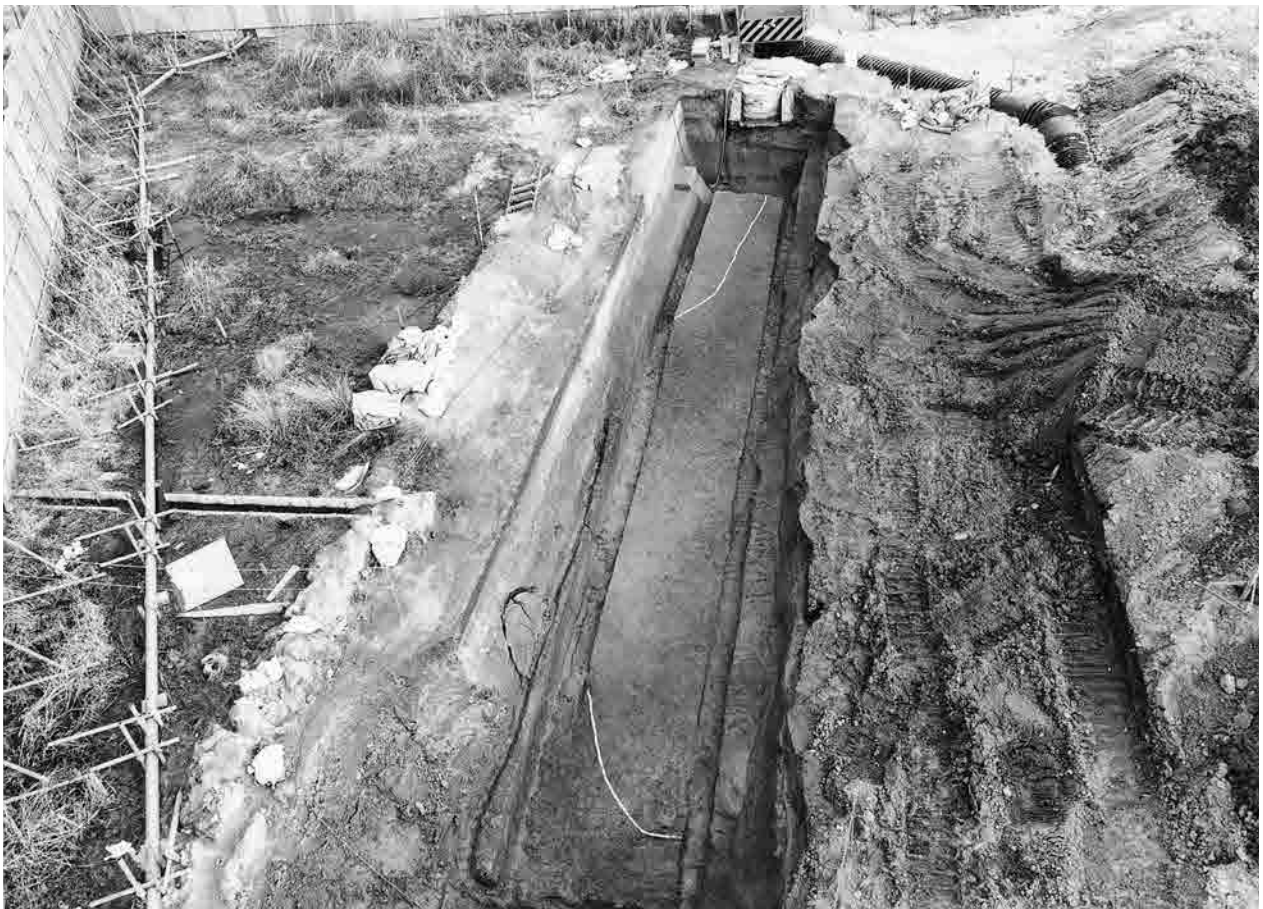
1 04-1-3 周溝堆積状況 (西から)



2 04-1-3 土嚢による周溝肩部の保護 (西から)



1 04-1-4 (東半) 上層全景 (西から)



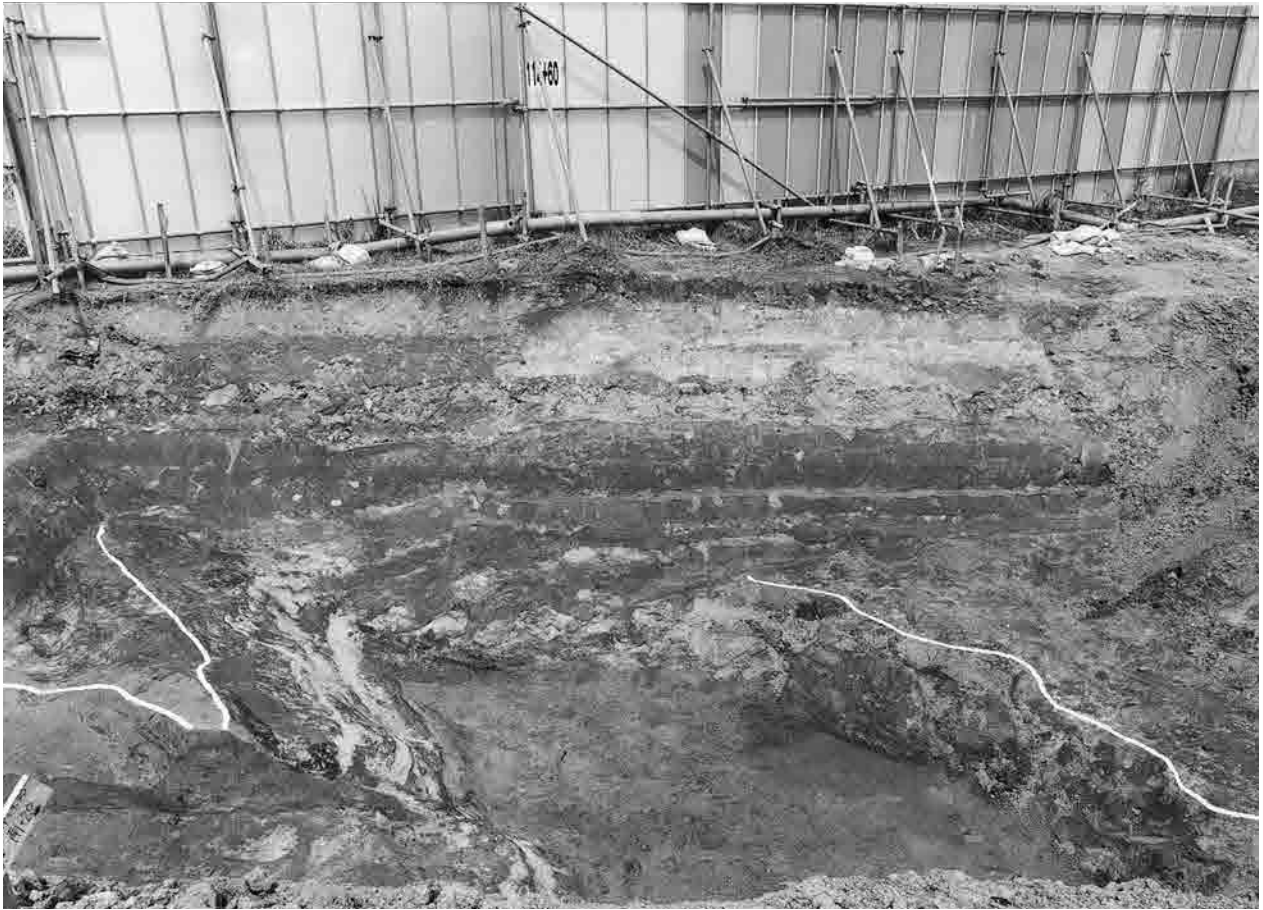
2 04-1-4 (東半) 下層全景 (西から)



1 04-1-4 (東半) 最下層遺構検出状況 (南東から)



2 同上 (北東から)



1 04-1-4 (西半) 全景 (南から)



2 同上 (西から)





1 04-2-1 1、2、3溝全景（北から）



2 同上（北から）



1 04-2-1 1、2溝遺物出土状況（西から）



2 同上（北から）



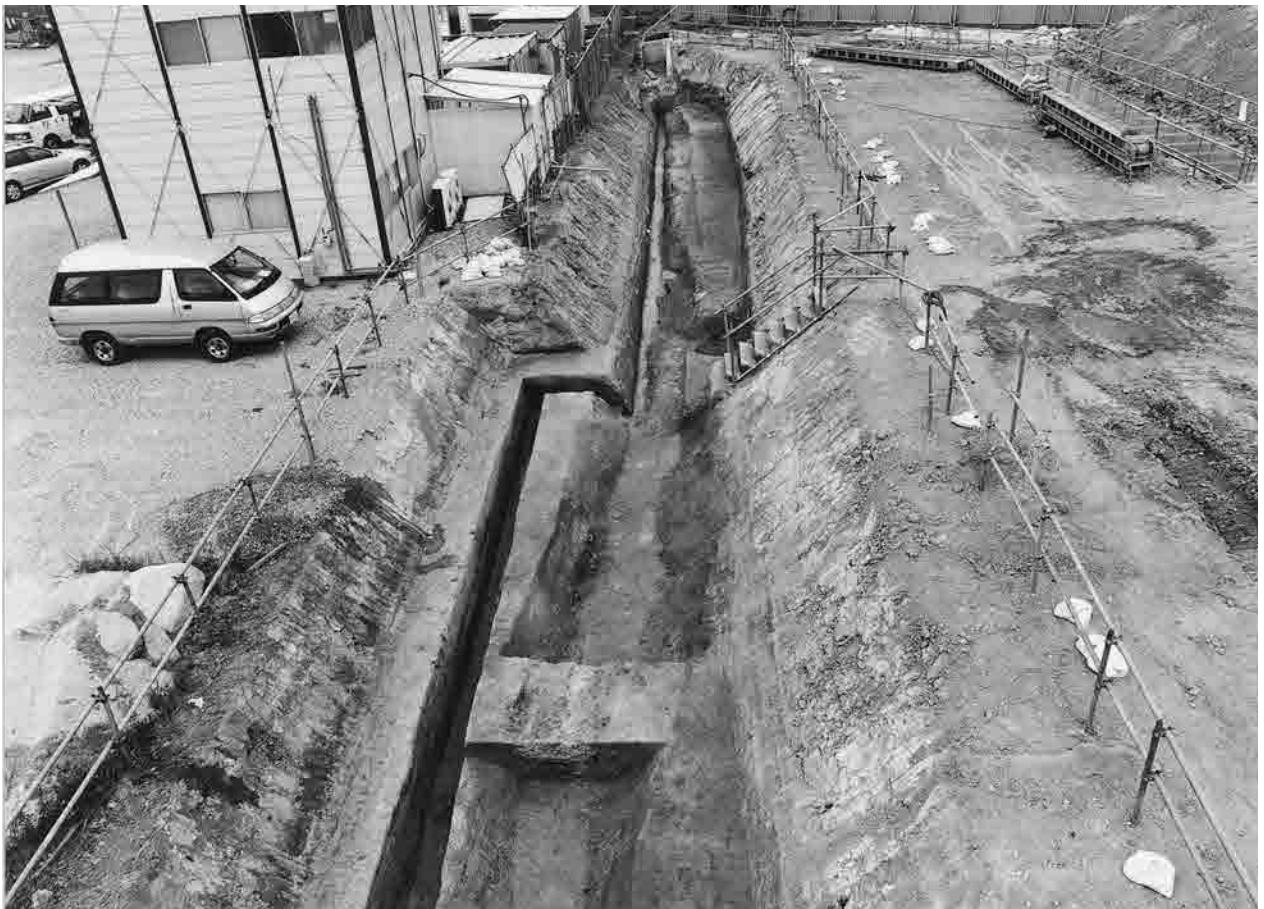
1 04-2-1 3溝全景（北から）



2 04-2-1 3溝遺物出土状況



1 04-2-2 調査区から高宮廃寺を望む（南から）



2 04-2-2 1溝全景（南から）



1 04-2-2 1溝全景（北から）



2 04-2-2 4井戸（西から）



1 04-2-2 1 溝肩部 地蔵 (東から)



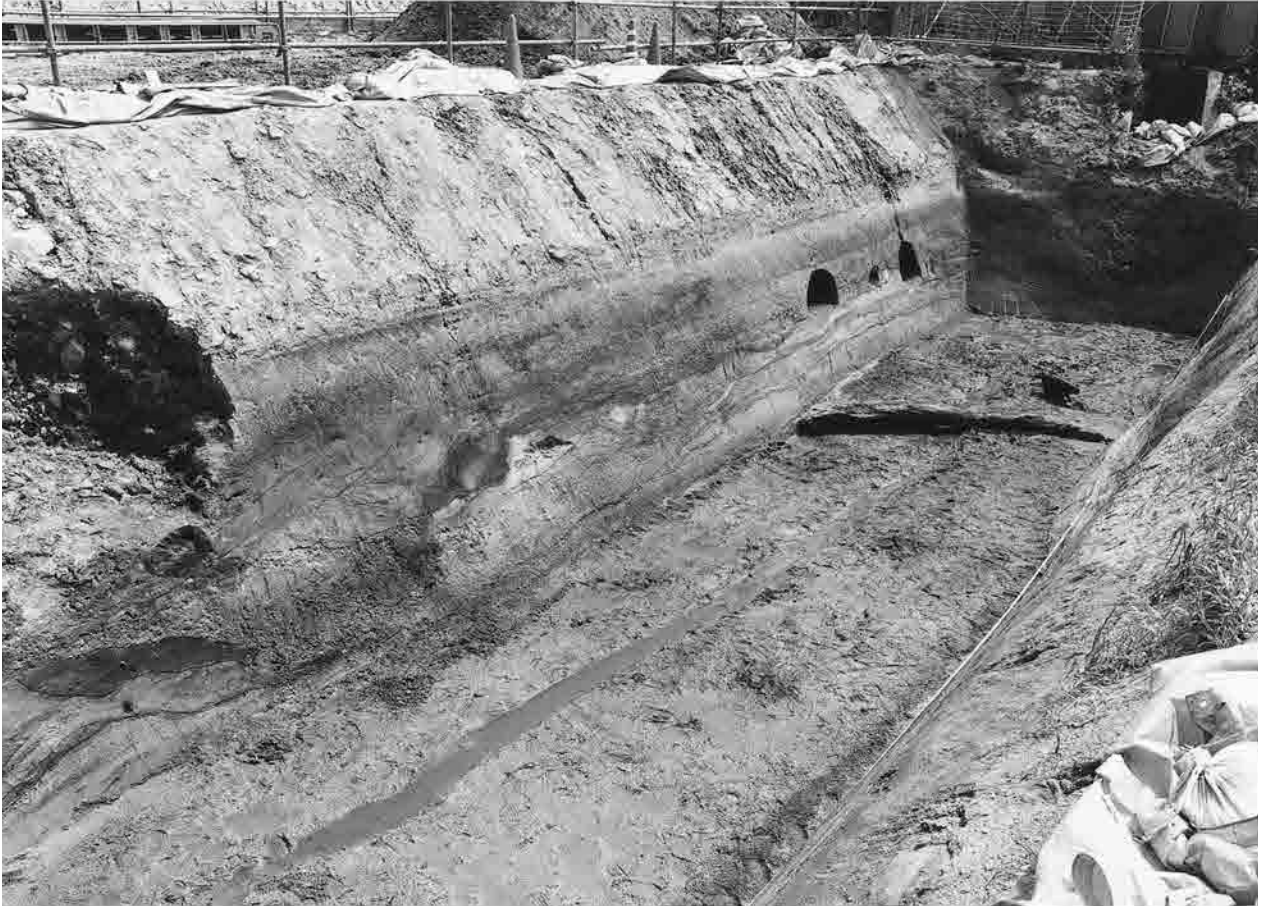
2 04-2-2 1 溝断面 (北から)



1 04-2-2 2溝 (西から)



2 04-2-2 2溝断面 (北西から)

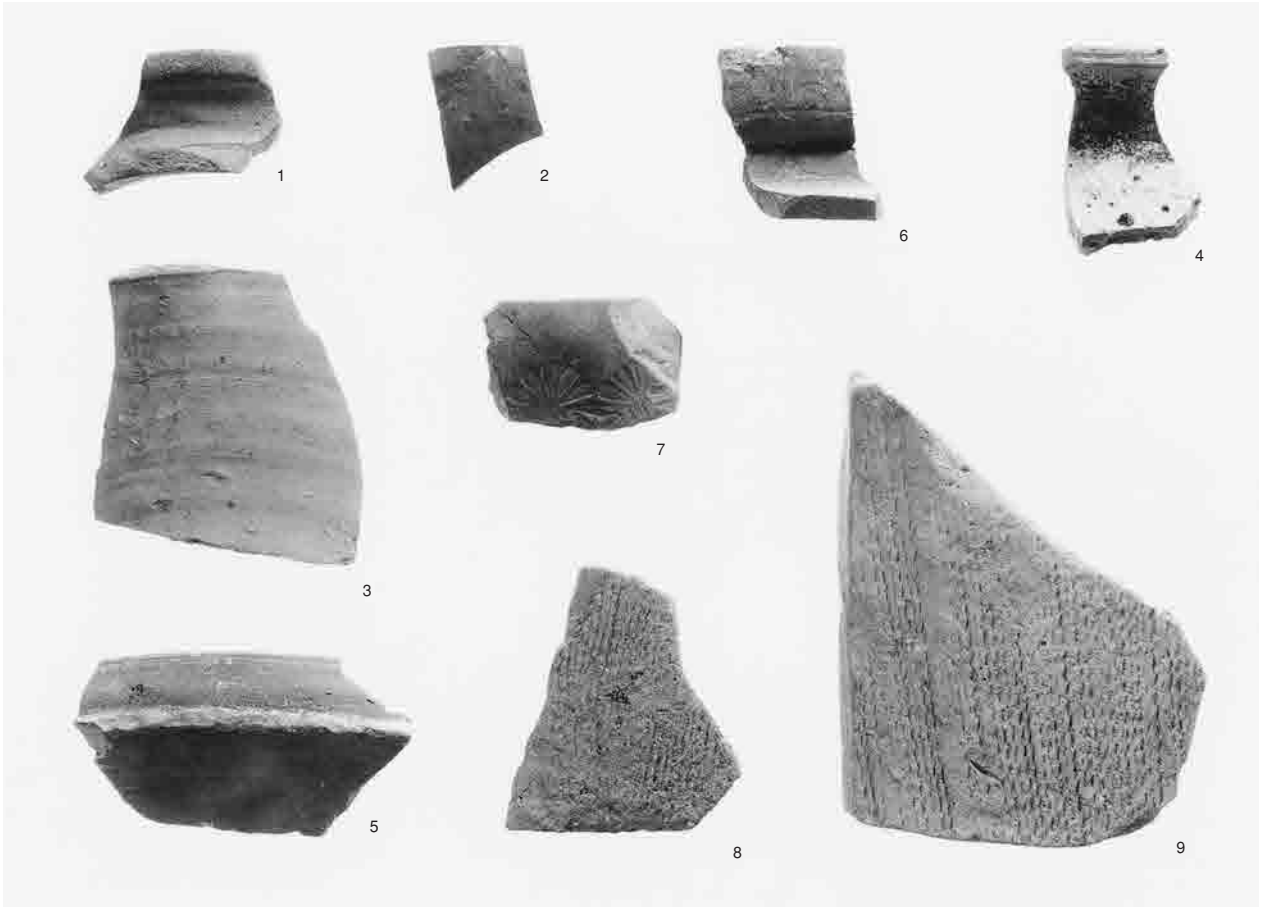


1 04-2-2 5溝 (北西から)

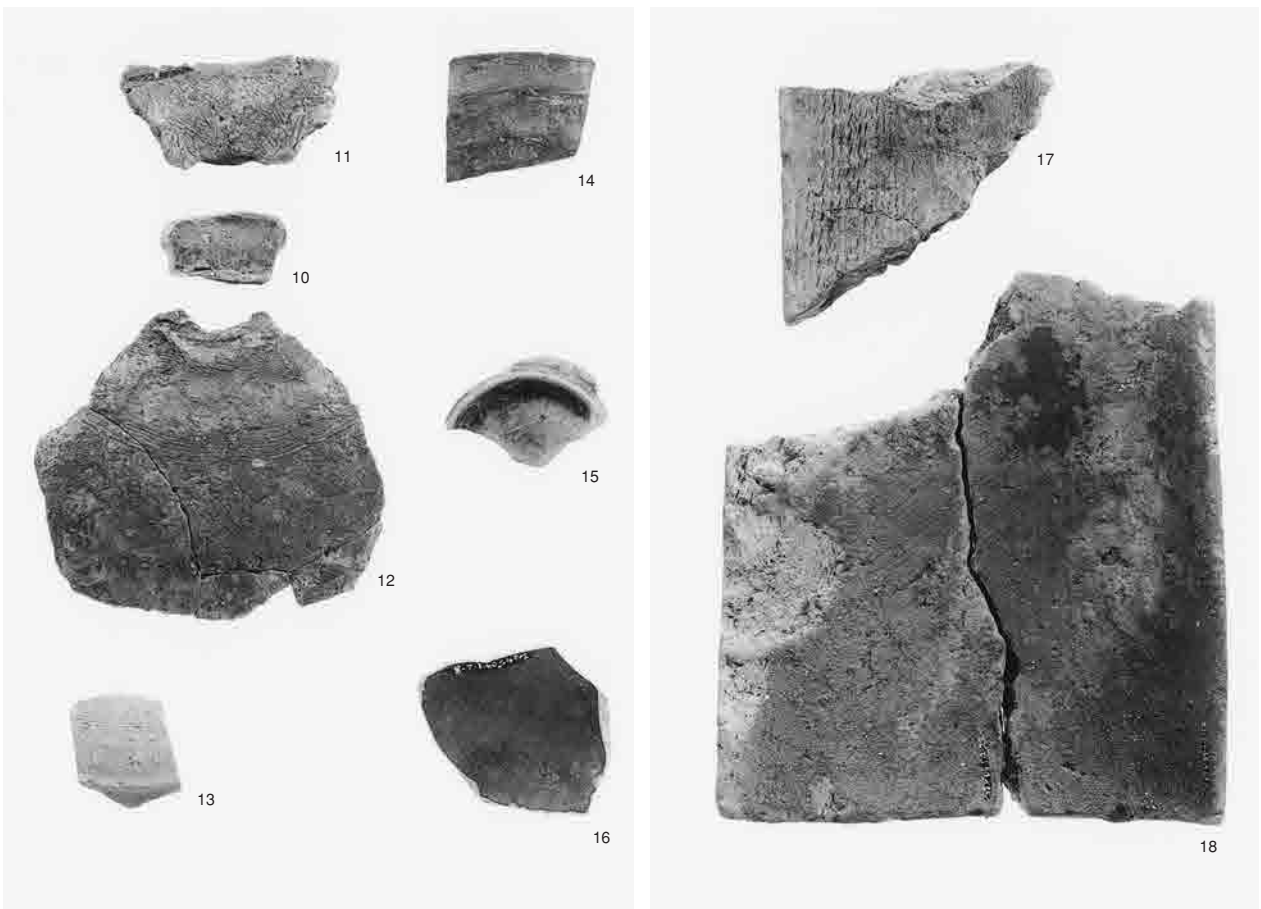


2 04-2-2 流木出土状況 (南西から)

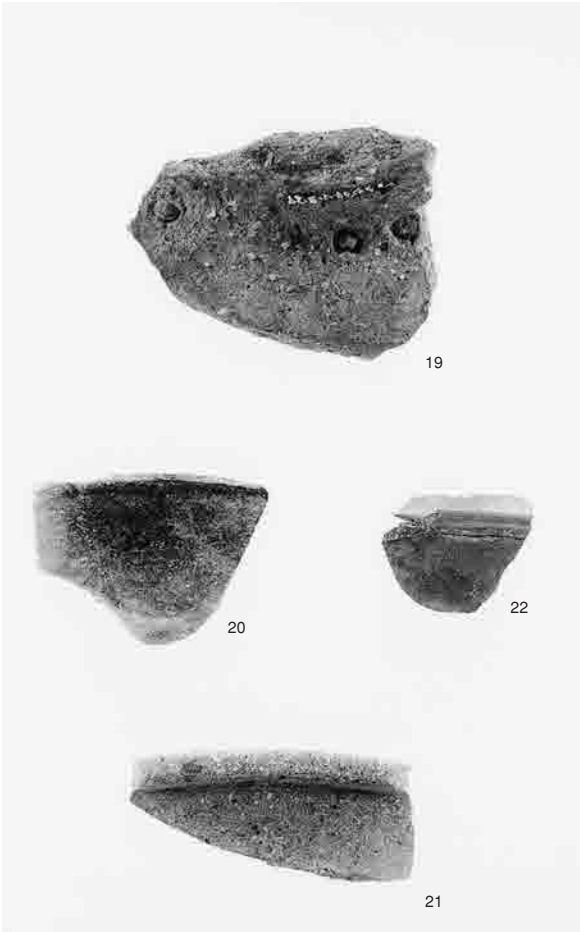




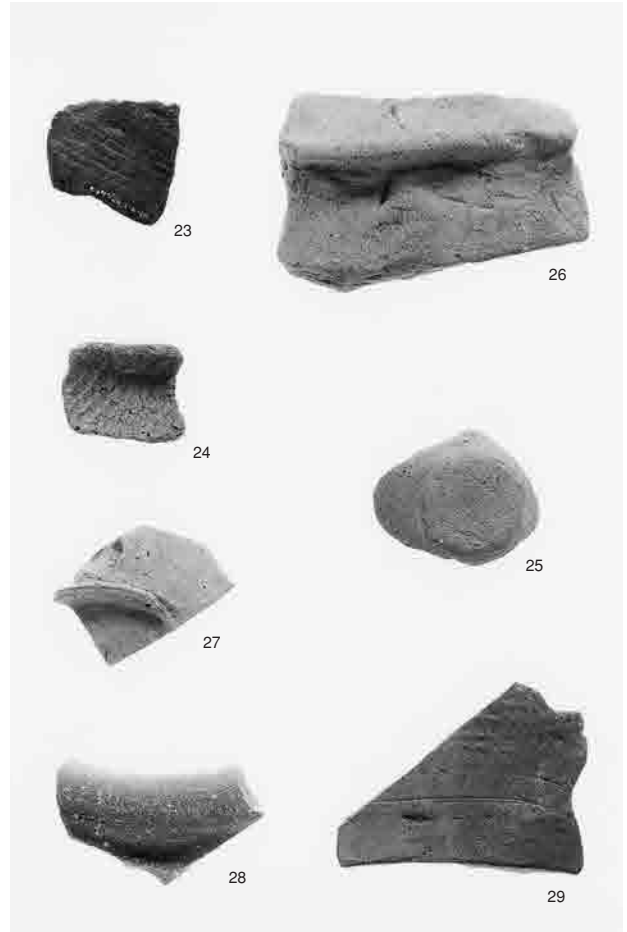
1 04-1-1 出土遺物



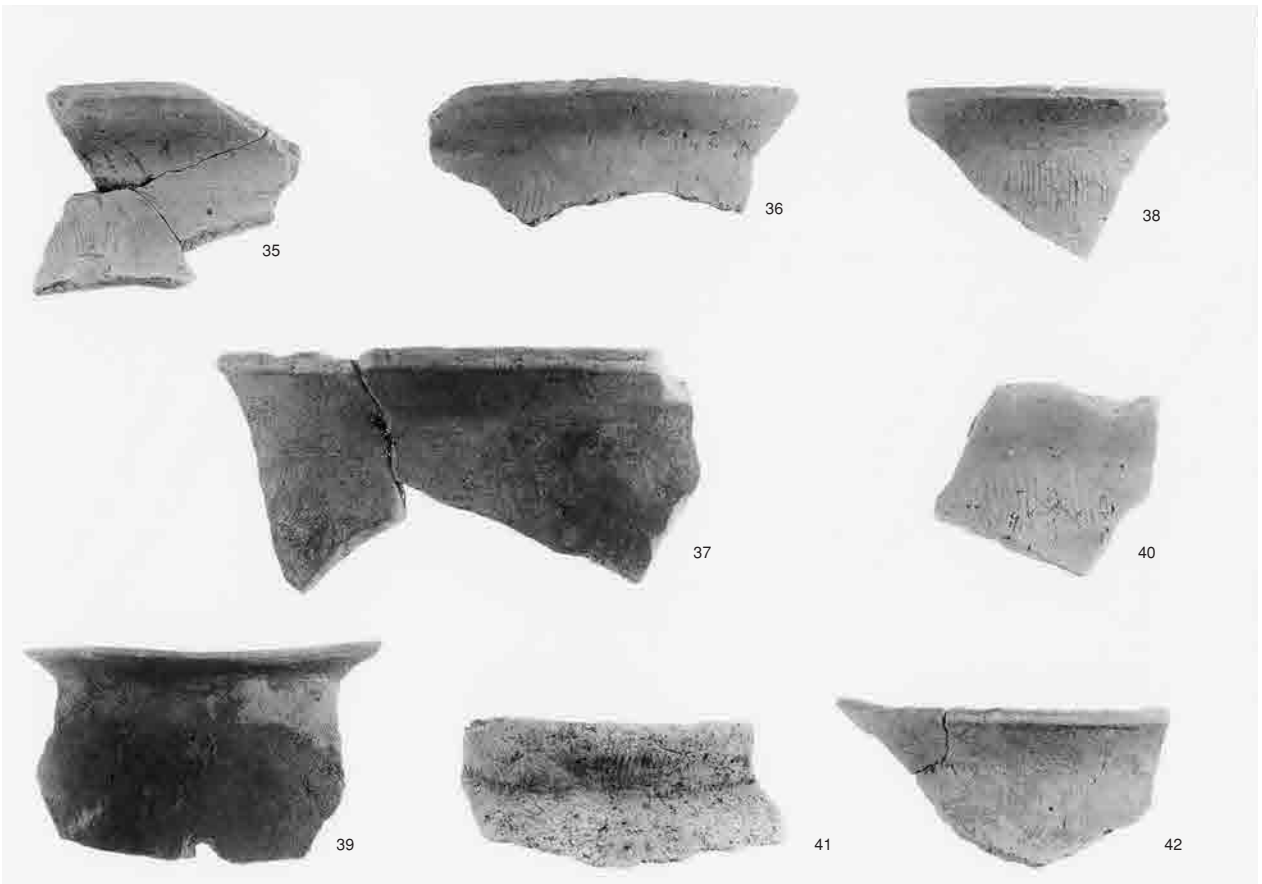
2 04-1-2 出土遺物



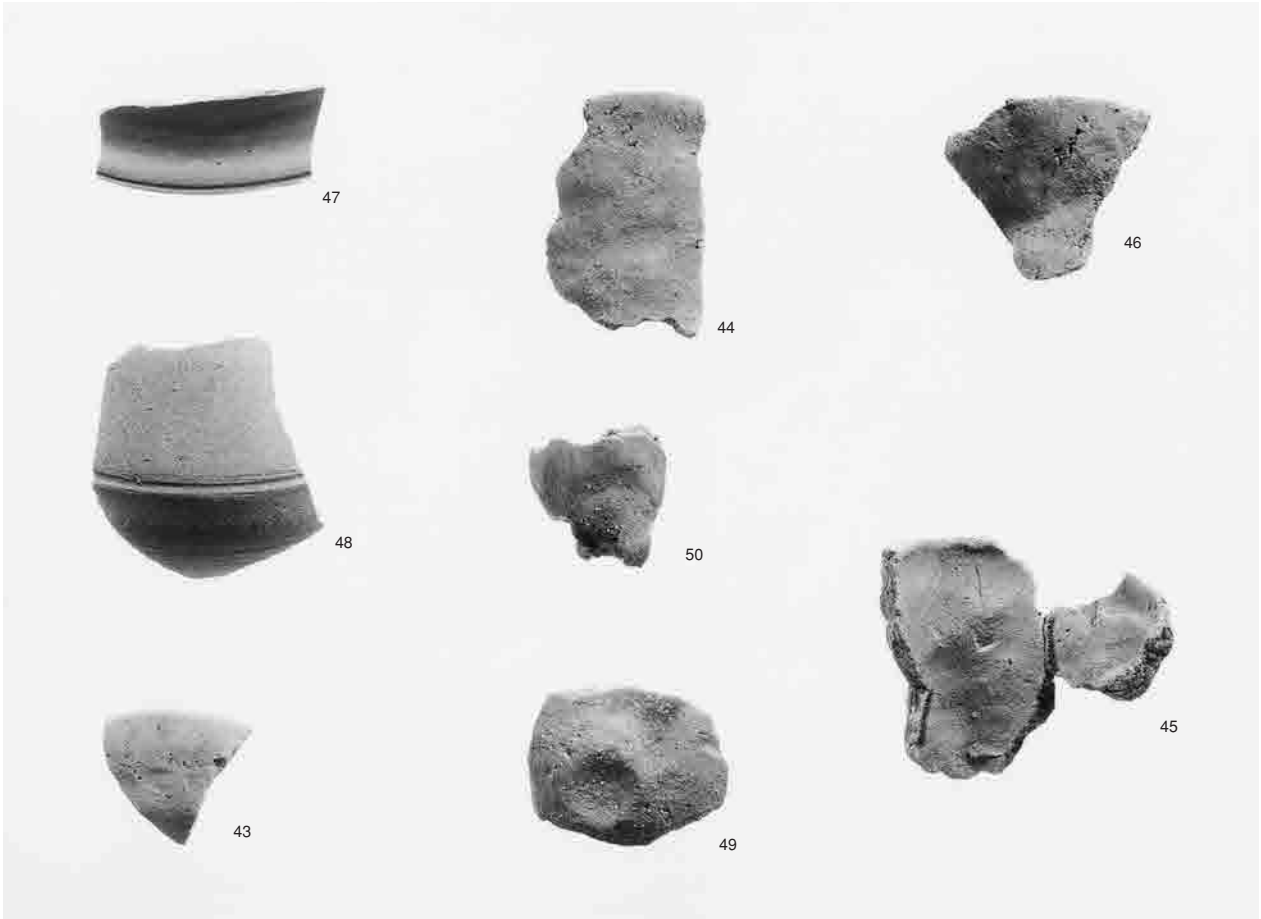
1 04-1-3 出土遺物



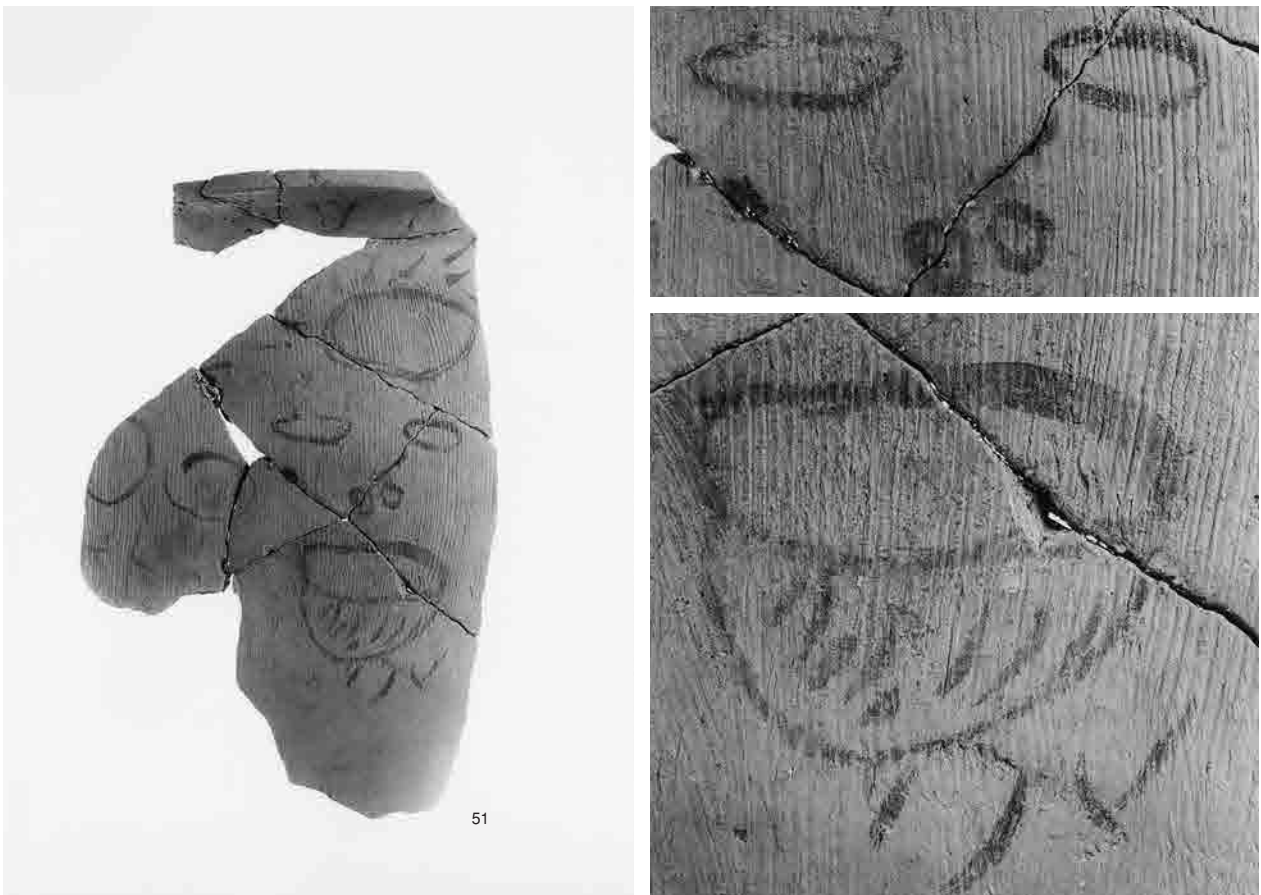
2 04-1-4 (東半) 出土遺物



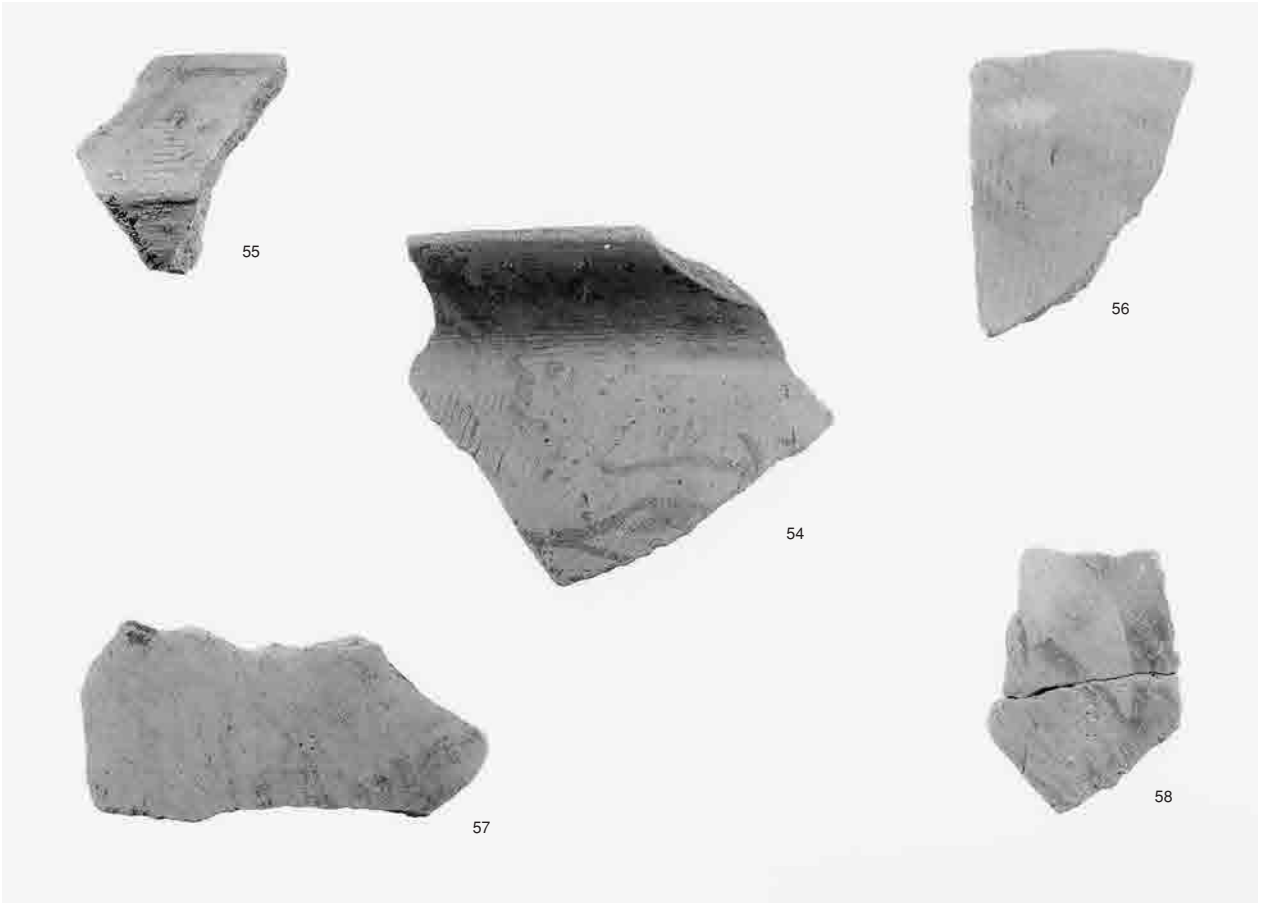
3 04-1-4 (西半) 出土遺物 (1)

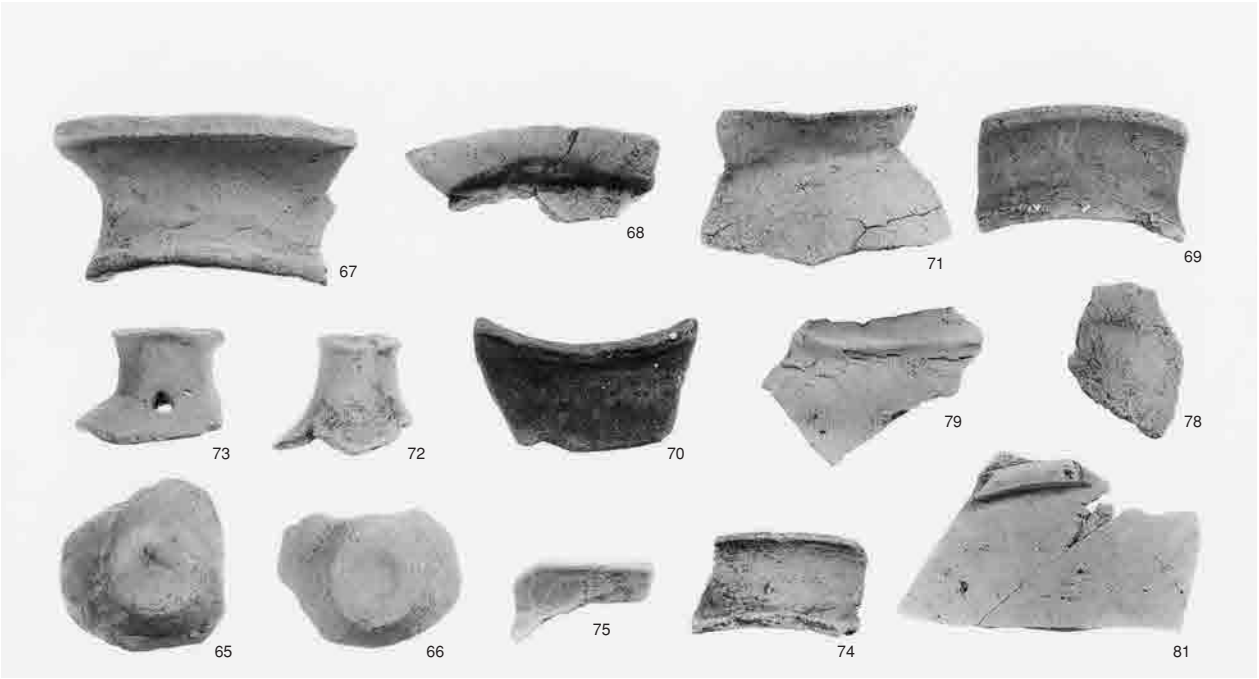


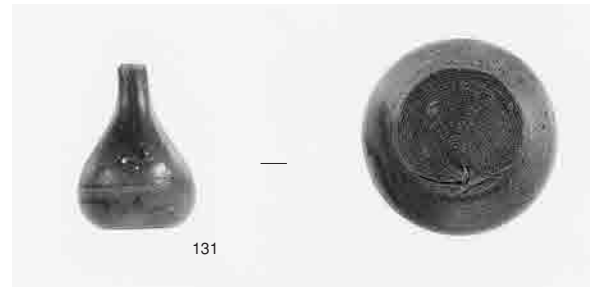
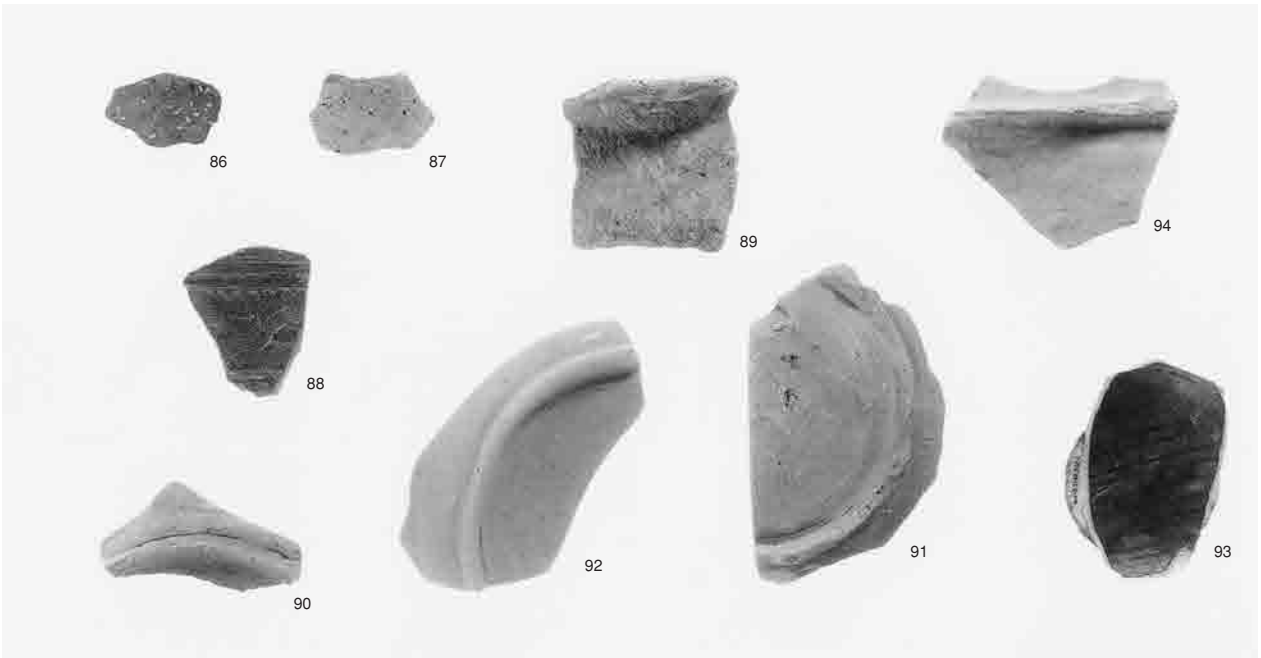
1 04-1-4 (西半) 出土遺物 (2)

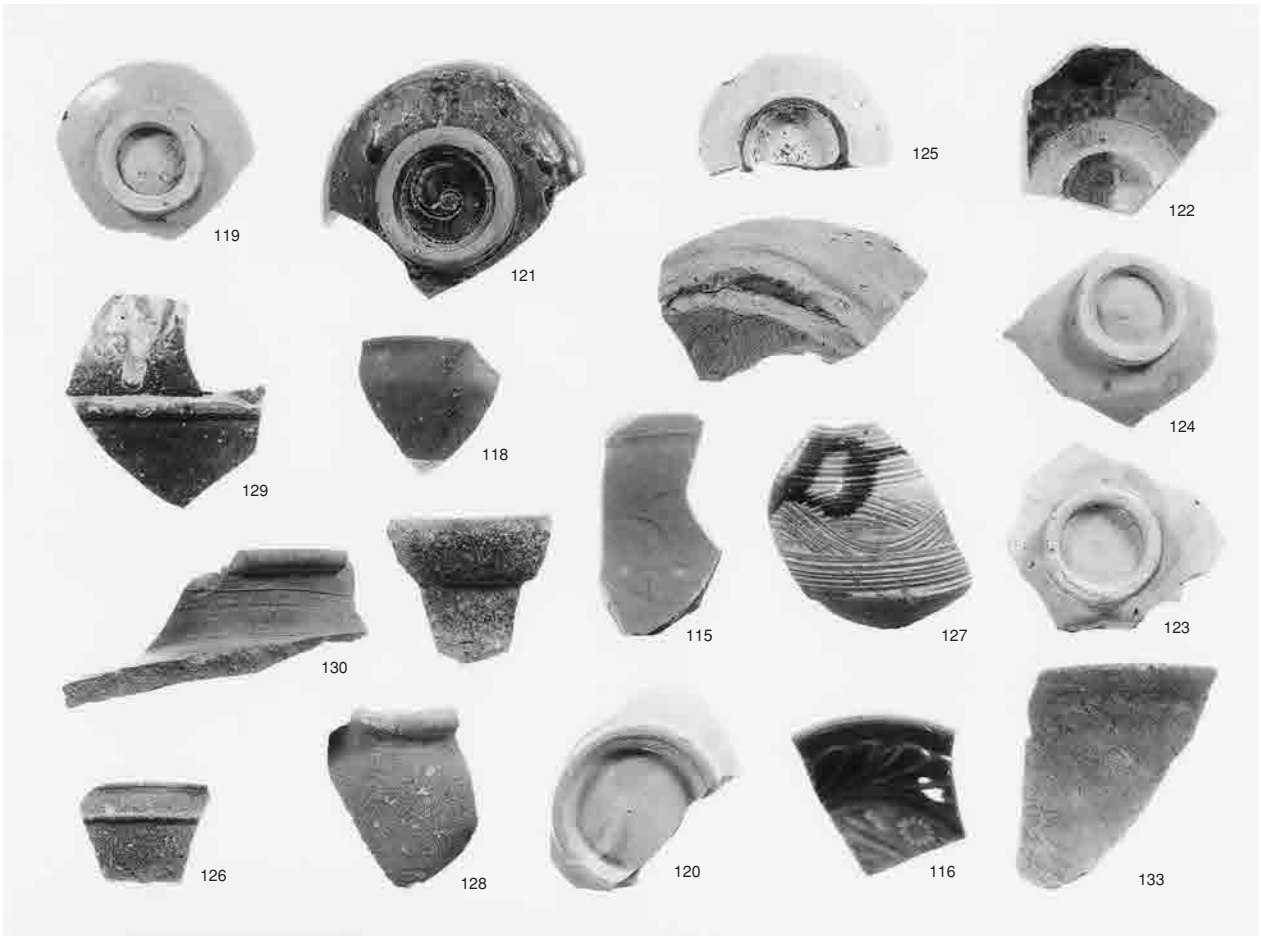
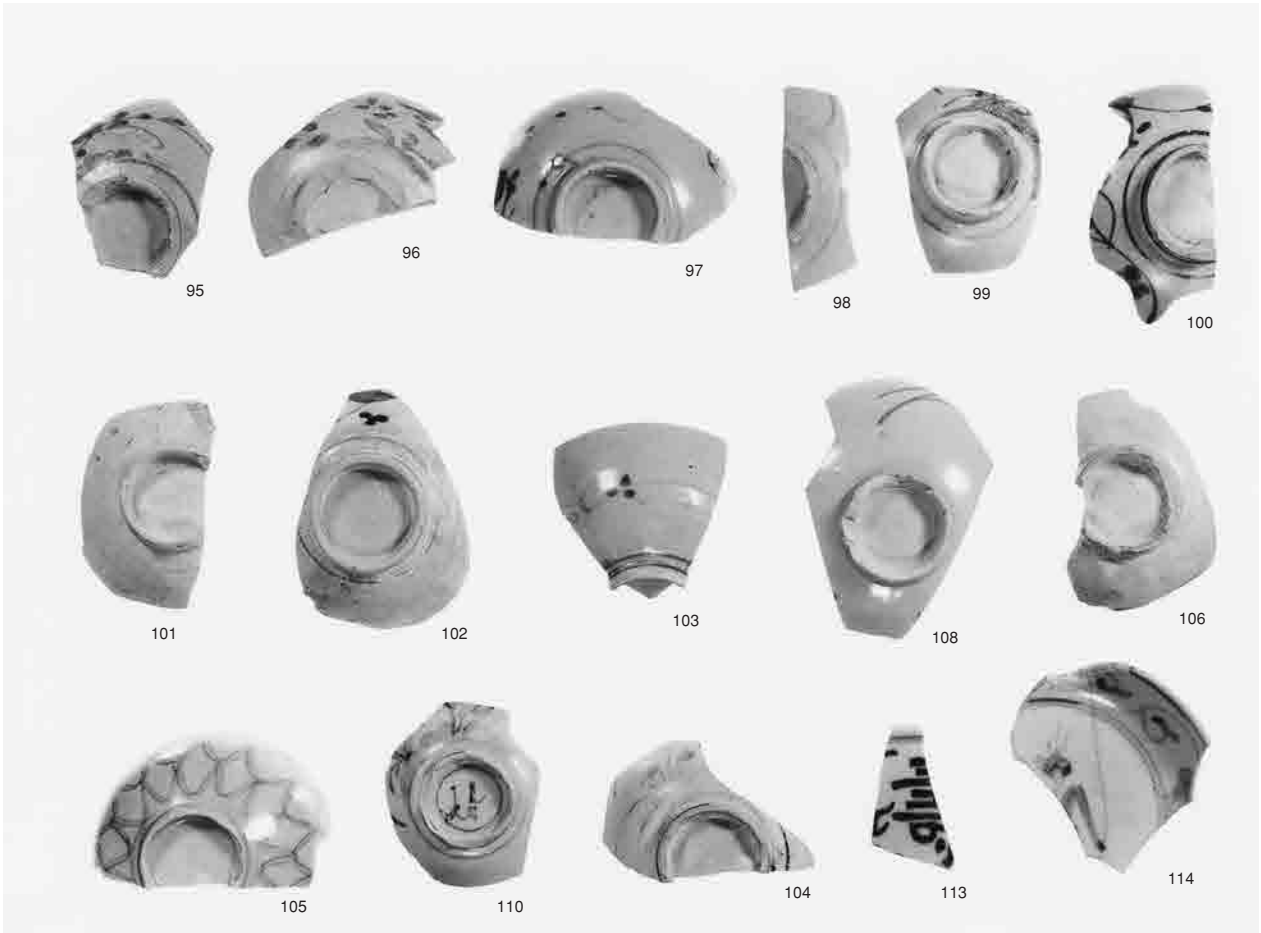


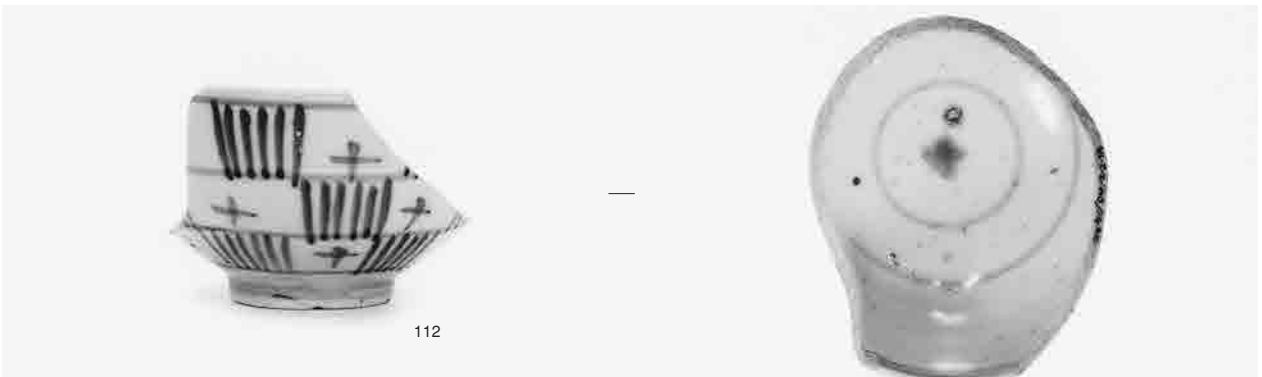
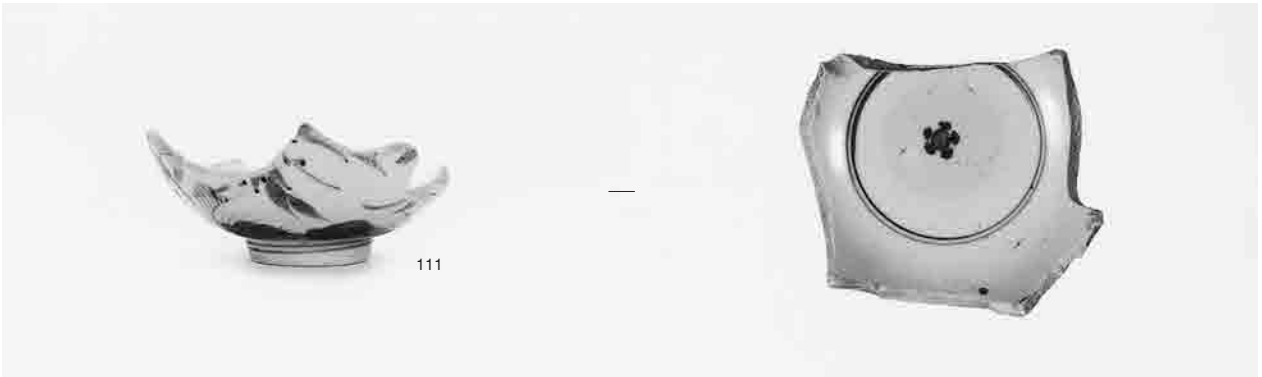
2 04-1-4 (西半) 出土遺物 (3) · 人面墨書土器



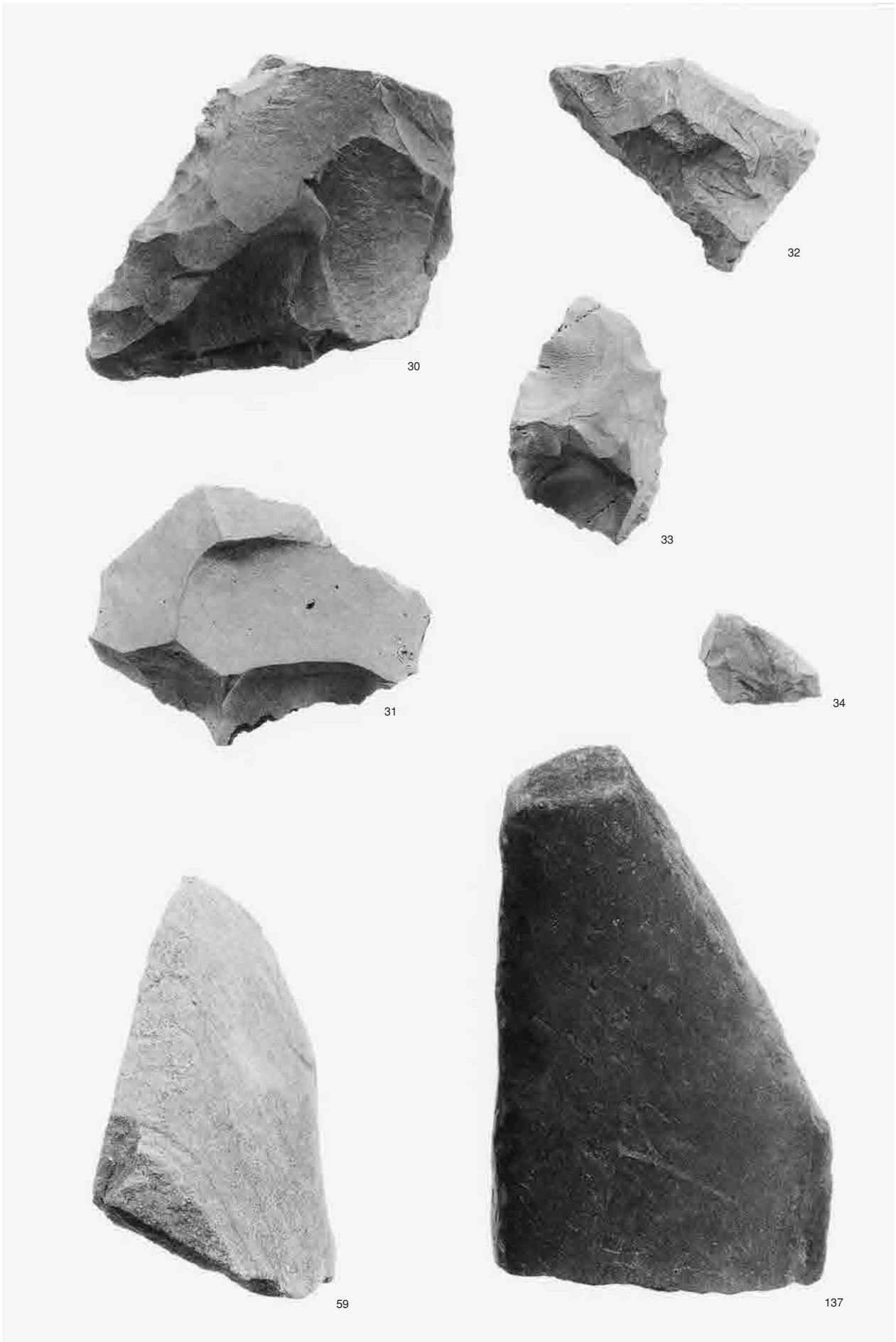






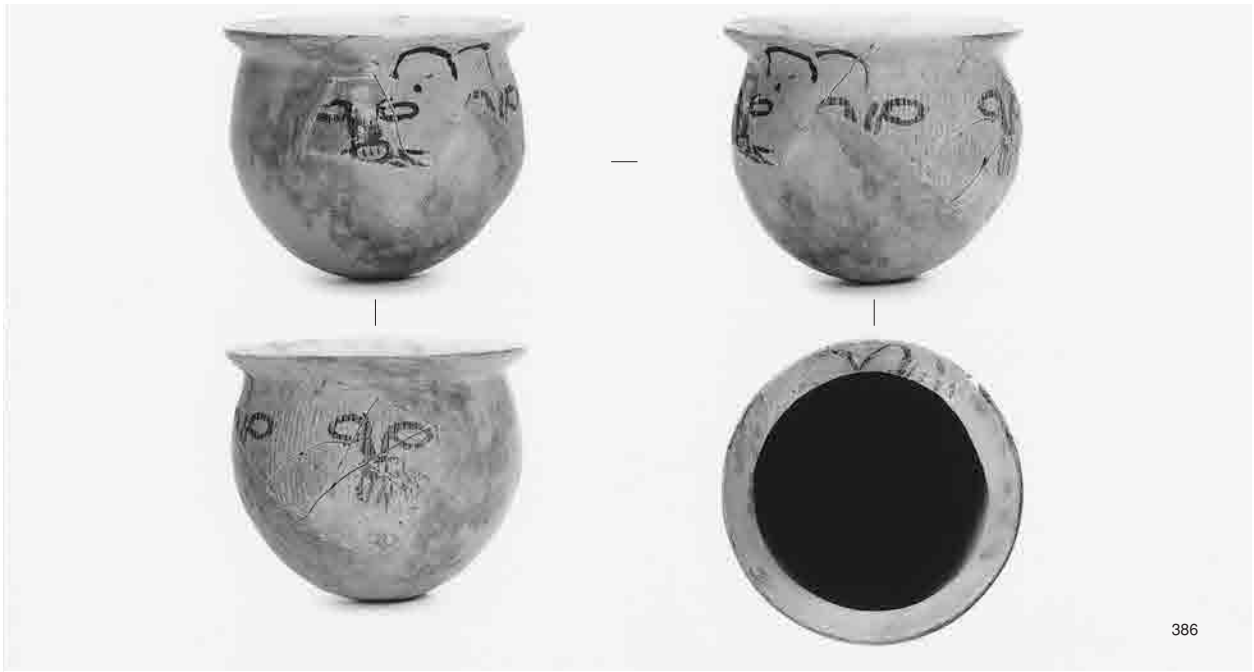




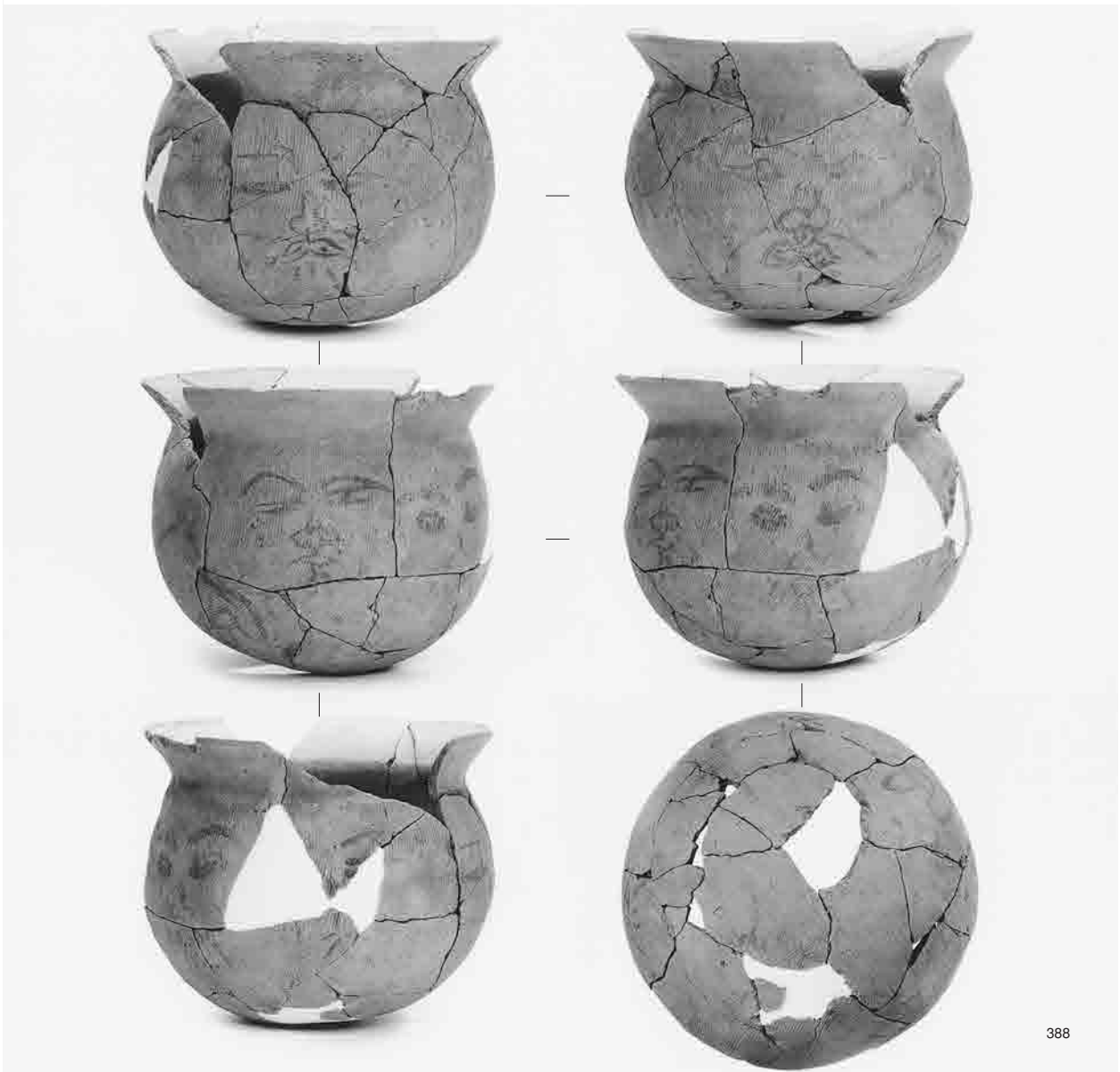


04-1·04-2 出土石器





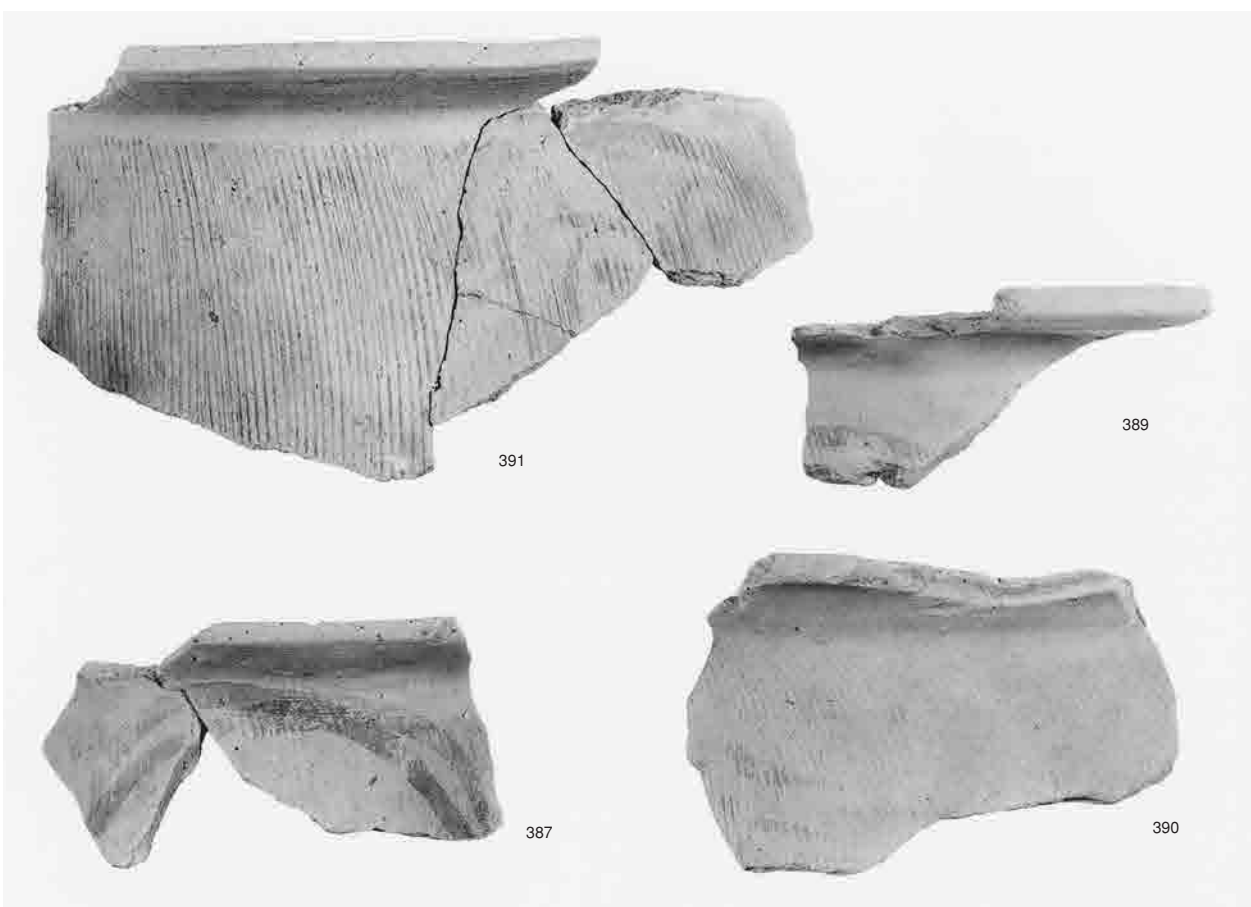
386



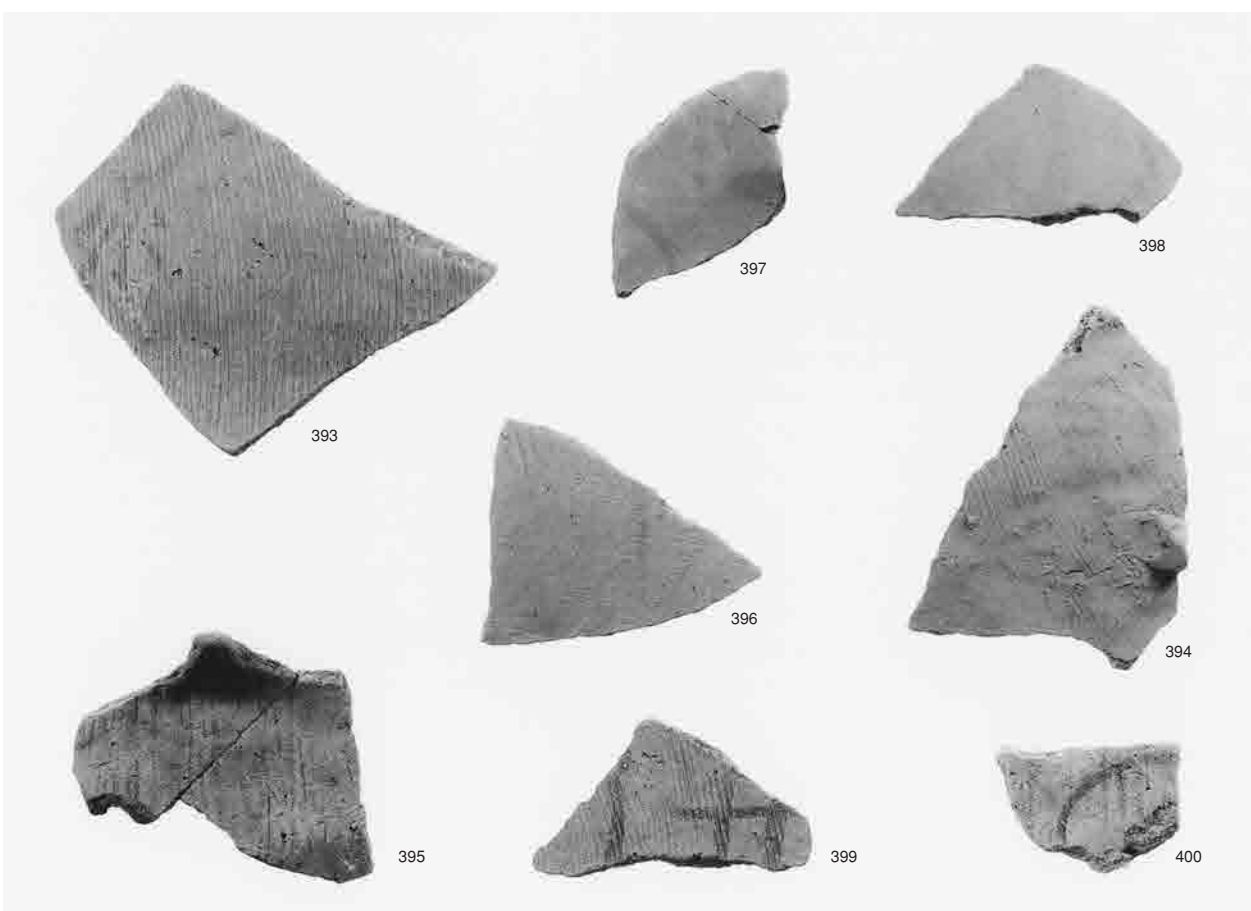
388

図版 29 讚良郡条里遺跡(その1) 出土遺物(1) 人面墨書土器〔1〕

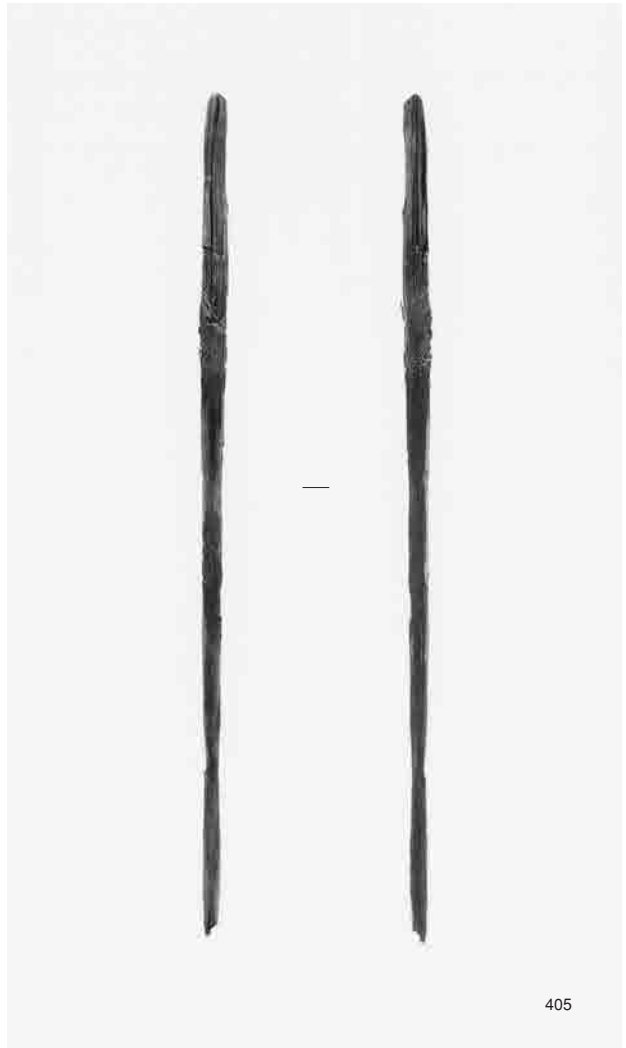
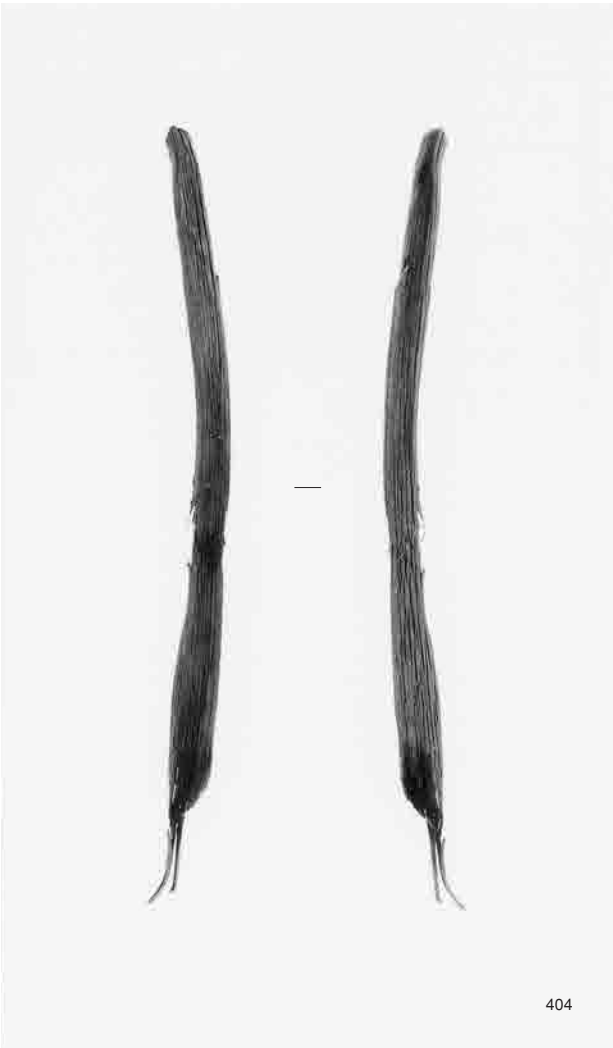
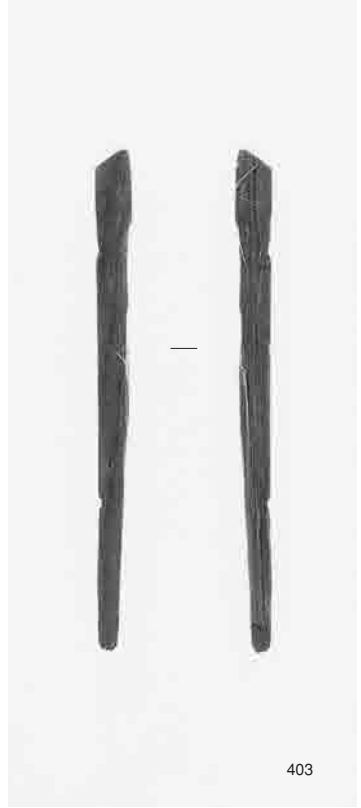
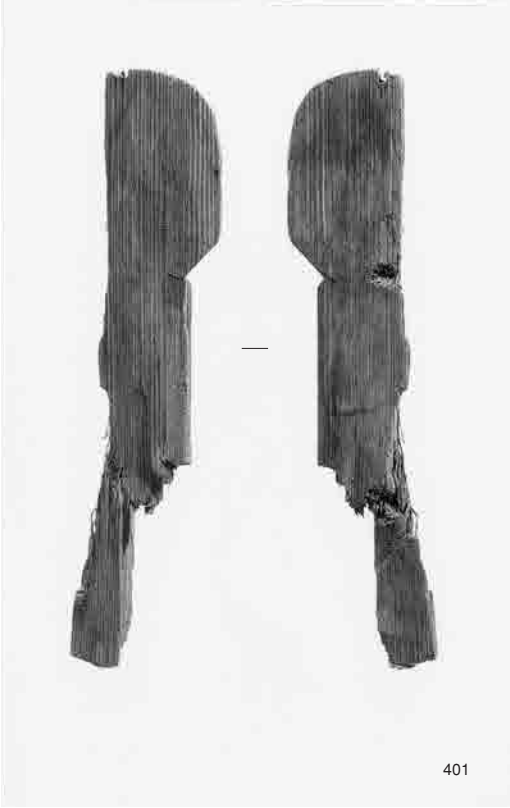
A区溝27・28 (386) A区溝27 (388)



A区溝27 (387・389~391)



A区溝27 (393~400)



A区溝27 (401・402・404・405) A区溝28 (403)

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第142集

## 小 路 遺 跡 Ⅲ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2006年 3月31日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号